
むかつくけれど

柳瀬七海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

むかつくけれど

【Nコード】

N9888F

【作者名】

柳瀬七海

【あらすじ】

今時の若い子って。私がそんな言葉を口にするようになるとは。きっと私達も言われていただろうその言葉。だけど、こんなんじゃないかったよね？とつくに適齢期を過ぎてしまった。このまま仕事に生きるものいいよな、そうは思っけれど姉貴の子供と一緒にいるとそれはそれで羨ましくもあり。三十路女一生懸命やってるつもり…だ？！

鼻にかけた笑い

「お疲れ様でした」

「お先に失礼しますー」

就業終了の鐘が響いてまだ15分もたっていないのに、まだ声の張る可愛い後輩達は波がひくようにいなくなってしまう。

本当は私だつて帰りつていうのに。

書類が山積みになった机に目を落としながら、深くため息をついた。

パソコンを凝視しすぎて目が疲れる。

肩も張る。

背中も痛い。

何年か前までは同じ時間残業してもそんな事なかったのに。
やっぱり確実に年は取ってるんだ。

周りを見るも人は疎らで、このフロアーで女は私一人。

あんまり大きくはないものの、中小企業と呼ぶには小さいような。

そんな会社で早9年。大学を出てから働いている。

この年で同期の女子は皆結婚している——なんていうのは昔の時代だろう。

今は独身貴族さながら、バリバリ働いているもの同じ世代の約半数。
お局様宜しく、慣れた会社で仕事をこなしている。

でもみんな要領が良いのか予定があるからなのか、こんな時間まで残っているのは数人だったり。

「お疲れー梨乃、まだ残ってたんだ」

そう話掛けるのは同期の真美。

私の所属は企画室で専ら内勤なのだが、彼女は成績優秀の営業だったりする。

外回りから帰ってきた彼女は”今日は金曜日、行くでしょ？”と。

OKとばかりに親指を突き上げ、パソコンに向いきりのいいところで終了ボタンをクリックする。

この年で流石にオールはきついがまだまだいけるくちの私達。お酒に吞まれて介抱されるのは20代前半まで。ここ数年は居酒屋からショットバーへとランクアップし、量より質のお酒を楽しんでいる。

少なくなった机の上を整理して、ロッカールームへと急いだ。良かった今日は何となく出かけるような気がしたんだよね。先月買った、ワンピースを着て来て正解だ。

「お待たせ」

真美は会社の喫煙スペースで煙草をふかしていた。

高層階にある私達の会社からの夜景は見事なもので。

指に煙草を挟み、遠くを見ている真美は女の私からみてもかっこいいと思わせる。

大人の女の色気ってやつなのだろう。

今でこそ年相応の顔なのだが、入社当時、学生っぽさがぬけ切らない私達とは全く違う大人びた顔に冷たそうな印象を持った。

あの頃から真美は全く変わっていない。

真美の戦闘服である細身のパンツスーツはいかにも出来そうな女の象徴だった。

「待ったよ」

と軽く笑い煙草の火をもみ消す仕草もまた似合っている。

「さあ行こうか」

こうして私と真美は行きつけのショットバーへと足を向けたのだった。

さすがに金曜の夜とあって店はすでに人がいっぱい。

テーブル席は既に埋まっており、私達は仕方なくカウンター席に腰を下ろした。

「お疲れ」

居酒屋では見られない、クリスタルのビールグラス。

乾杯とグラスを合わせると

チリーンと高い澄んだ音がした。

乾いた喉をビールが潤していく。

3分の2程を一気に飲み干し、真美と顔を見合わせて笑う。

やっぱりこうでなくちゃねと。

そう頻繁ではないものの私達は会社の飲み会にも顔を出す。

そこで見る後輩達と言ったら……

私、弱いんですとばかりにちびりちびりと飲む子もいれば（本当は結構いけるくせによ）

コップ半分一気にいったと思ったら、急にベツタリ男の子に引付く子やら（完全に計算だ）

兎に角、女の子を武器に仕掛けてくる子ばかり。

純粹にお酒を飲む子がいるとは思わないし、多少は解るよ、でもあそこまであからさまな態度をみていると、美味しいお酒も美味しくなくなるわけで。

やっぱり気の合う人と飲むのが一番だよねと毎回思ってしまうのだ。

だからと言って上司と飲むのは嫌だというわけではない。

この年になるとちょっかい出す人なんていないし、かえってゆつくり出来るから。

その時は後輩達が活躍するはずなのにどういうわけだが、みんな都合が悪くて出席率も大幅ダウン。

そんな年だと思いたくないけどつい真美たちと

「最近の子はー」

なんていつてしまつて、きっと私達も言われたんだよね。

なんて。

おばさん化してしまっている。

軽くサイドメニューを頼み、2杯目のジンライムをゆっくり味わいながら、真美と他愛ないおしゃべりをし今週の疲れを癒す。

そんなふとした会話の合間に一つあけた席の客の声。

低く響くその声は私の耳にダイレクトに入り、思わず振り返ってしまった。

横顔しか見えなかったが、きりつとした眼が印象的な男の人だった。それより、何より声が——ストライクだった。

すると、真美が私の耳元で
「さつきから私も、かっこいいなって思ってた」
と。

かといって声を掛けるわけでもないのだが。

その後も背中越しに彼がマスターと話す声に聞き耳立っている自分がいた。

何度もここに来ているのだが、初めて見る顔だった。

いつもはテーブル席だから気が付かなかったのだろうか？

マスターと話す彼はかなり親しそうな感じ。

無論、会話の内容はよく聞こえなかったのだが。

真美は私を盾に彼を見ているようで

「あの声で耳元で囁かれたら、ゾクゾクしそう」

なんて言い出して、思わず想像してしまい、顔が熱くなってしまった。

真美は

「梨乃つてば高校生じゃないんだから」

とけけら笑いだした。

思わず後ろを確認。

聞こえてたりしないよね、今の。

その笑い声に反応したのか、ちらりと此方を向いた彼と目が合った。
やばっ、正面から見た顔も好みかも！と思った瞬間彼は

馬鹿にしたように、フンツと鼻で笑った。

一気にクールダウン。

フンツって何、フンツって。

顔がいいからって（声もいいけど）性格悪そうだよこの人。
何だか興ざめして残りのジンライムを一口で飲み干した。

真美は

あらら…

と呆れ顔だ。

そのお陰で背中を気にする事なく終電の時間まで過ごせたのだが、
すっきりしない夜でもあった。

年には勝てない……

自宅に着き、そーっと玄関の鍵を開けた。

私は実家に住んでいる。

会社からもさほど離れていないこの場所から動けないでいる。

交通の便もよく、朝、晩の食事もありつけ、洗濯までやってもらってどうしてここから出ようなんて考えるだろうか。

幸いなことにここ3年は、一緒にいたいと思える相手もないし、自分で言ってて虚しくなるけど。

ただいまー一応声には出さずともそう言ってヒールを脱ぐと、奥の部屋から泣き声が響いていた。

姉貴が10日前に出産して、我が家に里帰りしたばかりだった。

少しだけ開いていたふすまから零れる電器の明かり。

ただいまと声を掛け覗いてみると

姉貴は丁度オムツを替えているところだった。

「おかえり、梨乃。あんまり呑み過ぎちゃ駄目よ」

母さんみたいな口調で窘められた。

肩を窄めて苦笑する。

ベビーベットの脇に屈みこみ、果歩と名づけられたばかりの姪っこの顔を覗きこんだ。

赤ちゃん特有のいい匂い。

その匂いは人の神経をほぐすのだろうか、愛しいという感情が湧いてくる。

姉貴曰く、この匂いをかいでいると夜中に何度起こされも全然苦し

やないのよね」との事。

以前、友人から電話で同じ事を聞いた時は、若かった事もあってかちっとも解らなかったけど、今は違う。

その気持ちがよく解った。

実際聞くだけでは解らないからね匂いは。

そのベットの向こうで何やら蠢く物体。

ではなく姉貴の上の子、雅也だった。

そっぴい雅也の時は義兄さんの仕事で北海道に行ってたからこの匂いを嗅げなかったんだよね。ふとそんなことを思い出した。

初めての出産で心細かっただろうに、でも確かあの時は母さんが北海道にすっ飛んで行ったんだっけ。

それにしてもこんなに、近くで泣いているのに、全然起きないんだよね。

感心感心。そう思っていたら

「今日は梨乃ちゃんと寝るってきかなかったんだから」と。

始めは待っていると頑張って起きていたらしいのだが、どうやら8時半が限度だったようで、まるで電池がキレたようにソファで寝てしまったらしい。

孫に甘ーいおじいちゃんに運ばれて布団にやってきたそうだ。

まさに天使の寝顔だ。

明日遊んであげるからね」と雅也の頭を撫でて部屋を後にした。

キッチンで冷たい水を一口飲むと、熱めのシャワーを浴びた。

鏡に写る自分の身体。

数年前までは肩口を弾いていていた水滴も今は肌に馴染んでしまつて……

髪を洗っても、長年染め続けてしまったせいか指に引っかかる。

ここも……

これ以上は止めよう、虚しくなるから。

こんなことを考える日があるなんてね。

思わずでる独り言。

そういえば、今日会社でも似たような事、言ってたっけ。

年には勝てないのね。

せめて結婚さえしていればなんて。

これっぽちも思っていなかったはずなのに。

姉貴がいるからだろうか、こんな事を思うのは。

姉貴を見ていると日々の生活に追われていながらも、子供と楽しそうにしているのがよく解る。違った人生もあったかもと。

今から思い起こせば、そうなくてもいいなと思った人がいないわけではない。

タイミングがね。

そう世の中すべてにおいてタイミングが大事なのだ。

恋にせよ、仕事にせよ。

適度にアルコールが回ったせいか妙にいろいろなことを考えてしまった。

ぐっすり眠る為にも、と思い冷蔵庫から程よく冷えたビールを1本取り出した。

さっきの店のグラスにはかなわないけど、何年か前に衝動買いしてしまったビールグラスに勢いよくビールを注ぐ。

程よく泡が立ち、一気に飲み干す。

2回めを注ごうとした時、キッチンのドアが静かに開いた。

「また飲んでるの？」

果歩を寝かしつけた姉貴だった。

姉貴は冷蔵庫から冷えた麦茶をグラスに注ぎ私の前へと腰掛けた。

「「お疲れ様」」

そう言っでグラスを合わせる。

「同じ麦からできるのに、えらい差があるわよね」
そう言いながら、コクリと喉を鳴らした。

「今年の夏は暑そうだから、ビールが美味しそうに見えるんだろうな。家に帰ったらあいつにはビール禁止令でもだそうかしら」
と笑う姉。

結構飲めるんだかこれが。

授乳中は我慢しなくちゃねとおどけて笑う姉が可愛くみえた。

姉貴は麦茶を1杯飲み終わると

「明日は宜しくね」

と部屋に戻っていった。

この宜しくが本当にいろんな意味で”宜しくね”
になるなんて思いもせず眠りについた。

翌朝

「起きて〜」

という大きな声と共にお腹にドカツと衝撃が。

「うげっ」

へんなうめき声をあげ目を開けると、満面の笑みを浮かべた雅也の顔。

「おはよう」

「おはよう」

今年4歳になる雅也は子供らしく加減というものを知らない。何の前触れもなくこやって乗っかられる事の痛い事、痛い事。

やつのことで起き上がりまだ鈍い痛みを感じるお腹に手を当てた。すると

「どうしたの？お腹痛いの？」

と心配そうに覗き込む雅也。

だから、お前が乗ったからだよ！！

といってやりたかったが、この顔をみたら言えるわけがない。本当はあんまり大丈夫じゃないけど

「大丈夫だよ」

といってベットから立ち上がった。

早く早くと雅也に手を引かれリビングへと。

「あら、梨乃早かったじゃない」

母さんったらその早い理由がわかっていくせに！

「お蔭様だね」

冷蔵庫から冷えた麦茶を一杯。

ちよつとすつきりした。

昨日のお酒が少しだけ残っているようで軽い気だるさを感じる。

あんまり食べたくはないのだがテーブルに用意された焼き鮭を見てお腹が反応してしまう。

じゃあ顔を洗ってくると洗面台に向かうとそこに雅也も付いてくる。

可愛いんだよ、こいつ。

「雅也はもう食べたの？」
と聞くと

「そうだよ朝から果歩が煩くて、すつごく早くに目が覚めたんだ」
なんて胸を張っている。

夜と朝は違うのね。

ちよっぴりお兄さんになった雅也を頼もしくも思えた。

小さな恋人

「いただきます」

手を合わせて、朝食を食べ始める。

休みの日位、キッチンに立たないといつまでたってもお嫁になんて行けないわよ。

母の小言が聞えた。

すると、

いいじゃないか、休みの日位ゆつくりしても

と母に聞えないように小さな声で私に囁き微笑む父。

姉貴が結婚してからは暫く寂しそうだっただもんな。

夕食の時なんか、もう座らなくなった姉貴の席を遠い目でみてたっけ。

心配しなくても暫くいるからね。

心の中で呟いた。

「梨乃ちゃん、まだ〜。早く食べてお出かけしようよ〜」

私の隣でせつつく雅也。

「ちょっとだけ待っててね。直ぐに終わるから。ところで今日は何処行くか決めたの？」

目の前の焼き鮭を突つつきながら雅也に聞いてみる。

「うん、今日は水族館に行きたいの！ 昨日ねテレビでやってたん

だよ。イルカさんがね、すっごく高くにジャンプするんだよ。凄
んだから」

目を輝かせながら少し興奮気味に話す雅也。

「了解！　じゃあ、用意してきなね」

「はい」

そう言っただけ荷物の置いてある部屋に一人向かっていった。

「あのこ本当に嬉しいのね。きっとテレビを見るの忘れてるわ」
姉貴が果歩を抱っこしながら笑っている。

「テレビって？」
と聞く私に

「子供番組よ。風邪引いて寝込んでたって這ってくるくらいなんだ
から。よっぽどのよ」

うちのテレビはニュース番組を映していた。
慌てて父がチャンネルを変えようとするのだが

「いって、父さん。本当に忘れてるんだから」
そう言う姉貴に続いて母は

「梨乃は子供とお年寄りにはモテるんだよね、昔から。ちょうどい
い年頃の人には……何処かにいないのかしら？」

母さん、独り言にしては大きすぎるから声。

私は父と姉貴を交互に見て肩をすぼめた。

「ご馳走様。さてと私も用意してきますか！」
お皿を片付け、着替えるために部屋に戻った。

水族館かぁ。

やっぱジーンズだよな。

それに今日はスニーカーか。

きつと動きまわるんだろうからな。

久しぶりに履いたジーンズ。

少しお尻の辺りがキツイような気もするけど、気のせいだと思い込むことにして。

日焼け止めをたっぷり塗っていざ出陣だ。

私は車で行く気満々だったのに

「電車に乗るんだ〜！」

の雅也の一言で電車に決定。

仕方がなく父に駅まで送ってもらうことにした。

母に出かけ際

「はい、これ」

とお昼のお弁当を渡された。

水筒は重くなるから飲みたくなったら何か買って頂戴との言葉と共に。

「「いつてきます」」

鼻歌を歌いながら雅也はご機嫌だ。

迷子にならないように離れちゃ駄目なんだからね
というと

「解ってるよ」

といったちょまえの返事をした。

つい最近までそんな言葉知らなかっただろうに。

子供の成長って凄いもんだと感心してしまう。

駅に着くと父は

「何かあったら直ぐに電話するんだぞ。何処でも迎えにいつてやるから」

といってくれた。

本当は一緒に行きたかったんだよね。

お昼に自治会の集まりがあるそうでした。しぶしぶ断念したと母が言っていた。

「じゃあ」

と駅に向かった。

「梨乃ちゃん。切符自分で持つね」

雅也は嬉しそうに言うのだが

確か、未就学児は無料だったような。

私は定期を持っているから切符は買わないんだけど。

目をキラキラさせてせがむ雅也が可愛くて思わず解ったと言ってしまった自分。

仕方なく、一番安い区間の切符を買い雅也に持たせた。

すると嬉しそうに、切符を高く上げてみては、ポケットにしまった。

そして少し経つとまた取り出してにこにこ眺めてみたり。

まだ水族館に着いてないのにそんなに喜んでいいのか？　って思ってしまった。

途中、突然雅也が後ろ向きになって

「窓の外をみたいー」

と座席にひざ立ちをした。

私は慌てて雅也の靴を脱がした。

「雅也、こっやって乗るんだったら靴は脱がないと人の迷惑になるんだよ」

土曜の午前中、車内は空いてはいたがこういうことは見たときに言わないと忘れちゃうからな。最近は専ら車で移動する姉貴。

電車に乗るなんて滅多にないだろうからな、ちゃんと覚えていてくれるといいんだけど。

電車に揺られる事30分。

目的地の水族館に到着した。

私はひざまずき、雅也の目線に合わせて言い聞かせた。

「いい、見たいところは何処でも付き合っから、絶対急に走り出したり、何処かに行っちゃ駄目なんだよ」

「はい！」

とってもいい返事が返ってきた次の瞬間。

雅也は前触れも無く、水族館の入り口に向かって走り出した。

「梨乃ちゃん、早くおいでよ」って
今言ったばかりだっていうのに、水族館に入る前でどっと疲れが出てきたのは気のせいなんだろうか？

「梨乃ちゃん、早くくつてば」

屈託ない笑顔を浮かべ手を振る雅也。

頼むから迷子にだけはなってくれるなよと願わずにはいらなかった。

水族館へ入ってからの雅也のはしゃぎようといったらなかった。

”わーすっごい”を連発してあちらの水槽、こちらの水槽へと渡り歩いていく。

その度に、梨乃ちゃんと大声を出しとびっきりの笑顔をみせてくれる。

中でもイルカのブースが一番気に入ったようで、暫くの間、動くことなくじーっとみつめていた。

雅也の先には、最近産まれたばかりの赤ちゃんイルカとよりそう母イルカ。

水槽の中を縦横無尽に泳ぎまわる赤ちゃんイルカの後についてまわる母イルカの姿がそこにあった。

「赤ちゃんとお母さんは一緒なんだね」

ぽつりと呟いた雅也、きつと雅也は母親と妹を思い浮かべているのかもしれないとそう思った。

「雅也……」

きつと、この子も寂しかったんだろうなあ。

”雅也はちつとも赤ちゃん返りをしなくって、助かる反面、ちょっと心配なの”

この前聞いた姉貴の言葉が頭を過ぎった。

私は膝を着き、雅也の隣にしゃがみこんだ。

「雅也、あっちの水槽も見てご覧」

私が促した水槽には、もう少し大きくなったイルカの親子。

「ほら、こっちは少しお兄さんなんだろうね。きっとその隣にいるのは妹で、その後ろがお母さんなんだよ。お母さんはどの子もとても大好きで、いつもそばにいたいって思っているんじゃないかなあ。みてみて、とっても仲良しだよ」

母親らしきイルカの周りをくるくる回転しながら泳ぐ子イルカ達。イルカの言葉はわからないけれど、きつと”大好きだよ”って行っているような気がしてやまなかった。

すると、私の指を、雅也が突然握りだした。

私は雅也の顔を見て、その小さな手を握り返した。その手はとても暖かった。

再び遭遇

大分疲れたのか、雅也はあれから私の手をしっかりと握り走り回る
ことなく館内をゆつくりと見ていた。

そして、丁度お昼時になり敷地内にある広場でお弁当を食べ始めた。

美味しいね

そういつておにぎりを頬張る雅也はとても可愛くて、結婚して子供
がいる生活もいいのかなんて漠然とだけ想像してみたりして
今日は天気も良くて、家族連れも沢山いた。

きつと雅也は家族で着たかったんだろうなんて、それでも梨乃
ちゃん、梨乃ちゃんと呼んでくれる雅也が何だかいじらしくって愛
しくて。

「雅也、もう直ぐイルカのショーが始まるよ」
私がそう言つと

「ヤッター！一番前で見るからね」
とお腹もいっぱい、元気いっぱいになった雅也。

「ようし。行くぞー！」

「おう！」

イルカのショーは私も楽しめた。

ショーの始まる30分以上前から席に着いたお陰で念願の一番前に
座れた私達。

透明なアクリルを目の前に優雅に泳ぐイルカ。
笛に合わせて高く、高くジャンプする姿は圧巻だった。
そしてお約束どおりにずぶぬれになった。

雅也の分は姉貴が着替えを用意してくれたのだけれど、大人の私の着替えなんてないわけで、水族館の方から合羽を借りていたのでTシャツはどうにかなったのだけれど、私の両足は濡れたジーンズの重みが。

ジーンズの方は天気が良いから乾くとして、問題は私の頭だった。
今日の朝だつて天パの髪は、ドライヤーと格闘しやつとこ寝癖を押さえたぐらい。

こんなことなら、この前の休日縮毛かけてくればよかったと今更ながらに後悔した。

あれ、と思った。

朝からテンション高く歩き回り、お昼を食べたせいなのか雅也は疲れてきたのだろうか？

心なしか元気がないような。
嫌だといわれるかな？と思いつつ

「そろそろ帰ろうか？」

と促した私に雅也はコクリと頷いたのだった。

帰りの電車は思いのほか空いていて2人並んで座る事が出来た。

雅也を包み込むように腕を回してあげると安心したかのように直ぐに眠ってしまった。

子供の体温って高いっていうけどこれは普通なのだろうか。
地元の駅へ着くという時に起こそうと身体をゆすってみた。

でも雅也は起きなくて、仕方がなく抱え込み電車を後にした。そしてふいにおでこで手を当てると、さっきとは断然に違う、とても熱くなっていた。

風邪引いちゃったのかも……

家に電話をした。

すると母親が

「あらあらお疲れ様」

と大して慌てえることなく。

「そこからじゃ、梨乃が直接行った方が近いわね。タクシー使って小川先生のところ宜しくね。後から保険証持っていくから」と告げられた。

小川先生か、久しぶりだな。

そこは個人でやっている小児科だ。

私達姉妹が幼い頃からずっとかかっていた診療所。ここのところ行っただけでなかったな。

私は直ぐにタクシーで小川先生の所に向かった。

学生の時まではこの入り組んだ路地を通ったものだけど、大人になると全くといっていいほど通らなくなったこの道。

時折、雅也が目を細め小さな声で

梨乃ちゃんごめんね

と私を気遣う。

私の方こそ気がつかなくてごめんねなのに……

雅也の頭を撫でながら”もう直ぐお医者さんだからね。頑張れ”そう囁いた。

診療所に着くと、懐かしい顔がむかえてくれた。
看護師をしている先生の奥さんだった。

私の顔を見て少し驚いたようだったけれど、直ぐに笑顔をくれ、待っていたのよと診察室に通してくれた。

そういえば——今日は休日だ。

お母さんが電話をしてくれたのだと今になって気がついた私。

診察室に入るとそこには、いつもの先生ではなくて。

そこには、白衣を纏った若い男性がいた。

その人はぶっきらぼうに

「じゃあ、こちらに来て」とベットに雅也を座らせるように促せられた。

私は言われた通りに雅也をベットに座らせ一歩退く。

心音を聞き、口の中を見て首筋に手を当てた。

「いつからですか？」

低い声だった。

「すみません。気がついたのは先程なのですが、お昼位には元気がなかったような気がします」

私は小さな声でそう答えた。

「もっと早くに連れてきてくれたらお子さんだってもっと楽になっていたでしょうに」

胸にグサッと来た。

「はい……」

私がそう返事をしたその時丁度電話が鳴り、奥さんが診察室から出て行った。

私の様子を見ていた雅也が口を開いた。

「梨乃ちゃんが悪くないんだ。僕が水族館に行こうって言ったんだ。だから悪くないんだ」

熱にうなされながら雅也は私を氣遣ってくれた。

するとこいつは

「梨乃ちゃんですか」

と鼻で笑った後

「こんな小さなお子さんがいるのに、休日前は夜遊びで罪滅ぼしのお出かけですか」

聞こえたのが不思議なくらいの小さい声、とても冷たい声だった。

というか、何で貴方にそんな事を言われなくちゃいけないわけ！

両手の爪が掌に食い込んだ。

あったまきた、怒鳴り返してやろう、そう思った時にボタンと診察室のドアが開いた。

「雅也、大丈夫？」

ベットに駆け寄り雅也の手を握りながら、心配そうな顔をするお姉ちゃんだった。

「ママ」

雅也はほっとしたのか少し泣きそうな顔した。

「お休みのところ申し訳ありませんでした」

丁寧に頭を下げるお姉ちゃんに、こいつは固まっていた。

その表情をみて、思わずほくそえむ私。

私の時とは打って変わって優しい声で雅也の病状を話すこいつに呆れながら診察室を後にした。

丁度そこに奥さんが戻ってきた。

「梨乃ちゃん久しぶりね。すっかり綺麗なお姉さんになっちゃって」と柔らかな笑顔をくれた。

変わってないな。

小さな時、苦しくつてもこの人の笑顔で大丈夫と言われたら本当に大丈夫な気がしたんだよな、なんて思い出した。

「お久しぶりです。お元気そうで何よりです。あのー先生は？どうしたのですか？」

さっきから気になっていた、あの先生の姿がない事を。

「もう年なのよ。先週から腰の調子が悪くって奥で休んでいるわ。そうそうそれで甥っこに来てもらっているの。今日はお休みだったのだけど、たまたま来てくれてね。どう？ いい男でしょう」

奥さんはそう言ったのだけど、

「先生お大事にしてください」

と先生の事だけそう告げると曖昧に笑うだけだった。

そのうちに診察室のドアが開いて中からお姉ちゃんと雅也が出てきた。

その時に、眼鏡を外し、目頭に手を当てる嫌味な男の顔が目に入る。

あーっ、何処かで会ったと思っただよ。

そうこいつはあの時のバーにいた男だ。

一度ならずも二度までも私を不快にさせるなんて。

まあ、確かに顔はいいと思うけど、こんな男は絶対ごめんだ。
心の中で叫びまくったのだった。

運命じゃない

「へえーそれって運命って奴なんじゃない？」

含み笑いでそう言われたって、ちつとも嬉しくなんかない。

昼休みとっ捕まえた真美に昨日の顛末を話した結果がこれだ。

私はムカついているんだっていうの。

あー思い出しらまたムカついてきた。

だいたい運命の相手っていうのはこうもつとロマンティックでさあ。た、確かに初めはカッコいいだなんて思ったよ。でも、性格悪しくきた。

いくら、彼氏が欲しいって言ってもあいつだけは勘弁だ。

それにしても……真美はこういう顔がよく似合う。

見とれてしまいそうになった自分が情けない。

からかわれているんだっていうの。

ふつと乾いた息を吐くと、飲みかけのコーヒーを口に含んだ。

せめて微糖にしとけば良かったかも。ほろ苦いコーヒーは弱った胃にダイレクトに伝わって余計に私を凹ませた。

目の前の廊下を社員が足早に過ぎていく。

真美の口元が緩み小さな吐息が洩れると同時に、腕がすつと上がり、綺麗に弧をえがいた。

きらりと光る高級な腕時計に視線を這わすと、長い髪をかきあげた。

「これから、戦闘態勢に入ります」

なんて、舌を出しておどけてみせた。

そういえば、同期の吉永が言ってたっけ真美の商談相手の事。

「相当、しつこいセクハラ野郎だよ」と。

我にかえり真美に目配せをして、軽く手をあげて見送る。
ちゃんと背筋を伸ばして廊下を闊歩する姿は、勇ましい。

私には、仕事の愚痴は零してもセクハラ野郎の事は愚痴らないんだ
よな。

いや、私だけじゃない。きっとこの社の人には言っていないはず。
吉永だって、たまたまそいつの部下が友人らしくて、メールで真美
の事を知らされたって言うてた。

変な事にならなさいけど……

本人至って真面目な癖に遊ばれているって思われているからな。
こんな不安な妄想をしてしまうのは、ドラマの見過ぎよね。

さてと、私も仕事をしますか。

空になった紙コップをゴミ箱に放りなげた。

それにしても真美のやつ、あんな奴を運命の相手だなんてとんでも
ない事を。

憎らしい顔が浮かびそうになって、思わず手で払う。

それが、なんとも怪しい姿かなんてちつとも気がつかなかった。

パソコンに向かって一心不乱に指を動かす。

集中集中。

そんな私の肩に置かれた両手。

「なんか、梨乃怖い。もしかしてあれの日？」

耳元で囁くこいつは、私の上司であり元彼だったりする。

タイピングする指に少し力を込めた。

そして、モニターから視線を外さず

「そくご存じで」

と笑ってやった。

嫌でも目に入ってしまう、こやつの左手の薬指。
シンプルなプラチナリング。

絶対指輪なんて——そう言っていたのに。

もう未練なんてないわよ。そうこれっぽちも。

でも記憶の奥底では未だこいつが存在しているのは確かなんだ。

そう、この声が……

だけど、過去の男の事を覚えてたって悪くはない。

そう思うのは強がりなのだろうか？

実際、もうどうにかなろうなんて気は全くないのだから。

やつが私の肩に手を触れたのは一瞬の事だった。

今はもう自分の席に腰をおろしている。

事務の片瀬の猫撫で声が聞こえた。

「江川課長、お茶にしますか？ それともコーヒーがいいですか？」

出世コースまっしぐら。片瀬が不倫相手にと狙っているのはミエミエだ。

バカな奴だよ、そいつはね、専務の娘と結婚したの。

そんな無謀な事はしないんだよ。

心の中で毒を吐いた。

言い聞かせたのは何の為？

二度ある事は三度あるって言うけれど……

ここで奴に助けを求めるなんて嫌すぎる。
だけど私のピンチには変わりない。

これは果たして幸運なのか不幸なのか。

「会っただけでいいから会ってみてよ」

そう言われたのは今から遡る事2週間前。

あの日、久し振りに顔を合わせた小川先生の奥さんだった。

何でも、親戚の子のお見合い相手を探していたとかで、私に白羽の矢が立ってしまったらしい。

ちよつとは考えたわよ。相手は歯医者だっていうし、年も近いし――

だけど、だけど、だけど。

結婚相手くらい自分で見つけたいじゃない。

この年になってお見合いでなんて。

良い男が、っていうのは顔がつていうんじゃないわよ、性格含めて全般的に。

そんな男がお見合いなんてするはずないんだから。

奥さんが背も高いし顔もカッコいいんだからなんて言っているけど、それが怪しいの。

背が高くて、良い職を持って顔が良いとなれば尚更、遊び人にとしか思えないでしょ。

確かに偏見かもしれないけど。

「実はね、母には黙っていたのですが私お付き合いしている人がいます……」

母がお茶っ葉を入れ替えている隙に小声で囁いたのだけど。

奥さん一枚うわてだった。

「梨乃ちゃん、この年になってお付き合いしているっていうのに秘密にしてくないけない相手なんてロクなもんじゃないわよ。梨乃ちゃんの事を本当に思っているのなら親に紹介させてくれって言うのが筋ってもんよ。だから、会っただけ会ってそれから決めればいいじゃない、ねっ」

元よりそんな相手なんて久しく居ない訳でして。

奥さんのプッシュに負けた私は、麗らかなこの春の日に高級ホテルのレストランで

「今日はお日柄も良く——」

という在り来たりな言葉が始まった堅苦しくないお見合いというものをしてしまったという事です。

私が望んでお互いの両親は同席せず、奥さんと私達だけという形を取って貰った。

興味津々な母を説得するのは容易い事ではなかったが、姉貴が力を貸してくれた。

「気合入り過ぎて引かれちゃったら元も子も無いから、今回は当人だけで会ってみたら？」と。

ドラマのような展開が続いた。

「じゃあ、若い二人に任せてこの辺で」

なんて、白々しい台詞で奥さんは退席。

速効帰ろうかと思ったけど

「折角だから、上でちよつと飲みませんか？」

そう言われて、折角めかしこんできたし、驕りだろうとふんで頷いてしまったバカな私がいた。

奥さんがいる時は紳士だった、目の前にいるこの男。年は私の二歳上、名前は「高田さとし」というらしい。

うん、顔は奥さんの言う通り世間一般的にモテル男ってのだ。

だかこいつ――。段々と本性が出てくるもんだね。

お酒って怖いわ。

何だか洒落た名前の高そうなワインを数杯飲むと、距離が縮まってきた。

そして、こいつは私の耳元で囁いたんだ。

「なあ、まずは身体の相性から試してみない？」

しっかりと腰に手を回しやがって。

やっぱり、偏見じゃなかった。

私は、さっと身を引いて手を払ってやった。

伊達にここまで独身だったわけじゃない。

「今日は忙しい中、お時間取らせてしまって失礼しました」
そう言って一万円札をカウンターに置くと私は、その場を立ち去った。

もう二度と会いたくなんか無いっていうの。

お気に入りのヒールをカツカツと鳴らしながら、店を出た時に思いも寄らない事態が発生してしまったのだ。

腕を引っ張られた私はそのまま後ろに倒れそうに。

廊下の壁に掛けてある優雅な油絵の美女と目が合った。

体制を立て直そうと一歩引いたヒールは見事に「高田」の足に着地。

「これは作戦なのかな？ 梨乃さん」

態と身体を密着させて、私の首筋に息を吹きかけるこの男、最悪だ。
「最近、ご無沙汰なんですよ？ それとも遊びすぎちゃったのかな？ 物欲しそうにシタクセニ」

怒りで両手は握り拳に、爪が手の平に食い込んだ。

歯を食いしばって、睨めつけるとこれまた嬉しそうな顔をするとき
たもんだ。

そして、怒り心頭の私に面食らう一言。

「タイプなんだよね。最近若い子としかしてないからさあ。本来は媚びた子よりこっちの方が好きなんだよね。今日は最高な夜になりそうだな。やろうぜ。その顔ソソラレル」

この男――。

線が細い癖に、身体が締まってる。腕を引きはがそうとするけれど、
ビクともしない。

そついや、学生の頃テニスで結構上まで行ってたって言うてたような
そんな事を思いだしている場合じゃない。

こうなりや最終手段。

思いつき大きく息を吸い込んで、大声を出そうとした瞬間。
私の口にすっぽり収まった奴の腕。

ここで負けてなるものかと思いつきり噛みついてみるも、小学生の
時に矯正して抜いてしまった私のヤイバが恨めしい。

こいつのスーツにはまさに「歯が立たない」状態で。

ちよつと涙目になった。

奥さん恨むよ、こんなやつと見合いなんぞ組んでくれて。

このまま私は引きずられ、部屋に連れ込まれてしまうのだろうか――
。

その時だった。

「面白い事しているね」

胸を疼かせる声がしたのは。

直ぐに違うと気がついたが、一瞬錯覚してしまった。

首を捻ると、腕を組んだあのム力つく男。

そう私は、嘗て愛した元彼とこの男の声を聞き間違えたのだ。

涙は直ぐに引っ込んだ。

冷静になれと自分に言い聞かせる。

飯を作りたくはないけれど、ここはやっぱり助けを求めるべきだよね。

そう判断した私は、目で訴えた。

お願い助けてと。

それを承知したのか、この男あの時のように鼻を鳴らしやがった。

「さとちー。こんなところで会うなんて奇遇だね」

知り合いだったの？

高田は私に絡めた腕を緩める事なく

「ヨシト。邪魔すんなよ。これから面白いとこなんだからさ」と言いやがった。

私は高田の腕に噛みついたまま思いつきり首を振る。

すると、こいつは爆弾を落とした。

「梨乃が世話になったね。どうやら構ってやらなくて拗ねてたらしい、伯父さん達には内緒にしてたけど俺達、付き合ってるから」

噛みついていて口が大きく開いた。

まさにあんどろイド状態。

あまりの事に固まった高田から私をひっぱり出すと私を後ろから両

手で抱きしめた。

おろおろとする私に。

「ごめんな、梨乃。もうひと段落ついたから。機嫌直せよ」

そう言つて、屈んだこやつは私に口づけた。

口づけたなんてもんじゃない。

舌まで入れてきやがった。

何なのよ、と思いつつも。

しつかりと舌を絡めてしまふ私がいた。

これは演技よ。これは演技。

そつ言ひ聞かせたのは何の為？

私の方が聞きたいよ

背中タクシーの去る音を聞くと、私は玄関のドアを開けた。待ってましたとばかり顔を出す母。

「どうだった？」

にやけた顔で一体何を期待しているのやら。

「最悪だった」

脱ぎ棄てたヒールが音を立てて転がった。

お気に入りだったそのヒールを揃えもせずに母の横を通りぬける。きつと、母にも通じただろう私の機嫌の悪さ。

リビングのドアからは姉貴まで顔出しているし。っていうか姉貴また帰ってきたのかよ。

後ろで母のため息が聞こえたけれど、私は無視を決め込んで階段を駆け上がった。

スーツも脱がずにベツトにダイブ。

そっと口元に手をやる。

嫌じゃなかった。

寧ろ――。

駄目駄目駄目。

口元から手を払いのけ、頭を振った。

演技よ只の演技なんだから。

そう言い聞かせないと、私の中の何かが溢れてきそう。もう恋なんて。

ずっとそう思ってきた。

真剣な恋をしていたと思っていたからこそ。

これ以上、裏切られるのが怖かったから。

好きなんてならない。

絶対好きになんか。

奴が私を助けたのは、借りを返したかったから。

偶然居合わせた私に、これ幸いとあの時、勘違いした私への借りを返したかったから。

義理で送ってくれたタクシーの中ではつきりそう言われた。

気まづくなつて、寝たふりをしたら本当に寝てしまった私。

告げた住所の近くで揺り起されて、家の前であっさりと別れた。そう呆れるくらいにあっさりと。

そう。だから、これは事故よ。

もう二度と会う事なんて無いのだから。

見合いの事なんてすっかり記憶のかなたへ飛んでいた。

あの胸糞悪い高田への怒りは、あのむかつく男の唇が消し去っていた。

だから――。

忘れるんだって。

何度もそう思うけど、夢の中まで出てきたあいつ。

あの声で私を呼ぶあいつ。

好きになんかなりたくないんだってば。

寝ながら泣いていたのに気がついたのは、翌朝目覚めてから。

サイドテーブルに置いてある鏡に写った私の顔には落とさずに寝てしまった化粧の上を這うように流れた涙の痕。

幸い今日は日曜日。

不貞寝をするにはもってこいの雨の日だった。

「梨乃ーいつまで寝ているの」

そういつて部屋のノックをしたのは姉貴だった。

「んー今日は寝て曜日だから」

タオルケットを顔の上まで引つ張り上げた。

ゆつくりとベットの淵に重みが掛る。

姉貴がまるで子供をあやすように私の背中を撫でてきた。

「何があつたの？ みんな心配してるんだよ。特に雅也が凄くてね。梨乃ちゃんをいじめる奴はぼくがやっつけるって意気込んでるわよ」

容易く想像出来て思わず噴き出してしまった。

「ほら、顔出しながら」

やっぱり姉貴なんだよなあ。

昔っからそうだった。

姉貴の言葉は魔法のようだ。

だけど、この顔を晒す勇氣はない。

「最悪だつて？ だったら、さっさとこっちから御断りの電話入れてやらなくちゃ、ねっ」

姉貴の言う事は尤もだ。これであいつから断りの電話なんて貰ったから私の汚点にしかない。

私の落ち込みは違つところにあるんだけど……

それは言えっこなかった。

姉貴は、ずっと見てたから。

私が幸太、そう今は上司である江川幸太との一部始終を。

「梨乃」電話よ。小川先生の奥さんからー」
階段下から母の声が響いた。

「あらら、先方さんから先に掛つてきちゃたか」
ギシッとベットが軋む音。

姉貴が子機を取りに行つてくれたのだと直ぐに解つた。

あーあ、憂鬱でしかない。

今のうちにと、ドレッサーから化粧落としてのペーパーを取りだして顔を拭う。

この年でこんな事したら肌に良くないって解つていたけど、昨日の晩は何も出来なかったのだから仕方がない。

顔を拭い終わったペーパーをゴミ箱に投げた時、姉貴が子機を持つて再び部屋に入ってきた。

無言で手渡され、耳にあてた。

「もしもし——」

言葉の続かなかった私に、奥さんの甲高い声が耳に突き刺さった。

「梨乃ちゃんったら、水くさいじゃないの。芳人と付き合ってるんだっいたらはつきりそう言ってくれば良かったものを」

ハイテンションで喋りまくられて私は相槌を打つ事さえも許されない様子。

というか奥さんこんなキャラだっけ？

私は子器片手に呆然とするだけで。

誰と誰が付き合ってるって？

で、奴はあの高田と従兄弟って言った？

私の知らない情報が次々と発せられていくけど、私にはキャパオーバーだ。

最後の言葉は聞き取れた。

「近いうち二人で遊びにきてね、絶対よ」

「はあ」

なんて気の無い返事をした直後、ツーツーツーという機械音。

あー忙しくなるわ。

なんて声が聞こえたような……気のせいよね。

私、その芳人という人の名字も知らないんですけど。奥さんの声が大きすぎて隣にいた姉貴には丸聞こえ。

「梨乃、これはどういうことかな？」

そう言われたけれど、私の方が聞きたいんだってば。

針のむしろ

「全く梨乃つてば、私は兎も角、小川先生の奥さんまで恥かしいやつたじゃない。お付き合いしている人がいるのならそう言つときなさいよ。高田さんにも失礼でしょ」

遅めの朝食を取る私は針のムシロだ。

「はあ」

返事をするのも面倒くさい。

だって、だってさこんな展開誰が予想できるって。

それに――あっ―嘘からでた真つていうのはちよつと違うけど。

「小川先生の奥さんには言ったよ。お付き合いしている人がいるからって。それでもいいから会つてって言ったのは奥さんの方だから」

言葉尻が窄んでしまったのは、何ともふに落ちない事を言ってるからだ。

「えっそうなの？」

なんて、私の顔を凝視するのは止めませんか、母上様。

茶碗に盛られた最後の一口をかきこむと後は宜しくとばかりに、茶碗と皿をシンクに置いてキッチンを退散だ。

「ご馳走様でした」

「まだ、話しは終わってないわよ、梨乃」

終わるも何も、話す事が無いんだって。

後ろ手でドアを閉めると、長く一つ息を吐いた。

兎に角ここから脱出しなくちゃだ。

何で雨が降ってる日に予定もないのに外出しなくちゃいけないんだか。

こんな日はラフな格好に限るな。

半袖のシャツに薄手のカーディガンを羽織って、デニムを履いて。せめて一番お気に入りの傘を持って出掛けよう。

着替えを終えて、玄関に向かうとぽつんと雅也が立っていた。腰を屈めて目線を合わせる。

これは姉貴に教わった事。

無言で頭を撫でると、雅也も私の頭を撫でてくれた。

「ありがと雅也、元気になった」

「うん、良かった」

本当は一緒に遊んであげたいところだけど――。

「気をつけて行ってこい」

今まで黙っていた父だ。

「うん、行ってきます」

スニーカーに足を入れると、また父の声が聞こえた。

「雅也、今日はじいちゃんと遊ぼうな」と。

玄関を出ると厚ぼったい雲がこれでもかと広がっている。雨脚は強まる一方だ。

バス停まで歩いて3分。

ボンという音と共に淡い桃色の傘が跳ねた。
少しだけ気分が晴れた気がした。

行く当てのないっていうのはなあ。

取り敢えず駅でしょ。

誰もいないバス停からバスに乗り込んだ。

雨の日特有のむあつとした空気。

一番後ろの座席に乗り込むと、街道沿いを並ぶカラフルな傘を眺めながら、あの子の時間の過ごし方を考えていた。

映画でも見ようかな――

一人で映画を見るなんて学生以来かもしれない。

それより何より映画館なんていつ行ったのが最後なのだろう、それさえも思いださなくらい前だ。

たまにはいいよな。

吸い寄せられるように映画館の前に立つ私。

大きな垂れ幕には、ドンパチ系のハリウッド映画。

これならすつきりするかもしれない。本当は私がマシンガンを撃ちまくりたい気分だけど。

雨の人あつて、映画館はまずまずの入り、最近映画離れが進んでいるって言うても、やっぱりデートの定番なのかもね。

必要以上にベタベタしたカップルの多い事と言ったらない。

前は私もあんな風に――。妄想を初めてしまいそうになり、慌てる私。

やだなもう。

チケット売り場にもそんなカップルばかりなわけで、これって男の

趣味だよな。

周りを見渡しても女一人って私だけだったり。ちょっと虚しい。

真美を誘うべきだったか？　だけど今日はやっとの週末。

真美が如何にこの束の間の休日を楽しんでいるか知っている私は、こんなヤケみたいなお出掛けには付き合わせるの訳にはいかないからまあ、後で昨日の顛末を話すはめになるのは必須だけど、今日は何となくね。

背中側のチケット売り場は家族連れで賑わっていた。

アニメの上映らしい。子どもが館内を走りまわってるし。

雅也もここにいたら、きつところなるだろうな。

果歩も産まれた事だし、姉貴はきつとこれないだろう。よし今度連れてきてやるとしますか。

それにしてもチケット一つ買うのにも驚きだった、まさに浦島太郎状態。

今って、チケット買う時に座席も選べるんだ。

妙に感心しちゃう私がいいた。

映画って丁度良い場所ってあるんだろうけど、そんなところに座って周りがカップルだらけっていうのもちよつと堪える。

私はひっそり一番後ろの座席を選んだ。

チケット売りのお姉さん、少し同情の眼で見てない？

どうせ私は一人ですよーだ。

普段の行いが良すぎるのだろう、上映時間まであと10分っていうばつちりなタイミングだった。

そして、座席に座ってまた驚いた、こんなに座席って大きくて座り心地が良かったつけと……

それにしても大正解。チケット売り場のお姉さんが勧めてくれたあの席も、あっちの席も周りはカップルときた。せめて後ろだけは静

かでいて欲しいと思った私は正解だったな。

映画館ときたら、やっぱりマナーは守らなくちゃだね。

私はバックの底から携帯を取り出すとナマーマードにしようとする
と。

着信、4件？

発信者 俺

何なのこれは。

新手の迷惑行為か？

でも不安が過る。これって私の携帯よね。「俺」って誰が登録した
の？

気持ち悪っ——。そう言いかけてたけどもしかして。

こんな事をするやつ、脳裏に浮かぶのが一人だけいる。

今は元彼となった私の上司。

あいつなら、会社のデスクに置きっぱなしのこの携帯に悪戯出来る
はず。

こんな悪戯最低って思っけど、昨日あんな事があったせいか、少し
話をしたいかもと思ってはいけない事を考えそうになる私もいる。

私からは掛ける事なんて、出来っこない。

幸せかどうか解らないけど、結婚指輪をしているのだから。

あのあいつが。知り尽くしたと思っていたのはやっぱり思い上がり
だったんだよね。

結婚してから普通話しかけてくるあいつが恨めしかった。

4年の付きあいよりも、専務のひと声に負けちゃう私なのだから。

会社を辞める事だっけって考えたけど、ある程度の歳を過ぎた私に次の
職場があるとは限らないから。

伊達に長く同じ会社に勤めているわけじゃない、社内の事は大抵解る、だから余計にそう思うんだ。
仮に就職できたとはいえ、また一から覚え直しなんて、年下の後輩の世話になるのは。

一生懸命仕事をしてきたからこそ、変なプライドが邪魔をするのだ。

電源オフ。

気になる気持ちを押し籠めて、じっと携帯の画面が暗くなるのを目で追った。

照明が落とされ、スクリーンいっぱい宣伝が流れる。

見たくもないラブストーリーの予告だ。

金髪の美女と紺碧の瞳をした青年。

じっと見つめ合い、指が絡む。

今の私には、一番見たくない映画だ。

視線を逸らして目に入るのは小さな鞆。

電源を落とした携帯の入った私の鞆。

館内のざわつきが収まって、やっと本編が始まった。

すっきりするはずの映画だったのに。

私の気はそがれっぱなし。

携帯が気になって仕方がなかったのだ。

エンドロールが始まると誰よりも早くその場から立ち去った。

最後少しだけ出てきた恋愛事情にあてられて、余韻に浸るカップルを横目に私は通りに入る。

緊張する手で携帯を探り当てる。

邪魔にならない場所――。

大きな柱の陰で私はそつと携帯を開いた。

早く来いよ

緊張して開いた携帯には、何も表示される事は無かった。

私、何を期待しているの？

違う期待なんてしていない。

解っているのに。

あいつは、もう私なんて目に入っていないって。

同僚にからかわれてのろけるあいつを何度も見てきた。

社内恋愛禁止なんて、暗黙の了解を馬鹿みたいに守った結果がこれなのだから。

別れはあつけないものだつた。

「話がある」と呼び出され、期待していたあの日。プロポーズされると信じて疑わなかったバカな私。

封印していた記憶がじわじわとよみがえりそうだったその時に、手の中の携帯が震えた。

ディスプレイには「俺」の文字。

もう、私はこれっぽちも好きなんて気持ちは無いんだから。

覚悟を決めて耳に宛てた。

「……もしもし」

「やっとでたな」

想像していた人物じゃなかった。

ほっとするような、残念なような気持ちは直ぐに消え、我に返った私。

あいつだ、あのム力つく男だ。

「やっと出たって。何であんた私の携帯いじってんのよ。これ犯罪よ」

あんな夢を見たせいか、俄かに燻ぶる胸の内を悟られないように早口で一氣にまくした。

「何言ってるんだ、ちゃんと許可は取ったぞ。何より携帯を差し出したのはお前の方だって」
と呑気な声。

私の頭をフル回転したところでそんな記憶は全く……無い。

「ちよつと、えっ」

どぎまぎしながら喋り始めた私の声を遮ったこいつ。

「あの店で待ってる。行きつけだろ”Adagio”。今後の対策だ。お前——梨乃も困るだろ？ 口裏合わせないと」

笑いを含めたその物言いに、ム力つきそうになるけれど、心の隅にちよつとした好奇心もある。

何と答えようと迷っているうちに

「じゃあ、早く来いよ」

と電話が途切れた。

「嫌な奴」

口ではそう呟くけれど、駅へと向かう、その足取りは自分で思うより遙かに軽かった。

さつきまでは、元彼の事を考えていた私だったのに、なんて軽い頭なんだろう。

それにしても、あいつあの店を指定してくるなんて。
初めて会ったあのショットバー。
こんな早くから開いているなんて知らなかったかも。

準備中

ちよつと複雑な気持ちでやってきた「Adagio」

でも入口には、準備中の看板。

あいつつては確かめもせずに――。

少しいらつきながら、携帯を開いた。

まったくもう。

そう思いながらさっきの電話へと返信をする私。

ブツつと呼びだし音が途切れた時、文句を言つてやろうとした私よりも先に、向こうの声が耳をつんざいた。

「遅い」

と一言。

遅いですって？ 看板を睨めつけながら携帯を持ち直すと、目の前の扉が開いた。

は？ えっ？

目の前には小洒落た格好のあいつがいます――。

何なのよ、その顔は。

脳内で呟いたはずだったけど、口に出していた模様。

「何なのっていつもの顔だよ。早く入れって」

肩を揺らしながら、店の奥へと消えていくやつ。

本当に感じ悪いつたらない。

そう思いながらも、少しカッコいいかもなんて思ったのは口が裂けても言わないわよ。

締めりかけたドアに手を伸ばして、私は店の中へと足を踏み入れた。

「いらつしゃい」

バーのカウンターで雑誌を読んでいたマスターが私の方を向いてニコリと笑った。

相変わらず渋くてかつこいいい。

黒服を着ていないマスターを見るのは初めてだったけど、醸し出す雰囲気はマスターそのものだ。

蝶ネクタイをしてきつちり首元が隠れているのとは違って、淡いグリーンシャツの首元はボタンを外してちょっと色っぽいかななんて。

「こんにちは、準備中にすみません」

見とれてしまいそうにまった私は現実に返って会釈をした。

「いやいや、でもまさかこいつと梨乃さんがお知り合いだったとはね」

カウンターの真ん中にどつかと座るあいつを見て目配せをするマスター。

「いや、知り合いつていうほどじゃ」

あはははっと笑いながら、奴と2つ席を開けてカウンター席に座った。

そんな事も笑いのツボだったらしく、お腹を抱えて笑ってるし。

つていうか、こんな風に笑えるんだと妙な感じもしたりして。

いつもは高く止まっているみたいに鼻で笑うから。

「サンキューおやつさん。後はやつとくから」

こいつの言葉が合図だったみたいに、マスターは腰を上げた。

「ああ、んじゃお言葉に甘えて宜しく頼むよ。後は好き勝手してく

れていいから」

「どうも」

まるで第三者のようにマスターとの遣り取りを眺めていた私。

それって、ここで私はこいつと二人で話せって？

そんな私の事なんてお構いなしで、奴はカウンター内に入ると冷蔵庫からオレンジジュースを取り出した。

私に意見を求めるなんて事はないみたいだった。

目の前に置かれたオレンジジュースって私のよね？

で、自分はウーロン茶って。私に選択肢はなかったみたいだった。それにしても、なんでマスターと？

「マスターは、俺の学生時代の友人の親父さんなんだ。ちょっとバイトさせて貰った時期もあったから俺にとっても親みたいなものだ」

どうやら顔に出るみたいで聞きもしないのに、私の疑問を解決してくれた。

ふーん、バイトね。

医学生ってそんな暇あるのかしら？

そう思ったけれど、そこまでは答えをくれなかった。

「さてと、これからの事だけど」

手に取ったグラスの氷がカランと音を立てた。

ちらりと覗いた横顔はやっぱりいい顔してるんだよね、悔しいけれど。

「これからも何もないわよ。勝手に呼びだしておいて何を言ってるんだか」

そう、まくしたててオレンジジュースに口をつけた。

きつとこれから嫌みを言うに違いないと、頭の中でシミュレーション。

堅くなりつつある頭は、それに対応できるだろうか？

仮にも相手は医者だから、きつと理論的に攻めてくるに違いない。

「ふーん。そうきたか」

ほらまた、あの鼻にかけた笑いだよ。

くーっ感じ悪い。

私は無言でオレンジジュースをただ握りしめていた。

そんな私に禁句を言いやがった。

「お前さ、結婚願望とかまだあるわけ？ 見合いとか持ってこられて嬉しいとか思っちゃう奴？」

その馬鹿にしたような物言いに頭にかーっと血が上る。

「あるに決まっているでしょっ」

口に出してからあーっと思った。そうじゃない、そうじゃないんだっば。

ここは冷静に「別に、関係ないでしょ」とか言うはずだったのに。あるに決まってるでしょ、なんてかつこ悪すぎる。

ほら、今度はお腹抱えて笑ってるし――。

「で、見合いは？」

笑いも治まらないうちに、こいつつてば本当に感じ悪い。

「べ、別にそ、そんなのあんたには関係ないでしょ」
どうして、肝心なところでどもるんだ私。

こんなに弱かった？

「俺としては、このままの状態を維持してくれていると助かるんだけど」

顔だけをこちらにむけて、静かにほほ笑むのって反則じゃない？
これが初めてみた時だったら確実にノックアウトだわ。
と言いつつも、既に落ちそうになっているのは気のせいじゃない。

「んーまあまたあんな奴でも紹介されたらとは思っけどね」
無意識に呟いてしまったらしい私。

「じゃあ、このままって事で」

私のオレンジジュースにウーロン茶のグラスを力チリと合わせて乾杯の仕草。

何だかいいように使われていると思うけど――。

「言っときますけど、私に相手が出来たらその時はその時だからね」

「勿論そのつもりだ」

言わば、見合い除けに上辺だけの付き合いっていう関係が始まった瞬間だった。

奴曰く、小川先生とは一緒に住んでる訳じゃないし、別にバレないだろうって。

確かにそうだ。

でも私は？ あのニヤついた母の顔はきっとこれから何か突っ込んでくるに違いないとみた。

これってどうな訳？　ちょっと虚しい気もするけど。
本気で付き合うつていうのは違うから、ややこしくなりそうで既に
混乱気味だったり。

「そんなに難しく考える事じゃねえだろ」
つて。あんたエスパーか？

何時の間にカウンター内に入り込んでいたあいつは、ボトルが並んだ棚を物色している。

そんな顔を眺めてまっげが長いんだ、なんて呑気な私もいたりして。

「まだ、明るいから軽めでいいよな」
一人呟いて、何かを作り始めた。
待つ事1分。

目の前に置かれたのは、マリンブルーのカクテルグラス。
へえ、見た目は綺麗じゃん。
ちよつと、見なおしてやった私に

「そんなに睨んだつて『毒』なんか入れてねえよ」

あのー私、そんな疑う目してなかったんですけど。

目の前のやつを見る私の顔は今度こそ、やつの思う顔だろうつてくらい睨みつけてやった。

どうせ可愛げのない女だつていうの。

とは言いつつもカクテルに罪はない。

グラスの細い足を軽く摘まんで口に含むと、鼻先にくすぐる爽やかな香りと甘すぎず程良い口当たり。

私の好みにストレートな味わいだつた。

「結構いけるだろ」

真直ぐ私に向けた視線に、私はどぎまぎして目を泳がせた。

反則だよ、それ。

嫌みが入りながらも私達の会話は結構弾んでいて。

お酒が入ったからなのか、私の個人情報はやつへとどんどん流されていく。

勿論その出所は私なのだけど……

私ってこんなにお酒に酔う方だったかしら。

マスターが帰ってきた時、既に私はハイテンションで。

何時の間にそうなったのか、やつのを名前を名前で呼んでいる私がいた。そして、やつも私の名前を。

「マスター、サンキュ。助かったよ」

やつと入れ違いにカウンターに入ったマスターにお礼を言うと、さも当たり前のように

「梨乃、行くぞ」
なんて。

反論しようと思ったけど、私の肩に置かれた手がなんだかくすぐったくなるような優しい手で。

「あ、うん」

なんて条件反射みたいに言っている。

私、こいつにむかっているんじゃないかなかったっけ？

何となく、ぼわんとした頭。

おかしいな、本当にこれっぽっちのお酒で酔うはずなんてないって

150617

冷酒と奴と

「……?」

「ああ、……」

連れてこられたのは、看板も何もないただ紺色の暖簾がかかった民家みたいな場所。

半ば引きずられるようにタクシーに乗り込んだ私達がついた場所は、私も見慣れた実家の最寄り駅近くでして。

裏路地から一本入ったこの場所はひっそりしていて、こんなところに店があつたなんて今まで知らなかった。

「いらつしやい」

落ち着いた品の良い声に顔をあげると、これまた上品な着物を召した女性で。

私はおずおずとお辞儀をすると、先に奥へ行つた奴の後を追いかけた。

外観からは想像付かなかったけど、店の中は結構広いみたい。

なんていうか、居酒屋と料亭の中間みたいな感じ?

自分の家からそんな遠くないところにこんな素敵なお店があつたなんて、ちよつと感動。

通されたのは、中庭が見えるお座敷。

床の間に飾られた一輪の桔梗が、また素敵だった。

「二十歳の祝いに伯父さんに連れてきて貰ったのが初めだったかな」

それは私に言つたのか、独り言だったのか。

返事はしなかったけど、小川先生のいきつけないだなんて思ったり。

ここでも、目の前のこいつは私の意見は聞かないみたい。

お勧めだという料理とお酒を一人で注文しているし。

私にはメニューを見るだけですか？

「取り敢えず、こんなとこかな？」
なんて。

「本当に、自己中なんだから」

心の中で呟いたつもりだったけど、どうやら私はまたやってしまったらしい。

「お前ってさ、変な奴」

って肩を揺らし始めた。

「あ、あんたに言われたくないわよ」

微妙な空気が流れている二人に救いの料理が運ばれてきた。

遠慮なんかせずに、箸を進めると確かに美味しい。

お通しは、切干大根の煮物。

味がしっかりしつとも優しい味。

何処か懐かしい、そうおばあちゃんの味付けに似ている気がした。

目の前にいるのが、冷酒のグラスを掲げるこいつってのがちよつと癢だけど。癢っていうのは少し違うのか？ 黙って言えば、やつぱり目を引くんだよね。

勝手に頼まれた奴と同じ冷酒も吞んでみた。

悔しいくらいに、私の好みだった。

冷酒の口当たりが良すぎて、負けじとグラスを交わす私。

ぼやんとしてきたなと自覚したのは、何品目かの白身の大きなお魚を箸が上手に使えない、という失態をおかした為。

いつもはもつと綺麗に箸使えるんだから――

なんて子どもみたいな言い訳までするしまつ。

そして私の記憶はぶつつり途切れた。

気がついた時は見慣れた天井が目に入った時。

少しだけ、ぼわんとする頭をかきむしり階段を下りると冷蔵庫から冷えた麦茶をグラスに注いだ。

不気味な視線を感じて恐る恐る振り向くと、これまた気持ちの悪い笑みを浮かべた母の姿。

思いだし笑いですか？ またもや変な笑みを浮かべて……

そっぴや、私どうやって帰ってきたのだろうか。

記憶を呼び起こしてみようと試みるけど、全く何も浮かんでこず。

何十年と行き来する我が家だからきつと帰巢本能が働いたのだろうか、

そう思いこむ事にした、その時。

「さすが、小川先生の甥っ子さんね。母さん嬉しい」

背筋も凍る一言が聞こえてしまった。

「さすがって？」

私の声ならぬ、蚊の鳴くような小さな声。

その声は紛れもなく不安からくるものでして。

「あんた、昨日凄かったのよ。酔っぱらって『むかつくー』って母さん凄く恥ずかしかったけど、小川さんね。気を許して貰っている証拠ですからって」

あいた口が塞がらない。何処をどうすれば気を許すって……そして更に追討ちをかける母の言葉。

「それがね、玄関入った途端に崩れ落ちちゃってね。下の和室に運ぶつもりだったのだけど、芳人さん「部屋にお連れしますって、あんたの事、こうやって軽々とお姫様だっこよ」

母は身ぶり手ぶりでその様子まで再現してくれた。

って事は私の部屋に入ってたって事よね？

思わずスルーしそうになったけど、母さん、今さりげなく奴の名前を呼ばなかった？

目の前が真っ暗になった。それは決して二日酔いのせいなんてなくて。

思いっきり勘違いしている母親、益々頭が痛くなる。

嘘っぱちの婚約者だってばらした方が正解？

かろうじて働く頭をゆすって考えてみる。

今にでも何か言いたそうな母親の視線から逃げるように背を向けると、家の電話が鳴り響いた。
助かったと思っただのは束の間。

電話に出た母は、これでもかと言っほどの大きな声で

「昨日は大変お世話になりました。今さっき起きてきたんですよ」

間違いない、奴からの電話だった。

酔っぱらいの戯言

「はい」

嫌だけどうしょうがない。母から受話器を渡されてしぶしぶ電話に出た私。

後ろから

「そんな恥ずかしがらなくても。邪魔者は退散するからね」
まるで

オーホッホ

とても高笑いをするのはとうとうな母。

きっと母の事だ。廊下の後ろで聞き耳を立てているのかもしれない。
軽いトリップ入った私に

「お前なあ。仮にも婚約者の俺から電話が掛ってきたんだぞ。もう
少し嬉しそうな声でないのか？」

だなんて。

「そうですね、失礼しました。『仮にも』ですからね。お電話貰って
とっても嬉しいですわ」

何とも子どもっぽく返しか出来ない私って。

「それで。何の用なの」

一度深呼吸して仕切り直した。

「やっぱりな。お前覚えてないだろう。形だけでも婚約しているな

ら、指輪買えって言ったのはお前の方だっていうのに」

は？ えっ？

全く覚えてませんが…… 私が？ そんな事言っただって？

ハテナマークがいつぱいだ。

確かに酔ったけど。

確かに記憶が飛んでるけど――

駄目だ、本当に思い出せない。

だけど、今確実に言える事は、それは飛んでもない間違いだと言う事。

指輪なんて買った日には、後でどうなる事か。

この年で、婚約した事が周りに知れそれが破談になったら……

怖い怖い。考えた事を取っ払おうと思いつきり頭を振ったら、酷く頭に響いてしまった。

そんな事をしている暇はない。

「ちょっと待って。酔っぱらいの戯言でしょ？ 本気にするなんてどうかしてる」

うん、凄くまともな意見だ。キャパオーバーな割に尤もらしい反論が出来た事に安堵するも。

「今更何言ってるんだよ。後、15分でお前の家の前に着くから用意しておけよ」

奴は、そう言うのと勝手に電話を切ってしまった。

ムカツク俺様男そのものだった。

受話器片手に固まる私。

後15分？ よれよれのパジャマにぼさぼさの髪。

顔に至っては、昨日のメイクだって落としてないじゃん。
無理、無理すぎる。

部屋に戻って携帯を掴むと不本意だけど奴に電話を掛けた私。
奴が出るやいなや

「15分なんて絶対無理。時間潰して後1時間後。以上」
奴に反論を言わせる隙も与えず電話を切った。
そして、切った後に気がついたんだ。

「行かない」

って言えば済む話だったんじゃないだろうか。
また電話するのもマヌケだよね……

ふーっとため息をついて、取り敢えずパジャマを脱ぎ棄てた。

迷った服と薄化粧

これか？ こっちか？ それともこれか？

洋服を迷うだなんて、久し振りの感覚だけどそれは決して相手を思
つての事なんかじゃなくて。

クローゼットの扉についた鏡と睨めっこをしているのは事実なの
けど。

何かこう、納得いかない。

気合入りすぎて言われたくもないし、あんまり変な格好もどうか
と思うし。

何でこんな事で悩まなくちゃいけないのよ。

かれこれ20分は迷っているんじゃないだろうか。

刻々と迫りつつある、指定時間。

髪も何とかしなくちゃだし、メイクだつてしなくちゃだし。

これは奴の為なんかじゃなくて、最低限のみだしなみよ。

馬鹿みたいに自分に言い訳をしながら、並べられた洋服を眺めてみ
る。

「こういうのはさ、やっぱり一番初めに出した服が正解なのよね」
いつか、真美に言われた言葉が頭に浮かぶ。

お気に入りのその服は、一目惚れして買ってみたけれど、何となく
似合わないような気がしてずっとクローゼットにしまつてあつたワ
ンピース。

服なんてどれ着ても一緒よ、中身は私なのだから。

またもや、変な言い訳が浮かんできた。

洋服が決まったら、速効で髪をバレッタで止めて、薄化粧。

服は迷えどメイクは自然に。こんな時、気合入ってますと言わんがばかりのばっちりメイクなんて、それこそからかわれそうだから。

それにしても、今週末はゆっくりするはずだったのに。

壁に掛ったカレンダーを一睨み。

3連休だったのにな。

とんだ週末になったもんだ。

嫌だと思いつつも出掛ける準備をするのはマゾか馬鹿か——それとも嫌じゃないからなのか。

日焼け止めの上から、軽くファンデを叩き、淡い桃色のルージュを引いたら丁度、一時間経過するところだった。

鏡の中の自分にちよつと苦笑い。

手を抜きすぎじゃない？ と。

最後にもう一度時計を確認。また『遅い』なんて言われたくないからな。

玄関でパンプスに足を入れると目に入った小さな靴。

雅也の靴だ。

忘れていったのかな。昨日から義兄の実家に顔を見せに行っている。普段は静かなこの家がこの何週間、姉貴の里帰りによって一変した。ちよこまかと走り回る雅也に元気に泣く果歩。

二人の音が日常となった今、姉貴一家のいない静かすぎるこの家が寂しいと感じたり。

『梨乃ちゃん大好き』と纏わりつく雅也が愛おしくて堪らないんだな。

おつとやばい時間だ。思わずトリップしてしまった。

「行ってきます」

小さな声だけども一応言ったから。

奴と母を会わせたらまた何を言われるか分からない。
声同様、静かに玄関を引き開けた。

こんな事なら何処かで待ち合わせをすれば良かったかも。
と思ったの束の間。

約束の一时间きっかりに、私の目の前に車が止まった。

「おはよう」

嫌みな笑顔を引っ提げてむかつく男が顔を出した。

「おはよう」

嫌みに後部座席に乗ってやろうと思ったけど残念な事にこの車は2
シーター。

ドアは運転席と助手席にしかなかったときた。

仕方なく助手席に回ると、少々重たくなったお尻をドスンとシート
に埋めた。

「気分はどう？」

ハンドルに手を置き前を向いたままの言葉は嫌みなのだろうか？

記憶が飛ぶほど飲んだのだからすっきりっていうのじゃないと解っ
ていそうなものだけど。

取り敢えず、送ってくれたのは感謝なのだからお礼は言っとくべき
か？

「お陰さまで」

そこまで言って考えた。昨日はこいつに付いて行っただけでこ
んな目にあっただから、私のせいだけではないはずだ。うん、き
つとそう。

感謝の言葉をそこそこに、疑問をぶつけてみる。

「それで、今日は何処へお出掛けですか？」

指輪の事を忘れた訳じゃないけど、そこまで私にお金を使う義理はないだろう。

私が酒に酔った勢いで言った冗談と言えば済む話なのだから。

「ああ、東京」

ああ東京って。ここも東京じゃないのかい？ それに私が聞きたいのは場所じゃないっていうの。

指輪を買いに行くって言えば直ぐにでも否定出来るっていうのに、こいつ、のらりくらりとかわしてくし。

何が着くまでのお楽しみだったっていうの。

軽いため息をつきながら、窓を開け、新鮮な空気をいっぱいに吸い込んで気分転換をはかるしかなかった。

と、ここで肝心な事を聞きはぐれていた事を思い出した。

何だか動転して聞きそびれたっていうか、気がつかなかった私が悪いのだけど……。

ここで聞かなきゃ何処で聞くとばかりに私は声をあげた。

「正直に言う。自分で信じられないんだけど、昨日の途中から私の記憶が全くないの」

「だろうな」

だろうなって。その馬鹿にしてそんな物言いにちょっと腹が立つけど事実だから仕方ないかもしれない。

「恋人の真似ごとをするっていうのは覚えているのよ。でも何で婚約者になってるの？ 昨日母さんに結婚を前提にお付き合いしてま

すって言ったんだって？ 意味不明だし」

言ってる自分が恥ずかしかった。そりや実のところいた事はいたわよ、結婚をほのめかされた相手は。だけど、そんなストレートに親に向かつて挨拶する奴なんていなかったから。

本当の恋人だったら嬉しかっただろうその言葉を偽物の恋人に言われるってみじめじゃない？

さっきは間髪入れずに返ってきた返事が、中々やってこなかった。窓の外を見ていた私は不審に思っただ奴に目を向けると――。

ハンドルを抱えながら、笑いを堪えている姿がそこにあった。

「な、何がおかしいのよ」

これが運転中じゃなかったら、後頭部を一発ひっぱたいていたかもしれない。

「記憶がないみたいだったから、いつ突っ込まれるかと思ってたけど。今かよ。お前遅すぎだって」

そう確かに、さっき電話に出た時さりと流してしまったのだ。

『仮にも婚約者』って言葉に。

というか、自分も『仮にも』だなんだって普通に返してたような……私って馬鹿なのかもしれない。

こいつしか知らない私の空白の時間ってどんなだったのだろう。背中がゾクゾクっとして変な汗が一筋流れた。

私のせい？

「着いたぞ」

そりゃ、車がコインパーキングに止まったのだから私だって解るわよ。

何だか昨日パターンに似ているような気がする。

この男は結局、私の問いには答える気もないらしくって。拳句の果てには

「聞かない方が身のためかもよ」

とまで言われてしまった。

聞きたくないような、聞きたいような。

何だろっ、感じ的には私が言いだしたっぽい？

売られたケンカを買います、みたいな事は容易に想像出来る過去を通ってきただけに自分が情けなくなる。

「何ぼーっと歩いてるんだよ」

そう言つて奴は私の肩を引きよせた。

一瞬何が何だか分からなくて、文句でも言つてやろうとした矢先。今しがた私がいた場所を観光客だろうっ異国の集団が通り抜けるところだった。

「ごめん」

こんな言葉をこの男に言うつもりなんてなかったのに、素直に口に出来た自分に驚いた。

でももつと驚いたのは奴だったようで。

「空耳か？ まさかお前からそんな言葉が出てくるなんて思わなかった」

と言われる始末。

まあ確かにそうなのだけど。悔しいから、置いたままになっている奴の手を片手で払ってやった。

「心配頂かなくても真直ぐ歩けますから」

また可愛くない言葉を吐いてしまう辺り、完全にお子様の切り返し。自分で分析しちゃってるって私って間抜けすぎるでしょ。

きつとまた馬鹿にした笑いをするに違いないと思ったので、今度は奴より先を歩いてやった。

行き先が何処だかも解らないのに、再び間抜けな自分に遭遇だ。

今度は自分に呆れかえってしまった。

まあいい、奴がいなくなったらそれはそれでいい事なのかもしれない。

本日の目的回避にはばっちりなのだから。

だけど事はそんなに上手くいかないようで。

直ぐに追いつかれた私は奴に再び肩を引き寄せられる事態に陥った。

そしてそのまま、九十度傾くと。

目の前に、ジュエリーショップなるお店がありましたとさ。

ここで流されては飛んでもない間違いになる。

今度はやんわりと手を掛けると。

この歳では流石にきついだろうと思われる昔の必殺技『上目使い』を繰り出してみた。

「お願い、ここに入る前に話しがしたいの」と。

すると、奴は身体を私に向き直して真顔になった。

おっしゃーまだいけたか、私の必殺技！ と思ったのも束の間。

「悪い事は言わない、それ他の奴にしない方が正解だぞ」

と一刀両断された。

解ってるわよ、そんな事。だから今度は開き直った。

「だから、何で指輪を買わなきゃいけないのよ。そこまでする事じゃないでしょうに」

それはそれは非常に不機嫌な声を出しましたとも。

何だかこいつと一緒にいると私のキャラは崩壊しすぎみたいな感じがしなくもないけど、今はそんな事言ってられない。

「じゃあ教えてやるよ。お前が聞きたがってた昨日の事を」

そう言つて目の前の男はニヤリと意地の悪いけど、ちよつとだけドキつとするような笑みを浮かべ、ガードレールに腰かけた。道の往来で立ちっぱなしっていうのもね。私も仕方なし奴の隣に腰かけた。

すると、静かにというか明らかに笑いを耐えながら語りだした私の事。

それは、一言進むうちに段々と顔面が蒼白するような話して。話を聞き終えた私の一声は

「嘘だ」

そんな事ありえないとばかりに大声だった。

「嘘じゃねえよ、ほら」

そう言つて差し出されたのは奴の携帯電話。その履歴をしっかりとみせられた私は、腰かけていなかったら確実にアスファルトとご対面していたと思う程も衝撃だった。

昨日連れていかれた小料理屋で、偶然掛ってきた小川先生の奥さんに「良いお付き合いをしています」と宣言してしまつたらしい。そ

して、奥さんの早とちりの思考に同調してしまつたらしい。遠まわしに言わずはつきり言うと『じゃあ、そろそろ結婚の話しとかも出ているのよね』との誘導尋問に「ご想像にお任せします」と何とも意味深な返事をしていたと言うではないか。

そして、私の手から奴に携帯が戻るや否や、奥さんにこのジュエリーショップを紹介され早く買いにいかないと私が引つ張つてでも連れていくからの言葉に恐れをなして、今に至るというのだ。

トドメはこうだ。

「お前があんな微妙な返事をするから。お前のせいでもある」と。

私のせいなのか？

あんたこそ、その憎たらしいほど冷静な頭で、その状況を切り抜けられなかった癖に。

私何かが出来るはずも無いじゃない。

「因みに朝一番におばさんから電話があつた。来店するとこの店に連絡済みだそうだ」

何だか面白がつてないだろうか？

それより何より、あんたがそれでいいのかい？ そっちの方も気になるところなのだけど。

もう訳も解らなくて頭の中がいつぱいいつぱいだつた。

「まあさ、指輪くらいで済むのだつたらそれでいいんじゃないか？

あんまり言う事聞かないとおばさんの事だ、きつと結婚式場は何処がいいとか言いだしそうだからな。取り敢えず指輪さえ買えば大人しくなるはずだから」

いくら親戚と言えど、そんな風に捉えていいものなのだろうか。

良いように丸めこまれている気がしなくもないんだけど……

「本当に大人しくなってくれと思う？」

「さあ？」

さあ？　ってあんた今言ったのと違うじゃない。やっぱり止めようよ。そう切り出そうと腰を上げると

「ほら、さっきから店の店員の視線が痛いんだよ、お前が納得しようにとそうでなくても指輪を買う事は決定事項だから」
何と理不尽なのだろう。

目の前の自動扉がゆっくりと開いていく。

奴の背中が店に入ると、店員の綺麗なお辞儀と素晴らしく揃った幾重もの

「いらっしやいませ」が。

そして、奴は私に向かってみた事もない笑顔を向けた。思わず見とれてしまうような笑み。

「梨乃、早くおいで」

これまた極上の私好みのバリトンボイス。

むかつくはずなのに、むかつくはずなのに。

まるで魔法に掛ったみたいに勝手に動く私の足。

完全に奴の手のひらで転がされてしまっている現実。

本当に何をやっているんだろう。

流されてる？

不可抗力で一步入ったそのお店は、とても雰囲気の良い素敵なお店だった。

店員さんもみんな綺麗な人ばかりで、よっぽど練習でもしているんじゃないかと言うほどの自然なほほ笑み付き。

奴が迷いもなく向かったショーケースは結婚指輪と婚約指輪が並んでいた。

女の人だったらみんな目を輝かせてみるのだろうそのショーケースだけど、私は横島な目でしか見れなくて。デザインよりも値札の方が気になってしまったり。

どうせ、本物の恋人じゃないんだ。

ファッショニングのつもりで適当なものを選べばそれで満足だつていうものよ。

半ばあきらめの境地だ。

何とも虚しい事なのだろう。

こんな茶番に乗る奴も奴だ。

だから、何で私相手にそんな顔が出来るんだって言うくらいの爽やかな笑顔を浮かべやがって。

ほら、店員さん悩殺してどうするんだよ。さっきから目の前の綺麗な店員さんはこの男に目が釘付けた。

なんとなくもやっとしたけれど、誓って言うこれは嫉妬なんかじゃないんだから。

私ってこんな流されやすいタイプだったのかしら？

あっという間に私の手は店員さんの手のひらに。

そう、大人しくサイズを測られていたり。

「綺麗な指ですね」

なんて、きつと誰にでも言っているのだろうとお世辞に気を良くしちやつてゐる私がいた。

私達の前にいた店員さんは二人、隣の奴は、私を差し置いて店員さんと指輪を品定め。

「これとこれ、見せて貰つていいですか？」

「はいかしこまりました」

奴の向かいにいる店員さんがショーケースが開いて、指輪を取りだした。

おいおい、本当に私抜きで候補を絞つちやうんだ。

本当の婚約者でもないし、奴がお金を払うのだろつけど、ちよつとは私もつて。

本当に奴の言う通り、指輪を買う事になりそうで、それを諦めの境地で認めつちやつてゐるじゃん、私。

三対一で勧められたらきつと反論なんて出来そうにない、そう思った時、店の奥からまたもや店員がやつてきた。

もしかして、四対一になつちやうの？

やつてきた店員は指輪を取りだした店員に耳打ちすると

「すみません、ちよつと失礼します」とやつてきた店員と店の奥へと消えて行つた。

ちよつとほつとした私に聞こえた不機嫌な声？

一瞬空耳かと思つた。

「冗談じゃなかつたんだ。まさか、ここに連れてくるなんて芳人にそんな悪趣味があつたなんてね」

その声の主は私の前で、変わらぬ笑顔を見せている店員さんでして

――。

あつけにとられるとはこの事だろう。
見事過ぎる。

まばゆい笑顔を見せながら、ひくーい声とピリツとした嫌み。
隣にいるこの男もまたツワモノ。

胡散臭い笑みを浮かべながら

「この指輪はセンスいいからね。結婚相手には是非この指輪を
センスのいいお前に選んで貰ったら最高だろ」

この場の空気がピンと張りつめているみたい。

つてうか寒い位の殺気がするのは気のせいじゃないよね。

そんな私の頭に浮かんだのは

――この二人お似合いなんじゃないだろうか――

出来る事なら、はい、さよならーとこの場を立ち去りたい。

今なら大丈夫かも。そう思った私は甘かった。

二人の会話？ にちよつとした間が出来た後、隣の男、蕩けるばかりの笑顔で私を見ながらまたもや私の肩を引きよせたんだ。
私の顔はひきつっていたに違いない。

「梨乃って言うんだ。宜しくな」

肩に置かれた手に力が籠ったのが解った。

これって、合わせろって事なんだろうね。

まあ、こいつに借しをつくっておくのも有りかもしれない、何だか
訳有りそうだしね。

これでもかって言うほど口角をあげて

「宜しく願います」と言って、隣の男を見上げてやった。

固まっている店員さん。だけど、それはほんの一瞬。ばっちり営業スマイルで

「こちらこそ『芳人』を宜しく願います」

顔とは裏腹に心が籠ってない冷淡な声で言われてもね。

私は鈍感な振りをして、大きく頷いてみた。

隣の男、いつぞやのように「ふっ」と鼻で笑ったような……

全く性格悪しだ。

そんな北極か南極にいるかのような寒い空気が一変したのは、先程店の奥に消えた店員さんが戻ってきてくれたから。

心底ほっとしたよ。

私達の声が聞こえない場所から見えていたら、みんな笑顔でなごやかに指輪を選んでいる場面に見えたに違いないけど。

恐ろしいったらなかった。

「どうですか？ お気に召したものでありましたか？」

お気に召したも何も、ねえ。

「どれもいいですよね」

そんな事を言いながら、こいつ、さっきショーケースから出した指輪を見ているし。

目の前の訳有り店員さんまでもが

「是非嵌めて見て下さい」
と。

誰も私の事なんて気にしてないみたくて。

両方の指輪を嵌めた私に

「こつちの方が梨乃に合ってるよ」

なんて、シンプルながらもちゃんとダイヤの鎮座したリング。

おいおい、大丈夫か？

流されているのは私？ それともこいつなのか。

結局、私の意見なんて聞かないまま、戻ってきた店員さんと盛り上がったこいつ。

買っちゃったよ。

店を出る一瞬、氷の槍で突いたような目が私の背中に突き刺さったように思えたのはきつと気のせいなんかじゃないと思う。

バーチャル恋愛？

「それで？ 昼休みに帰ってこいって言った対価はあるんでしょうね？」

会社近くの喫茶店で真美はスパゲッティをフォークに巻きつけながら、怪しい視線を私に送ってる。

「対価って。もう私何が何だか分からなくなってきた。今起こっているのが現実なのか、夢なのか自分でも良く解らないんだよ」
何をどうやって話せばいいのかさえ解らない。
でもこのもやもやを真美に聞いて貰いたかったのだ。

私は、サラダのレタスをフォークで何度も突きながら、昨日と一昨日の事の顛末を、掻い摘んで話してみた。

「梨乃らしくないって言うか梨乃らしいって言うか」
真美はそれだけ言うと、再びスパゲッティを食べ始めた。

「真美い」
言って少しはすっきりしたけど、何か言って貰いたいのもある。大好きなはずのグラタンでさえ味がしないほど私はテンパっているっていうのに。

「梨乃はさ、口で言うほど嫌じゃないんじゃない？ 幸い今は誰がいるってわけでもないんだから、思いつきバーチャル恋愛楽しんでみればいいじゃない。嘘から出た真って言うしね」

「バーチャル恋愛？」

最近流行りのゲームみたいになって事？

「そつバーチャル恋愛。そう言えばさ、梨乃って男運悪いよね。さっきの話聞いて思い出しちゃったよ、あんたの元カレ。名前忘れたけど、前の前のカレだっけ？ クリスマスに別れた奴」

真美の話が飛ぶのは毎度の事だけど、それは思いだして欲しくなかった。私の中で抹殺した奴の事なんか。

「何であいつの事なんて思い出しちゃうのよ。勘弁して」
忘れていたあの日の事が浮かんできて、目の前のトマトに八つ当たり。グサツとフォークで突いて真つ二つに裂いてやった。

「何だか、あいつと真反対だなんて。って事は梨乃と合うのかもよ？」

真美ってば人ごとだと思って。

「合いませんから」

敢えて、幸太との事を話さないのが真美なのだ。

元彼が同じ会社にいるというのは実に厄介な事でして。

一部始終を知っているからこそ、その前の元の元の彼の話が出てくるのかもしれないけれど。

どっちにしたって、男運が無いのは変わらない。

「だけどさ」

ちよつと声が低くなった真美はそこで言葉を一旦止めて私の顔を見ている。正直目を逸らしたくなるような鋭い眼つてやつだ。怯みながらも

「だけど？」

と聞き返して真美の続きを促した。

「言ってる事は、嫌そうなんだけど。梨乃の顔はそうは言っていないみたいに見えたけど、それは気のせいなのかしら」

そうは言っていない顔ってどんなのよ。

呆気にとられてる私の事を見捨てるように、真美はフォークを置いて、紙ナプキンで口を拭い立ち上がってしまった。

「ちょっと考えれば、解るかもよ。じゃあ、私、次行かなくちゃだから先にいくね。あーどうだろ、あんまり考えない方がいいって事もあるか」

意味深な言葉と、千円札を残し真美は行ってしまった。

私のグラタン皿には未だ半分も残っているっていうのに。

小さい頃から食べ物粗末にしちゃいけないって入れているだけに、食欲が無くても食べなくちゃだね。一人寂しく、好物なはずのグラタンをつついた。

休んだ気もしなかった昼休みが終わり、デスクで一息つく。いつもより、ちょっとだけ濃いめのインスタントコーヒー。ちょっとは、すっきりするような、気休めだけだね。

そんな些細な事を気がつく奴がここにいる事を忘れていた。

「珍しいな、お前がミルク入れないなんて。悩み事か？ なんだったら聞いてやるけど？ 上司の気遣いってので」

電源を入れたけど、時間が立って省エネモードで暗くなったパソコン画面には、私の上から覗きこんでいる元カレ上司の変な笑みが映っていた。

その昔、濃すぎるコーヒーを飲み過ぎて、胃を悪くしたのはあんたのせいだと知っているでしょ。

ここは知らんぷりをして欲しいっていうの。

振り返りもせず、マウスを動かすと、パソコンの画面には集計途中のグラフが出てきた。

「御心配なく。至って元気ですから」

「あんまり思い詰めるなよ。食欲減って倒れられたら困るのは俺だからな」

言い得て妙だ。

あの時もこうやって、自覚していたのだろうか。

仕事こそ休まなかったけど、限界寸前だった私の事に気がついていたのだろうか。

会社では無理に笑って、声出して。休みの日にはベットから起き上れなかった私の事。

「そんなにヤワじゃないですから」
どうも強がる癖は治らない。

「それなら、いいけど」

悔しいけれど、この声は嫌いになれないとこが辛いところだ。

眼の端っこに席についたのが映ると少しほっとした。

正直、未練が全くないっていったら嘘になるから。

忘れようと蓋をしているだけ。

あんまり近づいて欲しくないと思うのが本心なのだから。

ほっとしたのも束の間。

また厄介なのが私の隣にやってきた。

「先輩って、課長と仲良いですね。今もすごく良い感じに見えましたけど、一体何を話してたんですか？」

口元は笑っているけど、これは明らかに嫉妬の眼だね。

しかし、何をどう見れば『すごく良い感じ』に見えるのだろうか。
「私が入社した時に同じグループと一緒に組んだのが課長だったからじゃない？ 仲が良くいんじゃない？、いつまでも先輩ぶりたいのよ。ただそれだけだって」

一応邪険にするのもどうかと当たり障りのない事を言ってみたつもりだけど、まだ探るような眼をしたままの片瀬は

「そうかな」

と小首を傾げて見せた。流石二十歳そこそこの子がやると、威力はあるね。私に見せてもしょうがないんじゃない？ それともあれか、奴の視界に入る事を計算しているのか？ 勘ぐり過ぎかもしれないけれどね。とにかく変な疑いを持たれたままじゃと不吉な予感が走った私は

「そうだよ、それに課長、私と話している時よりも、片瀬さんと話している時の方がよっぽど良い顔してると思うけどな」

昨日、あいつに言われたけれど、私も片瀬の真似をして小首を傾げ

てみせた。

片瀬の視線は私ではなく、とうに課長に向かっていたらしい。見られてなくて正解だったか？

片瀬は私の言葉に気を良くしたみたいで

「本当ですか？」と嬉しそうな顔して、私の前から消えていった。厄介だと思ったけれど、片瀬のお陰で少し気が楽になったかも。

さてと、本当に仕事しなくちゃ。

今日も残業は嫌だからね。

さっきよりも数段苦くなったコーヒーを口にして、給湯室へと向かった。

やっぱりミルクは入れた方がいいのかも。

何なのでしょうね

もう家まで数歩のところで、メールの着信音。

慣れた手つきで鞆の中をまさぐって携帯を手に取った。

送信者、真美。

「梨乃は臆病になっているかもだね。心配すんな、梨乃が良い女なのは私が一番良く知ってる。昼間はテンパってた見たいだから、何を言っても聞かないかなと思って、真面目に取り会わなくてごめんでも梨乃にとってそんなに悪い話じゃないような気がする。あくまでも気がするだけだね。梨乃には幸せになって貰いたいって思う。幸せになる女だよ、梨乃は。今度は昼休みじゃなくてゆっくり話しかせてね」

幸せになる女、か。

本当は今頃そうなってたはずなんだけどな。そんな事思ってたって——全て絵空事だ。

「ただいま」

就寝の早い両親はもう寝ているこの時間、誰の返事がなくともそう言ってしまうのは、幼い頃からの習慣だろう。返事を期待する事なく自室に続く階段に足を掛けると、廊下の先の台所から灯りがもれているのに気がついた。

姉貴かな？　きっと果歩のミルク後なのだろう。上がりかけた足を降ろし、ひと声掛けようと灯りの元へ足を向けた。

「ただいま」

本日2度目の帰宅の挨拶をしながら、台所の戸を引くと

「お帰り。お疲れさん」

と零れんばかりの笑顔を向けてくれたのは、義兄である篤朗さんだった。思いがけない人物に遭遇してちよつと面食らう。

「兄さんこそ、御疲れさんです。てっきり姉貴かと思ってちよつと驚いた」

ヒトつ風呂浴びたのだらう、短く切り揃えられた髪は水気を帯びている。

「んつ。さっきまで麻衣もいたんだけど、お呼びが掛って部屋に戻ったところ。まだ冷えてるから、風呂入ったら梨乃ちゃんも一緒にどう？」

そういつて缶ビールを持ち上げた篤朗さん。
姉貴には勿体ないくらい良い旦那さんだ。

「ありがと、そうしよつつかないかな」
じゃあ、と言つて台所を後にした。

篤朗さんが買ってきたんだろうな。我が家ではもう久しくお目にかかつていない普通のビール。

この不況のあおりを受けたのか、父さんの舌が曖昧なのか、それともビール会社の企業努力なのか我が家の冷蔵庫を陣取っているのは専ら発泡酒なのだから。

冷えたビールをイツキ飲みする自分を想像して、行動の速かった事。スーツを脱ぎながら、化粧落としのペーパーで顔を拭いて、ベットの上に朝脱いだままのパイル地の上下を小脇に抱え、クローゼットから下着を出すと脱衣場に繰り出した。

ちょっと温めのシャワーを全身に浴びながら、真美のメールを思いだした。

幸せになる女、かぁ。

男運が無いと思っていたけれど、本当にそうなのだろうか。
元の元の奴を置いておけば、それなりの彼だったような気もする。
特にあいつは……

上司の気配りだと、私のコーヒーに気がついた**は私を振った事以外は完璧に近かったのだから。

駄目だ駄目だ。私を捨てて、出世を取った男の事なんて思い出しちゃいけないんだっていうの。

そこでまたふと考えた。私を捨てて出世？

今までの私は自分の側からそう見ていたけれど、もしかして、あいつは奥さんになった彼女の方が好きになってしまったと言う事だっ
てありえるのかもしれない。

今更ながら自分の凄い思いこみに呆然だ。

石鹸が綺麗に流れ去っても尚、シャワーを浴び続けていることに気がついた。

随分とトリップしていたような気がする。

もう終わった事なんだから。振り返っちゃ駄目なのだから。
頭を大きく左右に振って、髪に滴った水気を吹き飛ばした。

目の前の鏡に写った自分の姿を直視するのは久し振り。
そんな自分に頑張れと言い聞かせバスルームとは言い難い昔ながらの
タイル張りの風呂を後にした。

軽く化粧水を叩いて、髪にタオルを巻きあげると、さっきまでの思想を消し去るようにと両手で顔を叩いた。

先程と同じように台所に顔を出すと

「さっぱりした？」

と声を掛けてくれた篤朗さんに。

「さっぱりしました」

と。

すっぴんを晒せるのは羞恥心というものが欠如しているからなのだろうか。

食器戸棚からグラスを取ろうとした私に篤朗さんは、ちょっと待ってといって冷凍庫を開けた。

そこにはうつすらと霜のついたビールグラス。

「お疲れさん」

そう本日2度目のねぎらいの言葉を掛けて、ビールを注いでくれた。本当に篤朗さんって姉貴には勿体ないって。

プハーっ。

ゴクリゴクリと乾ききった喉を潤すビールは格別だ。

なんていったって、缶の真ん中にエビスさんが鎮座しているのだから、尚の事。

「いつも思っけど梨乃ちゃん、麻衣にそっくり。流石姉妹だよな」
篤朗さんは笑いを堪える事なく肩を揺らす。

そんな姿を見て、あいつを思いだしてしまったのは何故なんだろう。同じ肩を揺らすでも篤朗さんとは全く違うというのに。

「梨乃ちゃん、ここ凄い事になってる」

そう言つて篤朗さんの人差し指は眉間を指してる訳でして――。

ハハハと乾いた笑いしか出てこない。

そんな誤魔化しきれない笑いは篤朗さんにとって都合が良かったみたいで、突然爆弾が降ってくる嵌めになった。

「それは、婚約者さんの事が関係あるのかな」

さつきと微塵も変わらない笑みなのに。

ある意味篤朗さんも曲者なのかも？

「婚約つて何なのでしょーうね」

突拍子もない私の言葉に、面食らった篤朗さん。

ほら、グラスが傾いたままですよ。

ぼんやりと心の中で突っ込んでいる私がいた。

聞いていい？

別に内緒にしておけ、なんて言われてなかったよね。

私は誘導尋問に引っ掛かってしまい、姉貴でも、母親でもなく目の前の義兄に事の顛末を話していた。

といつても誘導尋問の切欠を作ったのは他でもない私なのだけど。

「聞いていい？」

全ての話し、といつても掻い摘んでなのだけどそれが終わると暫く黙りこんでいた篤朗さんは私にそう聞いてきた。

目の前に並んだエビス様は既に6本目。そして、冷蔵庫の中にある定番の発泡酒も並びだしたとこだ。

ほろ酔い気分には遠いけど、飲みでもしなければそんな事は言えないからね。

「答えるとは限りませんよ」

グラスに注ぎきった缶を左右に振って、テーブルに置いた。

「梨乃ちゃんさ……」

「はい？」

そしてまた沈黙。その沈黙に耐えきれず私はグラスを傾けた。グラス半分程飲んだその時に篤朗さんは言ったんだ。

「そいつの事好きでしょ」
と。

ここで発泡酒を吹きださなかった私を褒めて欲しい。

「ほらほら、またここ」

篤朗さんは天使のような笑みで私の眉間に指を指す。

「それは、兄さんが変な事言うからです」

グラスに残った発砲酒を飲みほしたのは喉が渴いているせいだからね。

動揺なんてしてないのだから。

「それはそれは失礼しました」

なんて、言う篤朗さんだけど、その笑いは何を意味しているのだからあの姉貴の旦那さんだもんなあ。

篤朗さんもある意味曲者なのかもしれない。

「じゃあ、そろそろ行くね。妹大好きの麻衣にやっかまれそうだからね。おやすみ、梨乃ちゃん」

爽やかな笑顔で去っていった。

飲み終えた缶は水道で濯ぎ、ちゃんと潰してゴミ箱に入れるところは姉貴の影響なのだろうか。

尻に敷かれてそんなイメージがあったけど、さっきの会話だと一枚上手なのは篤朗さんの方なのかもと思ってしまった。そういえば二人でこんなに会話した事なかったからな。

今更ながら篤朗さんを知ったような気がした。

それにしても、篤朗さんってば、私があいつの事好きだって？ 確かに顔はタイプよ、声も……でも、性格は最悪なのだから！

一瞬あいつの顔が浮かんだ。

それも私の指に指輪を通したあいつの顔が。

目の前にいたあの子に見せつける為だとは思っけど、私を見る目が、ね。

あれは演技だったのよ。そうは思いもするけれど、勘違いしそうになった私がいる事は否定できなかったり。

あーもう、全くむかつく。

無意識に冷蔵庫を開け、ラスト一本の発泡酒を手を取っていた。

ヤケになってるわけじゃないんだからね。

誰にでもなくそう呟いてしまった。

何だか、私って馬鹿みたい。

椅子に座りもせずに冷蔵庫の前でプルトップを引きあげると、そのまま一気に飲み干した。

喉を通る炭酸が少しは私の気持ちもすっきりさせてくれるような気がして。

酔いたいけれど、酔えない自分。

どうせだったら、父さんの晩酌用の日本酒でも飲めばよかったのかも。

何にせよ、頭の中をからっぽにしたかった。

何もかも忘れて、ぐっすり眠りたかった。

本当はね、気が付いていたんだ。

会社に行っても、あの人の事が目に入らなくなっていたのを。

むかつくと言いながらも、ふとした瞬間に頭を過るのはあいつの声だと言う事を。

だけど認めたくなかった。

まるで何かの罰ゲームように、気持ちを弄ばれているようで。

この歳で傷つくなんて辛すぎるから。

あいつがいった、婚約ごっこ。

初めの思惑より事が大きくなっているのが、困りもの。

体裁が悪いとか、そんな事じゃないんだ。

好きになっただろうしようというそんな気持ちに気が付いてしまったから。

素直になりたいじゃなくて、素直になれないのだ。

素直になったりしたら、きつと立ち直れないだろうから。

だから、私は予防線をしっかりと張り巡らなければ。

それは自分の為でもあるのだから。

手に握った缶を水道水で濯ぐとクシャリと握り潰した。

ランチのお相手

余計な事を考え無いようにしようと思うけど、勝手に頭に浮かんでくるからどうしもない。

日を追うごとに、このままじゃいけないと、はつきり婚約ごっこは終わりにしたいと言いたいのだけど肝心の奴からは、あの指輪を買いに行った日から何の音沙汰もないときた。

かといって自分から連絡するのはちよつと癪だつたり。

鳴らない携帯を見つめてため息をついている自分が虚しすぎる。

はあー。今日何度目か分からないため息をついた時、パソコンの画面に写った大きな影。

振り返らなくても解る、あの頃と変わらないこの香りは――。

「この前も言つたろ？ 何かあつたら話聞くぞって」

そう言つて、私の手元に置かれたのは、ミント味のキャンディー。

私の鞆にいつも常備してあるそれと一緒にだ。

全く、変わらな過ぎる。

最近こそ、こんなやりとりはなかったものの、あの頃はこれがいつもの事だった。

少しだけ錯覚を起こしそうになった。

私はキャンデーの包み紙を両手で引つ張って、出てきた真っ白な小粒を口に放り込む。

「上司のつてやつね」

こんな風に自然と話せるようになったのもつい最近の事。

引きつりそんな笑顔を張り付けて、無理に会話をしていたのだから。

「そつ。たまには外でランチでもするか」

そう誘われたのは別れて以来だった。

驚いて、振り向くと

「そんな顔すんなよ、上司と部下がランチしたっておかしい事じゃないだろ」

そうおどけて見せた笑顔。

懐かしいと思った。

こんな風に会話が出来るなんて一生こないと思った。

そんな自分に苦笑する。

私は小声で囁いた。

「奥さんとケンカでもしたの？」

と。それはほんの些細な復讐心。

所謂『嫌味』つてのだ。

「する訳ねえだろ」

そう言つて私の頭にポンと手を置くのがまた懐かしくて。

「了解、じゃあ、うんと高いの奢つて貰おうつと」

こんな風に言える自分にも驚いた。

「お前なあ。まあいつか。じゃあ後でな」

今までの事が何もなかったかのような、あの頃のままの会話だった。こんな気持ちで話す事が出来たのは私の気持ちが落ち着いたと言う事なのかもしれない。

私の中で大きくなりつつあるあいつの存在のせいなのかもしれない。

それは決して良い事なんかじゃないのだけど……

昼食先に選んだのは中華料理の店だった。

パーテーションで区切られているこの店は、嘗ての私達が良く利用した店。

好きだった店だけど、私はあれから一度も足を運んだ事がなかった店だ。

「懐かしい」

自然と紡ぎだされる言葉。

「だな」

話しかけた訳じゃなかったけど、短い返事があった。

メニューは昔と変わっておらず、目の前の元カレ、基、今は只の上司があれにするか？ と聞いてくる。

私は、メニューを見ながら頷いた。

小さな茶器で中国茶が注がれ、注文を取り終えた店員さんがテーブルを離れると、中国茶を一口啜った目の前の男が涼しそうな顔をしながら、聞いてきた。

「お前のため息の原因は男なんだろ」って。

バレバレだった。

何でこう、ワンクッション挟んで仕事の事か？ とか聞けないのだから。

らしいって言えばらしいけど、何だかなあと思ってしまっ。

「当たらずも遠からずって感じかな。でも、自分でもまだ良く解らなくて。そつとしといてくれるとありがたい」

それだけ言つと、誤魔化すように、茶器に手を伸ばした。

「まあ、無理にとは言わないけど、ため息星人にだけはなるなよ。お前がそんなだと心配する——。っとこれは上司としてだぞ」とつて付けたような言葉だ。

解つてるよ、そんな事。

コーヒーにミルクを入れずに飲む私に気が付くんだからね。

嬉しいと思う反面、もう近づいてくれるなとも思う気持ちもあった。

…… あつた？

まるで人ごとみたいな自分の思いに少しだけ違和感を感じた。

人気店で有るにも関わらず、この店の注文してから料理が届くのが早い事。

調理する人も、ホールにいる店員も相当手際がいいのは相変わらず。目の前に置かれた、私の定番メニューである麻婆豆腐が置かれた事で、私達の会話は一旦終わった。

当たり前だけど、変わって無い。何でここまで頑なにこの店を避けてしまったのか、後悔するほど。

こんな美味しいものを我慢するだなんて、勿体なかったかも。

まあね、あの頃はこの店に来ると思いだしちゃったから仕方なかったよね、この店もあの店もそんな店だらけ。この際、封印していた店を久し振りに回ってみようかと目論みはじめた。

「お前、相変わらず嬉しそうに食うよな」

そついうあんたも嬉しそうに見えるよ。

口に出さずに心の中で呟いた。

料理が出てからと言うもの、男の事には触れてこなかった事に安堵

した。

話すのは仕事の事ばかり、それも誰その失敗談だったり、得意先の悪口だったり。

良い意味でのストレス発散にもなったみたいだった。

店を出る頃には笑い過ぎてお腹が痛かったくらい。

そんな雰囲気を纏ったまま会社に戻った事が私にとって大きなダメージになる事なんて思いもなかった。今から考えれば容易に推測出来る事だったのに。

自分の中で、ふっきたんだと改めて思ってしまい浮かれていたのだと思う。

懐かしいと思う事はそう言う事だよね。

心がキリキリする事もなかった。

ただ楽しいだけの時間だったから。

もう恋心なんて綺麗すっぱり無くなったと確信したのだから。
だからあんな事になるなんて考えられなかったんだ。

飴が欲しいのは？

元カレであり上司の江川と食事して数日経ったある日。

パソコンを凝視していた私にふいに聞こえたある会話。

「課長、飴持ってますんか？ 私喉がいがらっぽくて。ミント味とか持ってますんか？」

この声は彼女のもので、なんでわざわざ上司である課長に飴をせがむのか、正直ピンとこなかった。

「ごめん、今日は持ってないんだ」

顔を上げずとしても解る、きつと爽やかな笑顔を張り付けているのだろくな、と。

この月末とあって、このフロアーは殆どの人が出払っていた。

シンと静まり返ったフロアーで彼女の声はさほど大きな声でなくとも響いていた。

私は助け舟を出そうと鞆に手を入れ、ミント味のキャンディを取り出した。

「片瀬さん、良かったらどうぞ」

片手にキャンディを持って左右に振ると、思いもしない言葉が返ってきた。

「結構です、私は江川課長がくれた飴がいいんです」と。

キツとした目は私に向けられたもので、まるで宣戦布告をされているようだった。

私は持ち上げた手を固まらせ、顔の筋肉が硬直したみたいだった。

そして、思い浮かんだのは先日の場面。

私の机にボンと置かれたミント味のキャンデー。

彼女が江川を狙っていたのは解っていたはずなのに。
きつとあれを見ていたに違いない。

あの眼は嫉妬そのものだ。

横目で、江川を見ると、少しだけ口の端を上げ、困ったような仕草。
だけどそれは一瞬の事で、奴は机の引き出しを開けると

「悪かったな、ミント味は無いけど、これでどうだ？ 先月の出張
で買ってきたご当地キャラメルだぞ、俺とした事が、課の人数分に
足りなくてどうしようかと思ってたんだ。お前が食べてくれるとあ
りがたいのだけど――」

そう言つて、彼女の手にはキャラメルの箱を置いた。

ポカンと見上げる彼女に、更に一言、きつと私に聞こえるようにだ
と思う。

「お前にしかやってないのがバレたら、困るから、内緒にしてくれ
るか？」

そう言つて彼女の頭にボンと手を置くと、怪しいまでの必殺スマイ
ルだ。

見る見る間に彼女の顔が赤らんでいく。

流石だ。

私もあれでやられた口なだけに、客観的に見ても破壊力あるよな、
なんて思ってしまう。

頭にボンと手を載せるのは、あいつの癖だ。

歳の離れた妹さんにしていたのが、癖になったと言っていた。

勘違いするから、止めた方がいいよ、と何度も警告してたんだけど
……この場合は態となんだろうな。

長い間一緒にいた私には解る気がする。それは私へのフォローのつ

もらしいと。

でもね、それで益々勘違いされちゃったら、元も子もないだろうに。小さくため息をついて、仕事を再開だ。きっと彼女は仕事にならんだろうから。まっ、いつもの事なのだけどね。

パソコンのマウスの前には、全く様の無さ無い私の携帯。本当に音沙汰なしなのだ。

このまま自然消滅でも狙っているのだろうか。自然消滅なんて、付き合ってる人が使う言葉なのか？この場合、契約破棄？ それも何か違うと思う。

明日は土曜で会社が休みだ。

実家にいる恐怖がまたやってくる。

母の浮かれ調子に付き合うのは疲れるだけに、早く予定を入れたいとこだけど、何となく携帯が気になって未だ自分から予定を入れずにいるだなんて。

こんな時誰かに誘われたら、迷う事なくそれに乗るんだけどな。

駄目だな、私って。

受け身なのが身に沁みてるみたいだ。

こんなのだから、奴にもつけこまれるんだよな。

解っているけど、どうにもできないのは、怖いからだって自覚しているだけに、本当にもう、嫌になる。

江川の言葉じゃないけど、ため息星人になりそうだよ。

真美今日空いてるかな？

朝から出たままの真美の席を見つめ、今日こそゆっくり話を聞い

て貰おうかと覚悟を決めたのだった。

いらつきの理由

フロアーの柱に掛けられた時計は十時を回っていた。

ブラインドの隙間からちらりと見える窓の向こうにはきらめくネオン。

この時間に会社に居る事は珍しくなんか無い事が当たり前になって
いるってどうなのよ。

机の上にはやらなければいけない資料がごっそりあって、時計を見る暇があつたら手を動かさなくちゃいけないのだけど。

なんでこうタイミングが悪いんだろう。

やるべき仕事は片付き、明日の予定を確認して、意を決して真美にメールを打った。

今日は比較的早くに仕事が片付いたから、直帰コースだ。と真美から連絡があつたのは二時間前。

この前、得意先の矢島さんに教えて貰った小料理屋が頭に浮かび、そこで真美に私の決意を聞いて貰う約束をしたばかりだというのに、真美を待たす事になるけれど、行けない時間じゃなかったはずなのに。

部長の鶴のひと声で、プレゼン資料の練り直し、なんて事になってしまったのも同時刻。

今は、私の両隣もその前も、一心不乱に資料と睨めっこしている。課長も課長だよ、解りましたなんて直ぐに返事しちゃうなんて。

この資料を作り上げるのに、何時間サービス残業したと思ってるんだ。

秘策を作れって。そんな言葉残して去っていく部長に爽やかな挨拶なんてしたくないつつのよ。

去りゆく部長の背中に目には見えないパンチを送ったのは私だけではないはずだ。

それより何よりね、頭の天辺から「お疲れ様ですー」って声を出す新人達が帰ってからそれを言うのもムカつく。

どうせ、お局には予定が無いとでも思ってるんだろう。

言わせて貰うけどね、私が新人の頃は、先輩を差し置いて定時に上がろうだなんて事思いつきもなかったわよ。

定時だよ、定時。

そんな時間が存在していた時なんてあっただろうか。

今回は新人組が帰った後の出来事なので、新人の事をそう思うのは八つ当たりだと解っているけど。

でも先輩が残っているのに堂々とタイムカードを定時で押す子達に軽い殺意も感じたり。

ちよつとは察しろよ、とね。

はああ。

いつもの倍イライラするように思える。

だけどそれは、定時に帰っていく新人の事せいでプレゼン資料の練り直しのせいじゃないって自覚していた。

折角、真美に胸の内を打ち明けて、綺麗すっぱり奴との関係を解消しようと思った矢先の事だったから。

このモヤモヤを解決しないと私はどの方向にも進めないって解ったから。

自分勝手なイライラだって自覚しているから、嫌になる。

カタカタとキーボードを叩く音とプリントアウトする音、資料の捲る音が、やけに強調されているような気がする。

当たり前のように空っぽになった斜め向かいの片瀬の席は、両サイドから資料置き場となっていて机の表面が覆われている。

化粧や媚を覚える前に、こういう時、何らかのフォローが出来れば、少しは江川だつて見直すもんだと思うけど。

愚痴つても仕方のない事だけど、私も真美も、吉永だつて課長だつて新人の頃はあつたんだ。

後輩が入ってから突然仕事が出来るようになるわけなのに、何で解らないかね。

あーこんな事考えるのも不毛すぎる。

今は指と頭、動かさなくちゃ家に着くの明日になっちゃうじゃん。

そうは思うけど、私の指と頭は思うように働いてくれなくて。

雑念を振り払うかのように大きく頭を左右に振って大きく深呼吸。両手を何度か握ったり開いたりして、自分に渴を入れた。

今やるべきことはこつちななのよと言ひ聞かせながら。

そんな殺氣づいたフロアーに鈍い音が響いた。

だんまりを決めていた私の携帯が不規則に振動を始めたから――みんなの視線が一気に私に向いてちよつとびびった。

『逃げないって』笑いながらおどけて見せたものの。

目の端にちらりと入った『俺様』と表示された携帯の小窓。

見た瞬間に余裕が無くなり、キーボードを叩く指が固まって携帯を凝視している私がいた。

待ちわびた連絡だつたはずだけど、はずなのだけど……

虚しくなるのは

少しずつ、胸の鼓動がリズムカルになっていく。

真美や兄さんと話したせい、妙に意識をしまうんだ。

何て事はない、たかがメールじゃない。

そうは思うが、メールの内容は気になるところ。

暫く連絡が途絶えたのはあいつがいうところの事情が無くなって、もう偽装婚約を止めてもいいと言う事なのかもしれないのだから。自分からそう終止符を打とうとしていた癖に、向こうから言われると思うと何だかみじめに感じてしまうのじゃないだろうか。

まだそうと確定していないのに、先を勘ぐり落ち着かなくなってしまふ。

変に力が入った指先で、受信メールを開いてみる。

題名無し、要件は一言。

——仕事終わったか？——

取り敢えず終わりの言葉が無かった事は私を少し冷静にさせた。久し振りのメールがこれだよ。

社交辞令でもなんか書かない、普通だったら何かもう少し書かないかな。

そうは思っけど、少しだけ芽生えているかもしれない自分の気持ちに複雑な思いが交差する。

変な緊張を解くために、大きく息を吐いてから私も真似して一言で返した。

——終わりません——

可愛げのないメール。

すると、まだ開いたままの携帯が再び振動した。
手の中にあつたお陰で今度は誰にも気がつかなかったみたい。
静かに親指を動かした。

——手空いたら電話くれ——

何だろう、このそっけないメールのやり取りは。
自分もそっけない癖に無性に虚しくなる。
やっぱり、私が思った事は正しかったんだと確信した。

「どうした？ 急用だった？」

隣の席の原田に声を掛けられて我に返った。

「急用じゃないんだけど、ちょっと席外すね」

手に持ったままの携帯を軽く上げ周りの席にいる仲間に声を掛けると、そそくさと席を立った。

フロアーを出ようとしたところに後ろから

「ついでにコーヒー落としてきて」

と声が掛る。

後ろ手で了解とばかりに手を上げると、誰もいない廊下を一人歩いた。

頭の中はいろんな言葉が列をなす。

最後は電話で丁度いいんじゃないだろうか。

会って話したんかしたら、どういう顔をすればいいのか正直解らないから。

切りだされる前に話してしまおう。

それで、すっきりするはずなのだから。

遅かれ早かれもう関係ない二人になるのは間違いないのだったなら、

それこそ早い方がいいんだ。

私の気持ちが勘違いをして大きくなる前に。

目的地となった給湯室の壁に背中を預けると、何度も深呼吸をして携帯を睨めっこ。

遙か下の方になった履歴から、俺の文字を見つけて親指に力を込めてボタンをクリックした。

三度のコールで繋がった。

頭の中でシミュレーションした言葉を言う前に、小憎たらしい、それでいて私好みのバリトンボイス。

「よう」

メール同様たった一言の奴の言葉。

それだけの言葉なのに、どうしてか、喉が張り付き言葉が出てこなくなってしまう。

勢いが大切だって思っていたのに、どうした事が

「よう」

なんて、返してる私って、本当に馬鹿だ。

話があるって言うんでしょ？

自分で自分に突っ込みを入れて、気合とばかりに自分の頬をつねってみたり。

「あのね、」

意を決して、そう話し掛けた私の声に奴はお構いなしで声を被せた。

「仕事まだ終わらないのか？」

何でだろう、いつもと違ってほんのちょっぴりだけ優しい響きに聞こえたのは。

名残惜しいと思うってしまう私がいるからなのだろうか？
返事をしない私に

「おい、聞いているのか？」

といつも通りの口調が聞こえて、思わず苦笑する。

「聞いている、まだ先が見えない」

何でここで返事をしてしまうんだ。

さっき折角話し掛けたのだから、この際こいつの言葉を無視して

『もう終わりにしよう』

と言えればいいだけなのに。

——先がみえないんじゃ仕方ないな。明日にするか——

そんな呟きが聞こえてきた。

きつと独り言だろうその声に反応してしまう私。

「明日、十時に迎えに行くから。」

仕事頑張れよ

仕事頑張れよ？ 掛けられた事のないような気遣う言葉に、私の頭
はふっとんだ。

終わりにしよう。と電話で済ませるつもりだったのに思わず

「解った」

と告げてしまう私がいた。

気がついたら耳元で流れる連続したスタッカート音。

何でこうなるかな……

呆然としながら、携帯を持った手をだらりと席に戻った。

「コーヒーは？」

何処からともなく飛んできた声にすっかり忘れていた頼まれ事を思い出した。

慌てて席を立とうとすると、遠くの方から

「俺が行ってくるよ」

と江川が席を立った。

私の後ろの席を通り過ぎる時、腰を屈めて最近やけに気遣ってくれる上司の顔。

「何かあった？」

私は顔をくるりと向けて、笑顔を作った。

「何も無かったです」

あるはずだったけど、無くなっちゃったんです。と言葉にせずに胸の内で呟いた。

私の言葉を聞いて、肩にぽんと手を置くと課長は給湯室へ去っていった。

向けられた笑顔と声に、焦燥感も罪悪感も切なさも感じないのは、自分の心が違う方向に向かっているからなのだろう。

再び定位置に置かれた携帯の方が私の切なさの対象になっているのだから。

明日かあ。

顔を見てちゃんと言えるか心配になってきた。

取り敢えず目の前の資料をやっつけなくては思っても、頭が上手く回らない。

暫くして、コーヒーマーバーを持った課長の登場。

「ここに置いとくから、カップ持っ後はセルフな」

ちよつと前だったら、こんなところを見たらきつと心が疼いたはず。後腐れなく未練なんてないみたいに別れた事を後悔していたはず。

やっぱりあいつの事好きになつてきてるって事だよね……
片瀬以上に不毛な恋だ。

まだ大丈夫、これ以上は駄目。

自分に暗示するように、何度も何度も呟いた。

コーヒーブレイク

課長の登場を皮切りに、今まで殺気立っていたフロアーが少しだけ緩んだようだ。

みんな一斉に手を休め、伸びをしながらコーヒーの入っているコーヒーサーバーに向かっていく。

「仙崎、コーヒー入れてきてやるよ、砂糖とミルクはどうする？」
原田がついでにと私のコーヒーカップを持ち上げた。

「サンキュ、両方一つずつでお願い」

流石原田、気が効くね、と背中を見送る。

そう言えば、原田って遠距離の彼女がいるって言ってなかったっけ？
少し前まではのろけ話してたけど、最近聞いてないような。
ケンカでもしたのだろうか……

軽くトリップしていたら、江川の声がまた響いた。

「そうだ、いいものあるんだ、疲れた頭に甘いのが効くぞ。一人一粒
だけけどな」

そう言って手に掲げたのは、あのご当地キャラメルだ。

『おいおい、ここで配って大丈夫かよ』

と口は出さずに突っ込んでみる。

江川は私に視線を合わせて、軽く笑った。

私の顔が微妙に引きつった。

これってバレたら私に飛び火しないかい？
自分の事で手いっぱい인데ゴタゴタは勘弁なのに。

何にも知らないスタッフは、回ってきたキャラメルを礼を言ってお口に放りこんでいく。

もう知らないんだから。

そうは言いつつも自分も一緒になって口に入れた。

マンゴー味のキャラメルは初めて食べたけど、中々だった。

江川を見るとしてりやったり顔の顔。

腹黒というのはこう言う奴を言うのだろう。

私の顔を見てニヤリと笑うと

「そうそう、今日帰った奴の分は無いから、内緒にしてくれよ。恨まれるのは怖いからな」

だなんて。

恐ろしい奴だと思った、でもこういうところが出世に繋がるのだろうな、と。

おつといけない、仕事仕事。

舌の上でじわりと溶けてくるキャラメルは、段々と江川との共犯者になって行くようで片瀬のキツとした顔が浮かんできてぎよつとした。

コーヒープレイクが功を奏したのか、その後一気に進んだ作業。三通りのプランが出来あがって後は、部長の判断待ちとなった。

「お疲れ」

みんな口々にそう言っていると、フロアーから一人また一人と消えって行った。

大変だけど、こう言う時は仕事の充実感も得られる時なのよね。

終電の時間に間に合うなんてきつとみんなも思っていなかったはず。まだ一人机に向かって、資料と睨めっこしている課長のお陰なのかもしれない。

あのコーヒーとキャラメルの登場で、雰囲気ガラッと変わったのだから。

上に立つ人で随分と違うのだろうな。

少し前までは、一緒のフロアーに居る事が嫌で仕方なかったはずなのに。

素直に課長の、凄さを認められるこんな日が再びやってくるなんて思いもしなかった。

帰りを待っていてくれる人達のいるスタッフの帰り支度の早い事。軽いトリップに入っているうちに、もうちらほらしかフロアーにいない。

課長は未だ机と仲良しだ。

ふとそんな姿を見ていたら、視線を感じたのか課長が顔を上げた。咄嗟に目を逸らそうと思ったが出遅れて、ばつちりと目が合ってしまう。

気まずいかも思ったのと同時に

「仙崎は帰らないのか？」

と。案に待っている相手がいないのか？　と言われているようでちよっとムツとした。

自分の考えすぎなのかもしれないけれど。

私はさつきから気になっていたゴミ箱を片手に

「これ、始末してからにしようと思って。明日の朝大騒ぎされたら、とんだとばつちり受けそうで嫌なんですよ」

とみんなが捨てたキャラメルの紙屑を示唆してみせた。

「そんな事——」

課長はそう言うが、あの年頃の子を怒らすと飛んでもないんだから。椅子から立ち上がり、上から目線で課長を見やると端から一つずつゴミ箱の中身を集めて纏めた。

証拠隠滅。

本当に考えて貰いたいもんだよ。

これを給湯室の隅に置いておけば、明日の朝来る清掃の人が捨ててくれるはず。

両手をパンパンと叩いて、任務完了と自分の荷物を纏めた。

「では、お先に失礼します」

こんな時間、お先も何もないけれどまだ数人残っているスタッフにも挨拶をしてフロアーを見渡すと、最後に目があった課長が

「サンキュウな、気をつけて帰れよ」と片手をあげた。

終電の時間まで後30分。

十分間に合う時間だけど、何となく速足で駅と向かった。駅に着き電車を待つ少しの時間、携帯を開いて着信を確認すると一件のメール表示。

——遅いからもう寝るよ、悪いけど夕飯食べてきて——

オーマイガッット。

今からですか？

こんな時間に外食なんて。

仕方無しに、コンビニでカップラーメンでも買いますか。何だかどつと疲れが出た。

それより何より、明日だ。

明日こそ、言ってやらなくちゃ。

夕飯が侘しいだけに、明日の朝はがつり食べて、奴に挑まなくては。

そんな事を思っていたせいで、危うく目の前に到着した最終電車に乗り遅れるとこだった。

こんなので大丈夫なのだろうか……

いざ、決戦

「あんだ、朝からそんなに食べて大丈夫なの？」

母さんの言葉に頷きながら、空っぽになったお茶碗片手に炊飯器の蓋を開けた。

腹が減っては戦は出来ぬっていうでしょ？

口に出さずに、母さんに目で訴えてみる。

尻尾の先だけ残った鮭をちびちびと箸でつつきながら、大口を開けてご飯を放りこんだ。

いざ鎌倉、基、いざむかつくキザ男だ。

いつもよりもちよっぴり圧化粧なのは、顔色を見られたくないから。真美にいつも言われる。

解り易い顔してるからね、と。

まさか、お面を付ける訳にいかないからな。

鏡に向かってアイライナーを引いている時にふと思った。

私ってこんなに睫毛短かったっけ？ と。

まさかこんなところで年を感じるとは思いもしなかった。

まじまじと鏡を見るのが急に怖くなり、アイライナーをポーチにしまった。

洋服は昨日から決めていた。こないだ買ったアイボリーのカットソー。

あいつの隣を歩くのを想像して買ってしまった代物。少しだけ上品そうに見えるカットソーに袖を通すと、何だかちよっぴり胸が痛んだ。

いつもより少し気合の入った私の完成。
最後だから良いよね。

一人部屋で呟いてみた。

約束の時間まであと三十分という時に、廊下をバタバタと走る母さんの足音が聞こえた。

一瞬あいつの顔が過って携帯を見るも、着信は無し。

いつも着く間際にメールや電話が入るからあいつじゃないだろうと
考え直してみたけれど。

数分後

「早く支度しなさいー。小川さん待ってるわよ」

と一際大きな声が階段下から響き渡ってきてぎょっとした。

ベットのの上に放り投げてあった鞆をひったくるように手に取ると、
返事をする前に階段を駆け降りた。

あんたって子は全く。

と母さんのばやきが聞こえたけれど、それはスルーして変わりに

「行ってきます」

と玄関に並んだブーツに足をつっ込んだ。

必要以上に爽やかな笑顔を母さんに向けているこいつの腕を引っ張
って玄関を出た。

ちらつと見えた母さんの満足そうな顔。

偽物の婚約者の癖して、気に入られてどうするのよ。

訳が解らないとばかりに、無言で目の前に止めてあった車の助手席
に乗り込んだ。

「朝から機嫌悪いね、梨乃は」
なんて呑気そうにエンジンを掛けるむかつく男。

「ご機嫌麗しゅう」

なんて、たつぷりの嫌味を込めてシートに沈んだ。

今日こいつと綺麗さっぱり契約の破棄をするんだから。

だけど、朝食の時の意気込みが窄んでしまったのは、梨乃と呼んだこいつの声とハンドルを握る長い指のせいだったのかもしれない。

勝手にラジオのボリュームをあげ、軽く目を瞑った。

ラジオから流れる心地よいピアノの音色に、少しだけ伝わる車の振動、そして、中々寝付けず、浅い眠りにしかつかなかった事が私を眠りに誘ってしまったみたい。

きつと短い時間だっただろうけれど驚く程、熟睡出来たような気がする。

「調子狂うな」

そんな呟きが聞こえて、顔を向けた。

「何処に行くって聞かないんだな」

静かで嫌味の無い声だった。

「起きてたのか？」

ふいに視線を投げられて、ばつちりと目が合った。

一瞬間が強張ったように見えたのは気のせい？

直ぐに前を向いてしまったから良く解らなかったけれど。

「何処に行くって聞いても、教えない癖に」

窓の外を流れる景色を見ながらそっと呟いた。

「かもな」

そう一言あいつが言った後、また静かな車内に戻った。

今日は車の中の雰囲気が違う。

いつもだったら、嫌味な会話がポンポンと繰り広げられるのだから。

黙ったまま、着いたのはあの宝石店の近くにあるコインパーキングだった。

言うなら今かもしれない。

あの指輪を貰ってしまったら私はきっと勘違いをしてしまう。

嘘の恋人、嘘の婚約者。

何もかもがカモフラージュの関係のその先を願ってしまう。

それだけは避けなければ。

だけど緊張で喉が張り付いたようで、思ったように声が出ない。

緊張からだけじゃないかもしれない。

私はここで終止符を打つ事に迷いがあ……るんだ。

演技とは言え、私の家族に対して誠実であろうとする姿。

そして私を名を呼ぶ、あの声。

私が『もう止めよう』と言ったらそれが最後、もう二度と聞けないのだから。

だけ——。

ハンドルから離された長い指がエンジンキーに掛る。

小刻みに揺れていた振動が止まった今が、その時なんだ。

「ちょ、ちょっ——」

膝の上に置いた鞆の紐を両手で握りしめ、ありったけの勇気を絞っ

て呼びかけたのに

「待たない。行くぞ」

私の声を遮って、ドアを開けたあいつ。

外気の冷たい風が車の中に吹き込んできた。

「行けない」

その言葉を言うのにどれ程苦しい思いをしているのか、こいつは解らないだろう。

それなのに、あいつは私の言葉も聞かず、車を降りてドアを閉めてしまった。

ボタンと閉まるドアの音は私の心を遮断したかのよう。

一人残された私は、唇を噛みしめて涙が出そうになるのをグッと堪えた。

小さな紙袋

俯いたまま唇を噛んでいると、突然なつた携帯の着信音。静かすぎる車内に響いたその音はあいつからのメールだった。

「直ぐに戻る。絶対そこから動くなよ。絶対だ」

繰り返される絶対の文字。

何処までいつてもむかつく男。

そして、何度もその文字を追って気が付いた。

ここから、居なくなるっていうのも有りだったのか、と。

そんなつもりは全く無かった。

何も話さずに帰るなんて思いもしなかったから。

順序が違っただけなのだから。

返信は出来なかった。

了解というたつた二文字の言葉なのに。

私の言葉を遮ったあいつへの反抗心かもしれない。

携帯を開いたまま、じっとその画面を見つめていると苦しくなる。

文字が勝手にあいつの声に変換されて、私の脳内に流れてきたから。

もう手遅れ？

あいつの声を聞く度に、浸食されていくよう。

気持ちが増速していくみたいで、怖くなる。

一つ深いため息を吐いた時、運転席のドアが開いた。

小さな紙の手提げ袋が目に入った瞬間、胸がキューッと苦しくなる。

あいつは黙ったままその紙袋を後部座席に置くと、私に見向きもせずエンジンを掛けた。

何も言わないあいつに思わず声を掛けた。

「今度は何処に行くつもり」と。

すると、今まで無かった反応が返ってきた。

「レストラン、予約しているから」

驚き過ぎて、どう答えたらいいか解らなった。

宝石店からさほど離れていない場所にそのレストランはあった。

一軒家を改装したそのお店は、外から見たらレストランとは気がつかないかもしれない。

可愛らしいお家だなと思わせる外観。

入り口へと続く石畳を、あいつは進んでいく。

言いたい事を言えないまま、私はその後ろ姿を追った。

最後の晚餐か。今は昼だから、晚餐とは言わないか。

自然と小さくなる歩幅。

お気に入りのミュールの先を眺めながら、何をやっているのだろうと情けない気持ちになる。

さっきの決心はどうしたのと自分に問うけれど、一度振り絞った勇気はまだ充電されていない。

見つめていた茶色のミュールの先に、あいつの踵が。

ぼーっとしていたせいか、何時の間にやらあいつが立ち止まった事に気がつかなかった。

私も同じように足を止める。

「話しあるなら後で聞くから」

いつもより一層低い声に背筋がぞくりとなった。
正面を向いているから顔は解らない。

「うん」

さっきの駐車場での事、気に掛けてくれた？

私が返事をする、あいつは数歩先に進み、入口のドアを引いた。
ドアの横に立っていると言う事はレディーファーストという事なの
だろか。

私を見るあいつの顔は、いつものように嫌味っぽいそれでいて身惚
れてしまうような笑顔。

その視線から逃れるように、店内に一步踏み入れた。

お店の人に出迎えられると、あいつは二、三言葉を交わし、店の奥
に連れていかれる。

パーティーションで区切られたその奥に、小さなスペースだけど個
室があった。

猫足のテーブルセット。

壁に掛けられたルノアールの絵画。

窓際に飾られた、名の知らない小さな花。
感嘆の声を漏らさずにはいられなかった。

「素敵なお店だね。良く来るの？」

お店の素敵さにさっきまでの気まずい雰囲気は少し緩和されたみたい。
い。

「同僚に教えて貰った。俺も初めてだ」

椅子に座り、テーブルに置かれたおしぼりでゆっくりと手を拭くそ
の仕草に色気を感じるってどういう事なのだろう。

一度気が付いたこいつへの気持ちは困った事に些細な事まで、反応してしまう。

それが自分の首を絞める事になろうとも。

俺も初めてと言った事にも安堵してしまう私がいた。

終わりにしようとしているのに。

静かにノックされ入ってきた店員。

目の前に鮮やかな前菜が並んだ。

自家菜園で作られたという十種類以上の色とりどりのサラダ。
優しい口当たりのビシソワーズ。

メインは子羊のグリル。

きつと、凄く美味しかったんだと思う。

きつと。

飾り付けも素敵で、何もかもが最高だったはずなのに。

いつもと違う饒舌で、柔らかい笑みを浮かべるこいつに……

料理の味が解らなかった。

会話はしたと思う。

あいつが話して、私が話して。

それは、私の会社の事だったり、あいつの患者の話だったり、二度目に会う切っ掛けになった雅也の事だったり。

だけど、会話をしながらも上の空だった。

楽しいと思いたくなかったから。

これ以上、私に入ってこないでと気持ちに蓋をしながら会話をしたから。

きつと、あいつも解っているのかもしれない、今日が最後だって。
だからだろう、このレストランでのあいつは今までみたどのアイツ

とも違ったから。

気持ちに蓋をしながらも、この時間が終わらなければいいと思ったのも確かだ。

だから、私はビクビクしていたんだ。

作りものの笑顔を張りつけながら。

指輪の事を言いだしませんように、と。

別れを言うつつもりなのに、自分が矛盾しているのは良く解る。良く解るけど、矛盾してしまうのだ。

最後に運ばれたコーヒーを二人で飲み干した時、あいつがゆっくりと立ち上がった。

それは、私にタイムリミットが近づいてきた事を告げるサイン。

「ご馳走様」

私は笑えているだろうか。

最後くらい私が払った方が、とも思っただけ。いつものように奢られる事にした。

「ありがとう。美味しかったよ」

車に乗り込んで一番初めに言った言葉。

本当は味なんて解らなかったんだけど、きっと美味しかっただろうから。

嘘をついた訳じゃないけど、悪い気がして目を逸らしたら、ちらりと見えた小さな紙袋に胸が痛んだ。

お役御免

「まだ時間あるし海、行かないか？」

これは空耳だったのだろうか。

最後と思っている今日は驚く事ばかりだ。

初めてなんじゃないだろうか、あいつが私に聞くなんていつだって、俺様で、私の事なんてお構い無しの癖に。

別れが海っていうのも定番かもね。

虚しくなる気持ちにもなるが、これも思い出と言う事で私は『いいよ』と返した。

もし、嫌だと言っても行きそうな気がしなくてもないけど。

同じ県内でも海岸沿いのこの町は来た事が無かった。

海水浴のシーズンが終わり、波打ち際ではサーフィンを楽しむ人が数人いるだけでひっそりしていた。

海の家のお忘れ物だろう、錆びついたベンチに二人腰かけた。

「久しぶりに来た」

「いいところだね」

海風が潮の香りを運んでくる。

海に来たのはいつ以来だろう。

思いだしたくない過去の恋の断片が頭の片隅に浮かんできて、それを振り払うかのように大きく息を吸い込んだ。

態度がバレバレだったらしく。

「何？ 昔の男の事でも思いだしたのか」
なんて言われてしまった。

「別に、そんなんじゃ——」

口籠ってしまったのは、私を見る目がとても優しくなったから。
どうしてそんな顔をするの？

嫌でも鼓動が加速していくのが解る。

そんな私にふいうちみたいに、襲った言葉。

「話しあるんだろ？」

その瞬間、潮風の音も波の音も周りの全てが聞こえなくなった。

一文字一文字丁寧に紡がれたその言葉。あいつの声だけが頭の中に
響いている。

海に来たばかりなのに。

私の海の思い出が塗り替えられる瞬間がやってきたみたいだった。

「もう——」

思わず詰まる言葉。言いたくないけど言わなくちゃいけないその先
の言葉。

「もう？」

きつと解っている癖に、そうやって今更優しい言葉を掛けてくるな
んて。

「もう、終わりにしたいの。——これ以上こんな関係をしてい
るのは辛くなってきた」
言い終えた瞬間にハツとした。

最後のその言葉は言うつもりじゃなかったのに。

これじゃ、自分で告白したみたいなものじゃない。

どうしたらいいか解らず、風になびくスカートの端をじっと見つめた。

暫く黙っていたあいつが、ふーっと息をついた。

「要するに、お役御免って訳だ。元カレが恋しくなった？ 同じフロアーだもんな」

江川の事は話していた。

彼が結婚している事も、そして、最近わだかまりなく話せるようになった事も。

丁度いいと思った。勘違いしてくれているなら、それはその方がいいと思ってしまうた。

「うん、やっぱりあの人が好きなの」

違う本当はあんたの事が好きになったの。

そう叫びたくなるけれど、自分に対してそんな思いが無い事はこの数か月で解り過ぎるほど解っている。

元々私達は付き合ってすらないのだから。

「まあ、それはそれで仕方ないし。元々俺らそういう関係じゃないしな」

ほら、やっぱり。

——元々俺らそういう関係じゃないしな——

こっちは心臓が止まりそうなくらい、おかしくなるくらい辛いつていうのに。

何て事なさそうに、言っただから。脈が無いにも程があるっていう

の。

「了解、もうこれからは呼び出さない。だけど――」

「だけど？」

決定的な言葉の後に続くのは？

「だけど、俺の方はもうちょっとの間悪いけどお前を利用させて貰うから。迷惑は多分掛けないから、いいよな？」

複雑な心境だった。

利用だよ、その言葉に少しだけ、ふっきれた気がした。

「多分って何よ。絶対にして」

そう言って笑えたのは、一体どうしてなのだろう。

そんな自分におかしくて、必要以上に笑ってしまった。

「多分は多分だよ。俺からは呼びだしも連絡もしない。だから――いいよ、な」

あいつも笑いながら言うもんだから、思わず頷いてしまった。

まだ今日だから

「まさかこんな明るいつ時間に帰る事になるとは思わなかったな」
高速を降りる時、笑いながらそういつたあいつ。

「本当だね。高校生だつてこんな時間に帰らないかも」
私もつられて笑つてしまった。

——じゃあ、もう少しだけ——

そう言いたい、そう言われたい？ そんな言葉が過つたけれど、未練がましく一緒にいたら今日私が決心した意味が無くなるから。トラックが少ないせいか、土曜の午後という時間のせいなのか、幹線道路は空いていて刻々と我が家に近づいてくる。

「あつすつかり忘れてた。後ちよつとだけ付き合えよ」

見慣れた地元の風景に入り、窓の外を『何も考えないように』と見つめていた私は咄嗟に返事が出来なかつた。

私が振り返つた事が肯定の意味と思つたのか、それともいつのもように私の返事なんてお構い無しといつたところだろうか、曲がるはずの道をスルーして、辿り着いた先は私が小さい頃に良く遊んだ公園の駐車場だつた。

「懐かしい」

子どもの頃はよく姉貴と一緒に来たつけ。

「ああ」

そう言ながら身体を捻り後部座席から、あの紙袋を取ったんだ。

「これ、俺が持ってもしょうがないから。婚約指輪と思わないで、買う時に言っただけにファッションリングにでもしたらいい」

ほら、と言つて渡されたけど受け取るなんて出来ないと言つぱねた。

「誰かに渡そうにもお前の名前が入ってるんじゃない、渡せないだろ。付けたくないなら捨てるなり売るなりすればいいから」

——だったら、あんたが売ればいいじゃん——

そう思つたけれど、出来なかった。

見た事もないような何だか切ない顔をしていたから。

「じゃあ貰つとく」

膝の上に置いた紙袋。

「お前の家の人にも悪かったよな。期待させて」

ポツリと言つた言葉だけど、それが一番問題なんだよ。

朝からあんな楽しそうな顔さえていて、何言ってるんだか。

ああ、本当にこれで終わりなんだと思つたら、身体の中からジワリと何かが溢れてきそつて。

泣くもんかと齒を食いしばった。

フロントガラスの先の子ども達を見ているのだろうか。

黙ったままハンドルに両手を重ね顎を乗せる横顔をそつと、盗み見た。

さらつとした髪。

綺麗な目。

通った鼻筋。

ゆっくりと視線を下ろして目に入る、唇。

厚くもなく薄くもない唇。

こんな時になつて、あの時のキスを思いだしてしまった。

高田とお見合いしたその日、助けてくれたこの唇。

あの時から目に入れないようにしていたなんて、なんて少女趣味だろう。

激しくて優しいキスだった。

きっと今までで一番のキスだったかもしれない。

私って、何でこんな最後の最後でそんな事を考えてしまっただろう。馬鹿にも程がある。

だけどそれでも、これで最後だからという事もあるのだろうか。

じつと見つめ過ぎたせいか気配を感じたのか、顔がゆっくりと私に向いてきた。

そして、綺麗な瞳が私を映した。

真直ぐなその瞳から、目を離せなかった。

どのくらいそうしていたのだろう。

たった数秒だったかもしれない。

「今日、で終わりにするんだよな」

突然降ってきた言葉に私は小さく頷いた。

その途端、やつの長い指が私の顎に掛った。

「まだ、今日だから」

聞こえないような小さな声でそう呟いた後、あの時のように、違う、それ以上のキスが……

頭の中が混乱してる。何で？ どうして？ と。

だけど、これを望んでいるのは紛れもない自分。

忘れられなくなっちゃうのに……私の思考が働いたのはそこまでだった。

後は必死に拳を握りしめていた。

この広い背中に手を回したくて仕方の無い手を動かさないように。

両手に、身体にこいつの温もりが伝わってしまったら最後、私はずっと忘れられなくなる。

何度も何度も角度を変えて口づけてくる。

ここは昼間の公園の駐車場という事も忘れてしまっくらい激しいキスの嵐だった。

最後に、チュツと音のする啄みのようなキスの後、私の顎に添えられた手が離れていった。

「これ、指輪代な」

「馬鹿っ」

口紅がすっかり剥げてしまったたろう唇をそっと手の甲で拭くと、私は笑顔を張り付けた。

「じゃあ、私ここで降りるよ。まだ明るいし、ちょっと歩きたいから」

もう限界だったから。

「本当にここでいいのか？」

何でもこう最後に優しい言葉を掛けるかな。

察しろって言うの。

まあ察しられても困るんだけど。

「これ、ありがとね。じゃあ」

紙袋を持ち上げて二度目の『じゃあ』を言うと私はドアを開けた。オレンジ色のミュールが片方だけ車から出ると、思いがけず、もう一度声が掛った。

「あのさ、さっきの話しなんだけど。俺からは連絡しないから、もう少しだけ婚約者の形でいて欲しいんだ。勿論梨乃は何もしなくていいから。ただ――」

もう片方の足を車から出して両足を揃えた。

あいつが言い淀んだ先は私が一番のネツクになるところ。

それをしてたら、まだ囚われて続けてしまうのじゃないかと、珍しく冷静な判断が出来てしまう事に驚きだった。

でも、断る事が出来なかったんだ。

「もう少し、家族には婚約してる振りをすればいいのね。それでその『もう少し』はどれくらい？」

「――本当は半年と言いたいところだが、一か月、そうしてくれると有難い」

やけに力が入ったその物言いに、理由を聞いてみたいところだけど、さっきの余韻が唇に残ったままな私は一刻も早くこの場から立ち去りたくて。

「了解。一か月だけだからね。芳人」

背中を向けたまま、そう言ってドアを閉めた。
初めて名前を呼んでみた。

あいつが、芳人がどんな反応をしたか見てみたかったけど、振り返る事が出来なかった。

頬に一筋涙が零れてしまったから。

それからどうしても、家に足が向かなくて、公園に入り、子ども頃良く遊んだブランコの前のベンチに腰掛けた。

目の前でブランコを揺らす子ども達がいるというのに、私は溢れ出る涙を堪える事が出来なくて、ハンカチを目に当てて声を殺して泣き続けた。

涙はいつまでも枯れてくれなくて、とうとう一人ぼっちになってしまった。

気が付くと、辺りは暗くなり外灯が私を照らしていた。

帰りたくないけど、帰らなくては。

オフィスの椅子とは違い、堅い鉄製のベンチに座り続けたせいか、お尻が少し痛くて、情けないなあと一人呟いてしまった。

上司命令？

何があっても陽はのぼるか。

調子が悪いと部屋に一日中籠ってきた昨日はあつという間に終わってしまった。

あいつのことを考えないようにならないうちに、する事がないって言う事はどうしたって考えてしまう訳で。仕方ないから、一日中唇の余韻に浸ってしまった。

こんなに好きになる予定じゃなかったのに。

知らぬ間に唇を噛んでしまうのは、終わりにした事を後悔しているからなのかもしれない。

いつもの時刻よりも大分早めに着てきまわったオフィス。

何かをしていなければ、本当にやってられないのだ。

当たり前だけど、就業時間まで一時間も前ならばそこには誰もいない。

冷え切ったオフィスに身を縮こませ、パソコンの電源を入れた。

金曜日に仕上げた資料の見直しだ。

共有ファイルを開くと、グラフの数字を重点に目を動かす。

きっとプリントアウトした資料で江川がチェックしているのだろうけれど。

今回は社外秘だなんて言ってる場合じゃないだろうからな。ちらっと見てしまった課長と書かれたプレート。

そう言えば、あいつにそう勘違いさせていたんだっけ。

そんな事有るわけないのに。

確かに、別れたく無かつたし、辛い思いをしたけれど、奥さんを悲

しませたいとか恨むとかそんな気持ちにはなれるはずがないのだから。

私を選ばなかったのは、私じゃ駄目だったからだ。

いくら専務の娘とは言え、将来の伴侶を好きにならなそうな人を選ぶ訳がないのだから。

……と思いたいだけなのか？

どちらにしても、私じゃ無かったのは確かだ。

そういえば、子どもとか聞いた事なかったけど、正確に言うとも聞きたくなくて情報をシャットダウンしていたのだけど、どちらにしても噂に登らないと言う事はいないのかもしれないな。

取り敢えずコーヒーでも淹れますか。

大きく伸びをして椅子から立ち上がると、机の上に置いた携帯が震えだした。

小窓に並ぶ数字の羅列は、登録していないナンバーだから。

誰からだろうと手に取り、耳にあてると

「もしもし、俺。誰だか解る？」

今しがた考えていた江川からだった。

「毎日のように声聞いてますからね。解らないと言った方が良かったですか？ 課長」

もしかして何か不備があったのかと、自然とパソコンに目が行った。

「昔、何回か連れて行った事がある安藤物産のあの頃の社長覚えてる？」

自分の意図していない問いかけに、一瞬頭が混乱したけど、すぐに浮かんだ恰幅のよい身体に優しい顔。

「覚ええいるよ。今は引退してるんだよね」

細かい人だから、メモ取りに付き合えて、配属前の研修期間、江川について何度か営業について回ったんだっけ。

それで、私には営業は向かないって解ったんだ。

携帯を耳にあてながら、給湯室へ向かう。

「それで？ 仕事の話だったら会社に来てからでもいいじゃない」
そう言えば、付き合ってた時も同じ会社にいるのに携帯で連絡取ってたっけと思いだした。

そんな事を穏やかな気持ちで思いだせるようになるなんて、ちょっと前までは考えもしなかった。

目的の給湯室に向かうと金曜日に私が纏めたごみ袋が目についた。さーっと見てキラメルの紙ごみが見えない事をチェックしてしまふあたり自分がおかしくて笑ってしまふ。

「何笑ってたんだよ。いや、いろいろと外野が煩いから、会社に来る前にとっと思ったんだ。安藤物産でちよつとしたレセプションパーティがあるんだ。その今は引退した前社長の安藤さんがお前は元気か？
って話になつて——」

江川の話しを聞きながら、サーバーで一人分淹れるのも、とヤカンに火をかけた時、静かな廊下にコツコツと響く靴音を聞いた。

「ねえ、もしかして今」

そう口にしながら給湯室から顔を出すと私同様携帯を耳にあてる江川と目が合った。

「お前、こんな時間から会社にいたのか？」

お互い目の前にいるのに、携帯を耳にあてたまま。

顔を見合わせて苦笑する。

一人分から二人分へと変更したインスタントコーヒー。
私はミルクをたっぷり、江川はブラック。
デスクに並んで腰かけた。

「で、そのパーティに私と一緒に行けと？」

「返事はしてないから、行きたくなければ全然構わないんだ」

懐かしい顔が浮かんできて、行ってみたいとも思っけど……

普通同伴するのは、奥さんだよな。

ゴタゴタに巻き込まれるのはちょっと勘弁かも。

「上司命令じゃないのだったら、パスかな」

しがらみってもんが有るからね。

いくら秘密にしていたからって、江川と付き合っていたのは事実なんだ。

何処でどんな風に知れるか解らない。

いくら、今はそんな思いが残っていないとはいえ、二人で出掛けたとなれば、専務の娘と結婚している江川に悪い風が吹くかもしれない。

「了解。安藤さんには伝えておくよ。会いたがってたから残念だろうけどな」

ミルクで薄めたコーヒーは丁度飲みごろで、コクリコクリとカップの半分を一気に飲み込んだ。

話はここまで、と江川の鞆から取り出した資料の訂正箇所をパソコンに打ち込んでいく。

きつと休日返上で、読みこんだはず。

綺麗に揃えられていた資料は、少し厚みが増していたから。

三十分も経つとちらほら顔を出すスタッフ。

お互い

「早いねえ」

なんて言葉を交わしながら、金曜日の慌ただしかった残業を労いあう。

そして、就業時間あと五分というところで、甲高い声がフロアーを駆け巡った。

「あー誰ですか、私の机を触ったのは」

挨拶をそこに、両手を掻き抱き

「怖いかも」

と周りのスタッフをぐるりと見渡す片瀬の登場だ。

マウスの位置が違う

卓上カレンダーの位置が違う

ぶつぶつと言いながら、デスクの引き出しをチェックし始めた。

引き出しの中もおかしい気がする、と江川の元に泣きつきにいく片瀬を、同じグループのスタッフは冷めた眼で見ている。

呆れ返っていると言った方がいいような……

『悪かった、急にプレゼン資料の作り直しで、机の上を少し借りたんだ』

他でもない江川からのその言葉に、身体を少し捻りながらさつきとはトーンの違う猫撫で声。

「えー大変だったんですね。そんな事なら、私も呼んでくれれば手

伝ったのに」

私の両隣で、同時に深いため息が漏れた。

片瀬は挨拶の仕切り直しとばかりに、みんなに

「おはようございます」

とテンションの高い声を掛けながら席に戻ったけれど、その声に返すスタッフの声がいつもより数段低かった事には気がつかなかったようだった。

泣いた？

「最近随分と『あの』課長と楽しそうに話ししてると思ったら。あんたって子は全く」

久しぶりに真美を捕まえた金曜の夜。

最近みつけた会社近くのショットバーの片隅で、事の顛末を話してきかせた。

どうやら、あいつと偽の婚約関係を終わりにした事に驚きつつも、私が江川に救いを求めていると勘違いしているみたいだった。

「そんなんじゃないよ」

と言えは言うほど言い訳じみてくるから不思議。

そんなつもりはこれっぽっちもないのに。

「まあ『焼きぼっくいに火がついた』って言葉もあるくらいだから、気を付けなよ。江川はもうあの頃の江川じゃないんだよ」

真美の言葉はストレートだ。

確かに江川と話す機会が増えた、一瞬昔のようだと錯覚をすることもあるけれど、恋に焦れるようなそんな気持ちじゃない。

話しているのは殆どが仕事の事だし、ましてや浮かれた話なんてこれっぽっちもしてないのだから。

「でもさ、一緒に昼食出掛けたり、残業で二人だけになるっていうのは、嗜好きには堪らないターゲットになるだろうからね」

確かに。真美の言う事は一理ある。

ある日、トイレで自分の嗜好に遭遇なんて事もあるかもしれない。

「うん、気を付けるよ。昼は考える。後は片瀬さえまともに仕事してくれたら、残業で江川と一緒にになる事も少なくなるんだけどね…」

「あー、あの子ね。一丁前に江川狙ってる子でしょ？ 会社は何しに来てるんだか。男漁りの場じゃないつつつの」

ああ言うのがいるから、女は馬鹿にされるんだよ。

本当に小さな声だったけど、最後の呟きは、今の真美を苦しめているのだろうセクハラまがいの取引先なのだろうな、と。

真美はどうして話してくれないのだろう。少しだけ一線を引かれているようで、口に含んだ甘いカクテルがほろ苦く感じる。

「面倒臭いね、女って。性別なんてなければいいのに」
本気なんだか、冗談なんだか解らない真美の言葉。

「そうかも、しれないね」
それは投げやりな気持ちなんかじゃなくて、本当にそうだったら楽になるのかなといういろいろな思い。

「梨乃は——」
そう言ったきり口を噤んだ真美。

真美のグラスの氷がカランと音を立てると同時に
「泣いた？」

ヒュッと自分の息を呑む音が聞こえた。

「泣いてすつきりした？」

追討ちを掛けるような真美の言葉に出しきったはずの涙がじんわりと浮かんでくるのが解ったけれど、泣くもんかと齒を食いしばった。

「あたしはさ、逃げるんじゃないで、当れば良かったのにつて思うんだよね」

まるで、独り言のように呟いた真美。

「案外さ。嘘から出た真つて言うの？ そんな感じにも思えなくなんだけど」

今度は私の顔を覗きこみながら、呟きではないそんな文句。

「勝手な事言わないでよ」

たったそれだけの一言が震えたのは、私の気持ちなんて考えていない真美へのいら立ちから。

「だったらさ、何で断ち切るはずだったのにあいつの望みを聞いちやうの？ まだ繋がりを求めているからじゃないの？」

真美の言う事は尤もだった。

でも隠しておきたい本心を見透かされてしまった私は何処までも天の邪鬼になってしまう。

「そんな事無いよ」

堪えていた涙が溢れてきた。

だけど、それこそ暗示を掛けるように

「もう、終わりにしたんだから」

と手の甲で涙を散らして、ロングショットを一気に呑みこんだ。

「了解。ごめん。意地張らなくても思ってたからさ。梨乃がそう言

うのならもう何も言わないよ」

解ったのか解ってないのか、真美はそれ以上何も言ってこなかった。

私の頭の中にはずっと真美の言葉が駆け巡っていた。

逃げんるじゃなくて。

繋がりを求めている。

私だってそう出来たらどんなに良かったか。

だけど、どうしようも無かったんだ。

帰り際、真美に念押しともいえる釘を刺された。

「ここで江川に頼ったらあんた本当に浮上出来なくなるからね」と。

その言葉に直ぐに返せなかったのは

『何かあったら相談しろよ』と笑って言った江川の顔が浮かんだから。

だけど、江川に頼ろうとはこっぴちも思っていない。

一呼吸置いて

「そんな馬鹿じゃないっていうの」

言ったそばから、真美に頭を抱えられた。

「梨乃が心配なんだ」

そう呟いた真美の声は聞いた事がないほど悲しい声だった。

魔法の言葉

休みの日が辛い。

家族の視線が痛いんだ。

母は何か言いたそうにしている事は気がついてはいるけれど、何と言ったらいいか解らずに顔を合わさないように過ごしてしまう。

自然と足が向くのは姉貴の家。

雅也の相手をしているのが一番安らぐなんて。

事情を知っている姉貴は憤慨しているけれど、あいつの願いを聞き入れたのは私なのだから。

あれから、一度も連絡が無いまま約束の一月まで後十日。

これで、本当の意味で終わりなのだとカレンダーを見るのも切なくなってくる。

真美の言葉も忘れた訳じゃない。

だけど逃げることを選んだのは紛れもない自分。

振られるなんて事があつたらきつと私笑えなくなるんじゃないだろうか。

今だって相当なダメージを受けているというのに。

婚約が駄目になったという間柄だけど、今のままならまた何処かで会った時、普通に飲み交わす事は出来るのじゃないかと思う。

今はまだ足を運べないけれど、いきつけの場所も一緒なのだから。

「梨乃ちゃん」

砂場で遊んでいる雅也が私に手を振る。

無邪気に笑うその笑顔が私の一番の癒しだ。

全身砂だらけになっているけれど、お構いなしで遊んでいる雅也。

私もそんな頃があつたはずなのに。
大人になるって面倒な事なのかもしれない。

日も暮れかけて、雅也と手を繋いで姉貴の家へ。
背中から覆いかぶさるように伸びる影に

「僕が大きくなった」

と手をぶんぶん振りながらはしゃいでいる。

素直に可愛いつて思うんだよな。

子どもを欲しいって思う瞬間。

だけど、それにはまず恋をしなくちゃなのか……

こんな事ならいっそのことお見合いしてっていうのも有りなのかもしれない。

「あのね、梨乃ちゃん」

雅也が私の顔を覗きこんだ。

「なあに？」

にこにこほつぺが落ちそうな笑顔。

「僕ね、さつき砂場で遊んでた、なっちゃんが好きなんだよ」

真直ぐな瞳でそう言える雅也が少し羨ましかった。

「可愛かったよね」

「うん。でもね、一番好きなのは梨乃ちゃんだからね」

雅也は何も考えずに言った言葉だろうけれど、ササクレだった私の心を解きほぐしてくれるように温かな気持ちになった。

雅也に元気と癒しを貰った休日明け。
思わぬ呼び出しをされた。

「仙崎、時間が空いたら専務室に来るようにだってよ」

突然の事に戸惑いつつ、嫌な予感がする。
普段接点のない私と専務を結ぶもの――。

いつしかの真美の言葉が頭を過った。

頼っているつもりは毛頭ないが、声は掛けてくれているのは自覚しているだけにもしかしてとも思う。

胃がキリキリと痛みだした。

取り敢えず、作業中のパソコンを閉じ、ロッカーへ向かった。

取り越し苦労である事を願いながら身だしなみと咄嗟の用意をする。
鏡に写る顔は、緊張の為強張っている。

万に一つの可能性。

昇進の話でありますようにとポジティブに考えてみようかと思ったけど、そんな事があるはずないからね。

――好き――

鏡に向かって呪文のように唱えてみた。

昨日雅也から教わったんだ。

『好き』って言う顔が勝手に笑うんだよ、魔法の言葉なんだよって。

好きと言った鏡向こうの私の顔は――

ごめん雅也。やっぱり多少は笑いながらも引きつってるよ。

半ばやけくそになりつつ何度も呪文を唱えてみると。

うん何か顔の筋肉ほぐれてきたかも。

これだけ連発、それも鏡をみながら自分の顔に向かって言うなんて愛の言葉もへったくりもありはしない。

きつと雅也の思う好きとは程遠いよなあ。

それにしても憂鬱だ。

普段は押す事のない上階のエレベーターボタン。

ゆっくりと静かに登るそれは、嫌でも緊張させるもの。

甲高い電子音と同時に見慣れないフロアーが広がる。

重役室の一つであるその部屋をノックすると、中から低く短い返事。意を決して、ドアを開けると江川の背中が飛びこんできた。

正面に見える専務の顔は厳しいものがある。

心の中でやっぱり、かと思いいながらもその部屋に足を踏み入れたのだった。

対峙

「仕事中に呼び出して悪かったね」

まだ頭を下げているうちにそう言われたけれど、顔を見ずとも専務の口調からそう思っていない事は明白だ。

江川の半歩後ろに立った私を頭の前からつま先まで見渡すあたり、まるで値踏みをされているよう。

——心配しなくても、お嬢さんの敵にはなりはしないですから、ご安心下さい——

そう言ってやりたい衝動に駆られる。

エレベーターの中からこのドアをノックするまで、何度となく唱えたあの呪文。

引きつっていませんようにと願いながら、専務に向かってほほ笑んでみた。

つられて笑ってくれているのだろうけれど、目が笑ってないです。静かすぎる圧迫感あるこの部屋から早く脱出したくて堪らない。

「仕事に支障をきたしてはいかんの、早速なんだが——」

意味ありげに言葉を切る専務。

私はただ姿勢を伸ばしその言葉の先を待つ。

「俺と仙崎の仲が良すぎると、専務に忠告してくれた人がいるそうだよ」

半ば呆れたような口ぶりで江川が専務の言葉の先を変わりに説明してくれた。

専務は大きく頷いた。

忠告？ 何となく頭に浮かぶ人物はちらほらと……
多分あいつだろう。

「仲が悪いとは申しませんが、仲が良すぎるというその言葉に悪意を感じます。上司と部下の立場としてと言うのが前提の元、尊敬もしていますし、目を掛けてくれているとは自負して居ります。入社時期にこの会社の事を教えてくれていたのは、江川課長でしたので」

机に肘をつきながら『ほお』と言いながら私を射ぬく目は疑いのまなざしそのもの。

専務という肩書を通り越した一人の父親のものだろう。

「全く何を根拠にそんな事」

呟くように吐き捨てた江川の言葉。

専務の眼が更にきつくなったような気がした。

私はおもむろにブラウスの襟に手を入れるとネックレスを引き出し留め金を外した。

これが役に立つとは――。

手のひらに重なったチェーンから、シルバーリングを取りだして一歩前に踏み出した。

「まだ、日取りが決まっていけないものなので報告はしていないのですが、先月婚約致しました」

胸が張り裂けそうになるけれど、これを出せば一発であらぬ疑いは晴れるだろう。

さつきロッカーで咄嗟に思いついての用意だった。

出番が無いようにと願ったけれど、そうもいかないこの状況。

悔しいのと情けないのといろいろな気持ちが入り混じる中、私は手を差し出しながら専務に向かってお辞儀をした。

「へえ、そうだったんだ」

頭上から江川の声が降ってきた。

「すみません。先程も言った通り、まだ式の日取りも決まっていな
いもので、課長にも報告を控えておりました」

頭をあげながら、専務を見据えて言った自分を褒めたい気分。
本当は泣きそうだったというの。

会社に入って十年余り愛想笑いは私の身に付けた武器だ。
余程安心したのだろう、専務の顔が和らいだ。

「それは大変失礼したね。私も違うとは思っていたのだが、少しの
疑惑も晴らしておきたいものでね。火の無いところに、と言うだろ
う？」

少しの疑惑？ 専務の言葉に棘を感じるのは気のせいじゃない。

「だから、それはさつき仙崎の言った通り、入社時に教育担当をし
たから他の社員よりも話し易いというだけだ、と何度言ったら解
るんですか。ここまで仙崎を呼び付ける話でもないでしょ」

畳みかけるように言い放った江川の口調に流石の専務も口を閉ざし
た。

誰もが口を閉ざしたままの空間にいたたまれなくなったのは他でも
ない私だ。

「仕事も残っておりますし、もう宜しいでしょうか？」
我ながら凄い度胸だ。

専務は我に返ったように

「ああ、悪かったね。仕事に戻ってくれ」

その言葉に安堵して頭を下げると、手の中にある指輪が手のひらに食い込んだ。

部屋を出る前に江川の顔をみると、呆れたように首を竦め

「悪かったな、仕事中に」

とまるで専務に嫌味を言うようなそんな感じ。

そんな江川に私は小さくお辞儀をした。

ほっとしたのも束の間、部屋を出る為にドアノブに手を掛けると後ろから声が掛った。

「それで、仙崎さんのお相手はどんな人なんだい？ 仕事は続けるのか？」

心臓がドキリと波打った。

確かに婚約をしたと言ったのは自分自身なのだが、まさか接点の無い専務にそこまで聞かれるとは思わなかった。

私はドアノブを持ったまま、一度『好き』と唱えると。くるりと振り返り背筋を伸ばして声を張った。

「はい、大学病院で医師をしています。仕事は続けさせて頂くつもりですので宜しく願います」と。

これでもかと言うほどの笑顔を張り付け

「失礼致します」

と専務室から脱出した。

廊下の先には専務の秘書が書類を抱えて立っていた。きつと席を外すように言われていたのだろう。

私の顔をじつと見つめる彼女にも、にっこりとほほ笑むと彼女と反対方向にあるエレベーターに乗り込んだ。

馬鹿な私。

でもいいよね、向こうだって利用するって言ってたのだから私だって利用させて貰っても……

後は専務と江川が誰かに話さないでいてくれる事を願うばかりだ。ロッカーに戻ると、一番下の段に置いたベルベットの小箱を開いた。まさか、家に置いておきたくなくて、ここにしまいこんでいたのが功を奏すとは。

また暫くというか、永遠に眠って頂く事になるだろうけど。

台座に鎮座したシルバリング。

もう見る事は無いと思っていたのに、ね。

私って本当に馬鹿だ。

でも、あの場で二人で否定したって専務の疑惑が晴れたかどうか解ったもんじゃないだろうから。

噂の根源が悪意のあるものだとしたら尚更だ。

だけど、あの時よりもいいじゃない、と自分を奮い立たせる。

江川の祝福を社内で報告された時よりもね。

あの時こそがどん底だったのだから。

今は綺麗すっぱり過去の事になっている。

だから、今度も。

ロッカーの奥底に再び突っ込んだベルベット。

私が会社を辞めるその時まで封印だっていうの。

その日が来るのが寿なのか、定年なのかは解らないけれど。

きっと針のむしろだろう、フロアーに戻るため、いつもより勢いを付けてロッカーの扉を閉めた。

大丈夫、頑張れ私、と自分に喝を入れ廊下を歩き始めた。

縁起でもない事

大きく深呼吸をしてフロアーの扉に手を掛ける。

ごった返すフロアーではきつと私が入ったって気がつきやしないだろうと思っただけ、どうしてこう間が悪いと言っか何と言っか。珍しくシンと静まったフロアー。

原因は直ぐに解った。

「仙崎、お前何処に行つてたんだ」

厭味ったらしい声で私を呼ぶ部長の声。

どうやら、私のいない間におでましかったのだ。

「すみません、席を外してまして」

何となく専務に呼ばれた事は言つてはいけないような気がした。

とは言つても私は伝言を受けた側なので、ここにいる誰しもが私の行く先を知つていそうなものだけど。

「ほお、俺には専務に呼ばれた事を内緒にすると云うのだな」

何とこいつ知つていてそれを言うか。

まさかリークしたのは部長じゃないだろうな？

いや、それはありえない。

うん、ありえない。

「いえ、そんな事はないのですが」

江川と私の仲を疑われたなんて言えやしないですよ。

さて、なんと切り替えそう。

「何の騒ぎだこれは」

私に遅れる事一分、江川の登場だ。

江川は私に目もくれる事なく

「部長ここにいらつしゃったのですか？ 専務が捜していましたが、しれっとした顔でそうは言うけど、きつとそれは嘘だと直感した。専務が仲の悪い部長を捜すなんてありえない。」

江川の咄嗟の機転だろう。

このためきめ。

そして、部長はというと大して慌てた様子もなく、江川に食って掛った。

「ところで君も専務に会っていたのかね？ 仙崎さんも専務室にいたようだが。まさか君たち専務の娘を差し置いて社内で不倫なんて事をしてるのじゃないだろうね」

勝ち誇ったようにあざけ笑う部長がいた。

おや？ じゃあさっきの私の推測は間違っていたのか？
リークしたのは部長なのか？

部長の爆弾発言によってもたらされたフロアーのざわつきも気がつかなかった私。

今の今まで疑いを持っていた片瀬の顔を見ると、にっこり部長にほほ笑んでいるじゃないか。

もしかして、片瀬と部長がグルだったりするのか？

「何を馬鹿げた事を。実は、仙崎さんの結婚が決まっていますね。仕事中に申し訳ないかと思っただが、専務に報告ついでに式場を紹介して貰おうと思って伺ったのですよ。な、仙崎」

犯人捜しの推理を脳内でしていた私は江川の言葉を理解するのに数秒の時間が掛った。

フロアーのあちらこちらからは

新たなざわつきと同時に

「おめでとう」

の祝福の声。

ちよつと待ったーっ。

と叫びたくなる衝動に駆られるけれど、時は既に遅し。

離れた席にいた同期までもが集まってくる始末。

「何でここで言っちゃうのよ」

小声で隣に立つ江川に囁いたけど、私の言葉なんて何処吹く風。

「遅かれ早かれ知れるんだ。同じだろ」って。

なんてこつたい。

私は婚約を解消したばかりだというのに。

それも、嘘の婚約の……

身から出た錆びとはいえ、大変な事になってしまったかも。

背伸びをして、真美のデスクを覗いてみると。

最早、どうしようもないと言ったような呆れ顔。

泣きたい、ここで泣いてもいいですか？

ここまで一生懸命頑張ってきた私に、この仕打ちは随分ないのじゃないですか？

困り果てた私は顔を歪ませるのだけど

「仙崎さん、照れてる」
って。

何処の誰が言ったのか解りませんが、照れているのじゃなくて、泣きそうなんです。

私は腹いせにとばかり、江川の足をヒールで踏んでやったけど、そんな事じゃ気が晴れない。

「照れるな」って。江川まで言うか？

やっぱりあそこで助けるんじゃないかった。

策に溺れるってこういう時使っていい言葉なのだろうか。

「あの、まだ正式ってわけじゃないので。破談になっちゃうかもしれないし」

自分で思うより随分と控えめな声が出たようだ。

私の背中側にいつの間にかいた吉川が

「そんな縁起でもない事いっちゃ駄目ですよ」と背中を叩かれた。

まさにその縁起でもない事の真っ最中なのですが……それも自分から。

私何か悪い事した？

有給もたつぷり残っているし、早退してもいいでしょうか？
本気で帰りたいと思った。

縁起でもない事（後書き）

こんにちは^^ 拍手をして下さった皆様どうもありがとうございます
ますゝ とても励みになります！

行く宛て

「はい、仕事戻ろう」

両手をパチンと叩いた江川の合図と共に、みんなちりじりとデスクに戻って行くけれど

——相手誰だろうね——

なんて女の子たちの囁きがしつかりと聞こえているのですけれど。自分でまいた種とはいえ、まさかこんな事態に陥るだなんて思いもしなかった。

それにしても、苦虫を噛み砕いたような顔をして黙ったまま去っていった部長の背中が恐ろしかった。

完全に部長がフロアーから遠ざかった頃、私の後ろを小走りする片瀬の姿を発見。

もしかしたら、部長の後を追って行った？ 半信半疑だけどその可能性は否定できないだろう。

仕事なんて全くやる気も起きなくてポーズだけとばかりにパソコンの画面に目を向けると、先程の専務室の光景を思いだしてしまった。何だかんだ言ったって、妻の親と義理の息子って感じだったよな、と。

普段はかしこまって話す場面しか見た事なかったけど、ああやって砕けた感じで話が出来ると言う事はそれなりの関係なのだろうね。

ここ最近、江川と話し始めてから少しばかり心配はしていたけれど、杞憂だったのか？

って私江川の事なんて考えている時じゃないよ。

どのくらいばーっとしていたのだろう、パソコンの画面に焦点が合

つてくると、画面の端の小さな封筒が点滅していた。
何気なくクリックすると社内メールが七件。
思わずぎよつとした。

件名に並ぶ「おめでとう」の文字に同僚の名前。
その中に一件

「あんた何しにいったの」

と呆れた顔が浮かんできそうな真美からのメールを発見。
件名もさることながら、その内容も——ごもつとです。

「お願い。愚痴らせて」

と素早く返信を打つと、見たくもない同僚からの『お祝い＆冷やか
し』メールに目を通し途方に暮れた。

それにしても、話し回るの早すぎじゃない？

——聞いて無いんだけど。まさか梨乃に先越されるとは——
とメールを送ってきたのは2階も下のフロアーにいる同期の多香子
からだ。

自惚れるつもりは毛頭ないが、今日明日は会社でトイレに入るのは
辞めておこうと決心した。

色恋沙汰は格好の噂の餌食だ。それも行き遅れと思われる自分
の噂なんて……聞きたくないからね。

当然の事ながら、デスクの周りからの視線もビシバシと痛いほど
受けていまして。

半ば不機嫌オーラの出ている私には話し掛けたいけれど、タイミン
グを計ってるっていうところだろう。

ひとしきり悩んだ末に私の起した行動はというと。

「えーっと。さっき課長が言ったんだけど、まだ本決まりじゃないので、何かしら決まった時に報告するね。という事で宜しく願います」

呟くようにでも周りに聞こえるように、そして、これ以上聞いてくれるなとばかりの思いを込めて言ってみた。

それはそれは必死な形相でパソコンに向かった私。

誰も私に話しかけてくるなといったオーラを身に纏えたかは解らないけれど――。

今の今まで、誰も話し掛けてこなかったのだからきつとそうだったのだろう。

途中お腹の虫が騒いだけど、昼休みも取らずにグツと堪えた数時間。頭の中には残業の二文字が浮かんだけれど、私は仕事中の仲間を尻目にこの空間から退散する事だけを考えて、チャイムと同時に逃げ出した。

――やっぱり仙崎さん照れてるんだね――

なんて声が聞こえたけれど、振り向きもしなかった。

この私が片瀬より先にフロアーを出る事があるうとは誰も想像すらしなかったはず。

今日は厄日に違いない。

会社を出たとはいえ、私の行くところなんてそうは無いのは解ってはいるけれど今日ばかりはどうしようもない。

家にも帰りたくないしな。

姉貴の顔も浮かぶけど、そう続けてっていうのも何だ。

かといって行くあてもないし。

会社から少しづつ離れてくると、フロアーを出てからずっと小走りだった足も段々緩やかになってきた。

運動不足も身に沁みるよ。

ウィンドウショッピングか？

ポケットに手を入れると指先に感じた振動。携帯に浮かび上がった名前は真美だった。

「もしもし」

自分でも解る情けない声。

「あんた帰るの早過ぎ」

そう言うや否や小さく聞こえた真美の失笑。

「だって、さ」

子どもみたいな返事しか出来なかった私。

「今日私も上がるから、どうせ行くところ無いんでしょ」
言葉はきついけど、声は暖かった。

「真美ー」

耳に残る自分の声は情けないにも程がある。
本当に何処までいっても子どもっぽくって。
反対に、包み込むような真美の声。

今の私にとって、真美は神様みたいに思えた。

駅のコンコースの柱に凭れて待つこと20分。

家路に急ぐ人の波の中から、一際背筋の良い女性発見。
真美だ。

きつと泣きそうな顔をしていたんだと思う。

真美の顔を見た途端、ほっとしたのか涙腺がやばい。

そんな私に

「いい大人がこんなところでなんて顔してんの」
なんて、言葉とは反対に優しく私の背中に手を当てると

「はい、行くよ」

と目の前のタクシーに乗り込んだ。

取引先の営業マンから教えて貰ったというショットバーは、隣駅。
こんな日は満員電車でもみくちやにされたくないからね、なんて
きつと私が泣きそうな顔をしていたからかもしれない。

真美のさりげない優しさが身に沁みてくる。

案外道は空いていて15分足らずでショットバーに到着。
落ち着いた良い雰囲気なんだって、と言われた通り重厚なドアを開
くと心地よいジャズの音が聞こえてきた。

おびでない

「江川も江川だけど、なんで庇うかね」

今となつては本当にその通りです。

真美の言葉は尤も過ぎる。

「でもね、江川には後で口止めしようとは思つたんだよ。まさかこんなにも早く口外されるなんて思いもなかったんだって」
注がれたモスコミユールの泡を見つめるのは罰が悪くて真美の顔が見れなかったから。

この泡のように私のあの時の発言も消えてなくなればいいのに。

「そうは言うけど、専務に報告したんじゃ会社に広まるのも時間の問題だよ」

真美はいつにもなく真剣な声。

茶化している声でも呆れている声でもなかった。

「うん、それはそうなのだけど……後でさ、こつそり破談になったって江川に伝えて貰えばいいかなって思つたんだもん」

今にも涙が出てきそう。

「『だもん』ってあんた。でもま、広まっちゃったもんは仕方ない。人の噂もなんとやらって言うから暫く時間が立つのを待つしかないかもね。これを機にお見合いでもしてホントに結婚するっていうのもありかもよ？」

視線を合わすように私の顔を覗きこんだ真美は少し笑っていた。

「それ本気で言ってる？ お見合いつて」
最後の言葉だけが、妙にずしんと落ちてきた。

「なんかさ、梨乃だけじゃなくて、私達ってせつつかれる年齢だからね。お見合いして結婚してもおかしくないって事だよ」
そうなのだよね……。

会社に入った時は給料を貰える喜びを知って。

仕事を覚えようとやっきになって。

そのうち段々仕事が楽しくなってきた。

何時の間にやら後輩が増えて、仕事を教える立場になって。

忙しいなりに恋愛だってそれなりに楽しんで……はないか変なのばっかりだったから。でもあつという間だったように思える。

いくら頑張ったところで時間が戻せる訳でもないし、若くなることもないのだから。

結婚適齢期なんて、何歳を指すのかなのて——。

まあ、確かに結婚を強く意識した時もあったけどもう過去の話だからね。

ふーっと長い溜息をつく。

「なんだかねえ」

「なんだかなあ」

二人の言葉が重なって、顔を見合わせた時に背後に感じた気配。

「やっぱり、梨乃ちゃんだ。俺達ってやっぱり運命繋がってるんじゃない？」

聞こえないはずのジョーズのテーマソングと共に、聞きたくも無い

声が私の耳元に届いた。

真美の訝しそうな顔が目に入る。

『誰この人？』

って顔。

ちゃんと向こうにも伝わったみたいで

「こんばんは。高田さとして。梨乃さんのお見合い相手って言う方が解り易いかな」

胡散臭そうな笑顔を張り付けて、思いだしたくもない過去をほじられてしまった。

「こんばんは。梨乃の同僚の成瀬です」

やっぱ真美はかつこいい女だななんて。

少しだけ口角をあげる真美にこのエロ野郎は興味津々といったところだろうか。

なにせ、店に入ったばかりだというのに、連れの女性に向かって

「悪い。今日はキャンセルさせて」

とだけ言っと、私の隣に腰を下ろしたじゃないか。

女性も女性だ。

「別に、私もあんななんて興味ないし」

と言って本当に帰っちゃったのだから。

こんな奴と何で一緒にいなくちゃいけないんだとばかりに

「何でここに座るのよ。早く彼女追いかけな」

と一睨みしてみたけれど。

「いいんだよさつき道で声掛けただけだから。別にどうって事ない。それより梨乃さんこっちの彼女と一緒に飲んだ方が酒も旨くなる

に決まってるだろ」

なんてシレっと言いやがった。

「は？ 何言ってるの？ 何で私があんたなんかと飲まなくちゃいけないのよ」

心の底から、そう思う私を尻目に

「何そんなにカリカリしてるんだ、もしかしてマリッジブルーだったりするの？ 『あつまスター、ターキーシングルで』」

注文まで……ぶつとばしたくなる衝動が沸いてきて拳にぎゅっと力が入った。

「冗談じゃない、私は真美と二人で飲んでるの。アンタなんておよびじゃないんだから」

こんなに嫌だつて言ってるのに、全く気にも留めないようで、それどころかニヤッと笑うかと思ったら

「俺がおよびじゃないって？ そりゃそうだよな。だったら、今から芳人呼ぶ？ そしたら丁度二対二だし。どう真美さん？」

だから、私を挟んで真美と話すなつて言うの。
つて言うか真美？ 何で名前知ってるの？

「顔に出てる。梨乃さんが言ったんだよ『真美と二人で飲んでるの』
つて。それよりどうする、芳人呼ぶか？」
えっ顔に出るですって？

これでも会社ではポーカーフェイスの出来る大人の女と言われているんですけど。

そんな私を尻目にカウンターに置いた携帯に手を伸ばす高田の手を止めたのは

「私は三人で構わないよ。梨乃もいつもの調子になってきたし。この際、高田さんの知ってる小川さんの面白い話でも聞かせて貰うのもいいつまみになるかもよ」
という何とも残酷な言葉だった。

「は？」

「やっぱ真美さんって思った通りの人だ。どう？俺と。あつ彼氏がいるっていうのは俺は全く気にしないから安心していいぞ。楽しく過ごすのがモットーだから」

私の反対意見は全く耳に届かなかったようで、真美まで口説きにかかりやがった。

呆れて開いた口が塞がらない。

「あら奇遇。私も楽しく過ごすのモットーなの。でも、私と高田さんじゃ合わないそう。どちらかと言ったら――。梨乃みたいなのがタイプなんでしょ？いろいろ遊んで気がついたんじゃない？自分のタイプが」

私の口はまたもや塞がらなかった。

これには高田も言葉に詰まったらしい。
数秒のだんまりの後

「真美さんって怖い」

と呟いて、何時の間にやら運ばれていたターキーのシングルを口した高田。

おいっ、そんな微妙にリアルな間を取るなって言っの。

アルコールを補給して復活した高田は

「真美さんの言う通り。梨乃さんみたいのがタイプなんだけど、梨乃さん女姉妹？ 梨乃さんが駄目だったら、お姉さんでも妹さんでもいいから紹介してよ」
とふざけた事をぬかしやがった。

私は場所を忘れて

「あんとと親戚になるなんて御免蒙る、冗談じゃない。姉貴が未婚だったとしても絶対あんななかに紹介するもんですか」
と息巻いてしまった。

私の言葉の何がおかしかったのか、急にお腹を抱えて笑いだした高田。

「梨乃さんってやつぱり面白いよね。冗談じゃないでしょ。だって兄弟よりは遠いけど、アイツと結婚するなら、正真正銘の親戚だぞ、俺達」

反射的に真美の顔を見てしまった。
その顔には

『あんな馬鹿だね』
と書いてあるようだった。

およびでない（後書き）

ハルカさん A R I S A さん コメントありがとうございます！
す
ごく嬉しかったです♪

ケンカしてる？

「マジで？梨乃ちゃんって一見しっかりしてそうに見えるけど、そんな失態やらかした事あるんだ」

これはどういう事態でしょう。

私を挟んで会話しないでくれる？

それに、いつのまに「梨乃ちゃん」になってるのよ。

真美も真美だ。

何が、あいつの話を酒のつまみよ、これじゃ私がつまみになってるじゃない。

「だーかーら。もうどうだっていいじゃん、そんな話」

この言葉を言ったのは何回目だろう。

「俺やつぱり、梨乃ちゃんがいいなあ。知ってるよ、ケンカしてるんでしょ？ 芳人なんか止めてやつぱり俺にしとけばいいのに」

私の肩に高田の手が置かれても払いもせず、高田の顔を見てその言葉に反芻した。

「ケンカしてる？」

ケンカなのか？

「最近、機嫌悪いし、って前から愛想なんて無かったけど。ここんとか梨乃ちゃんに会う為に休みの日だってちゃんと休んでたアイツが、元のように休日返上し始めたんだよね。因みこれは、アイツと同じ病院に勤めてる看護師の麻梨香ちゃんから仕入れた情報なんだけど、俺はピーンときたわけよ」

何がピーンときただって？

「べ、別にケンカなんかしてないけど？」

クールな大人の女は何処へやら、何でそこでどもるんだ、私。

「いいって隠さなくても。だからさあ俺にしとけば良かったのに。俺が来る前、真美ちゃんに愚痴ってたくちだろ？」

こいつお茶らけてるんだか、鋭いのが良く解らない。

何て返答したらいいのか言葉がみつからなくて、思わず考えこんでしまった。

厄介そうだからな、高田は。アイツとの約束の時まで後一週間とはいえ下手な事言えない。

「高田さん、鋭いね。ちょっと違うけど、おおむねそんな感じ。思いつきり愚痴ってたからね梨乃」

真美さん、それ全くフオローになってませんから。

案の定、高田は食いついてくるし。

「だろ、そうだと思ったんだよ。いやー俺って凄い」

そう言って私の肩に置かれた手により一層の重みがかかった。

そこで初めて、手を払ったのだけど、全く動じないって。

なんて図々しいんだ、お前は。

手を払うなんて生ぬるいんだったらこうだ、とばかりに手の甲をつねってやった。

どうよ、日頃から磨いている爪を甘くみてもらっちゃ困る。

これは結構な武器になるんだから。

慌てて手をひっこめた高田に、冷たい視線を送ってやった。

それより、アイツが機嫌悪いってどういうことなのだろう？ もしかして、何に対してか解らないけど一か月の猶予じゃ足りなくて焦ってるのか？

「へえー、彼は機嫌悪いんだ。可愛いところあるじゃん」
真美ってホント何を言ってくれちゃってるのですか。

「ちつとも可愛くないけどな。ケンカしたっていうのは今日来て確
信したんだけどね、これで」
そう言って高田が指を差したのは、他でもない私の左手の薬指。

「なるほどね」

ほら、真美までそこで感心しない。

「これは——」

何もつけてない薬指をさすりながら考える。
こうなったら、本当の事言っちゃうか？

「それは、会社で冷やかされないように、ネックレスのチェーンに
通してるからね。何だったら見せてもらえば？ でも恥ずかしがり
屋さんなんだよ、梨乃は。ねっ」

ねっ、ってそこで私に振るか、真美さんよ。

それより、チェーンについてたのなんか、ものの数分だっていうの。
もう、私にどうしろと。

「いいよ見せなくても、その指輪俺見たから。貴重な休みに、店ま
で呼びだされて。結構被害蒙ってるだぜ、俺だって」

高田の言葉は結構な衝撃で。

アイツ——高田にわざわざ店まで呼んで見せたわけ？

「梨乃ちゃんってほんと、顔に出るし。因みに呼びだしたのは芳人
じゃないよ。宝石店にいただろ、気の強そうな女が。芳人が婚約指
輪買いに来たって血相変えて電話してきたんぜ」

あーあの人ね。全身で好きですオーラを出してたからな。

あの時の事を思い出ただけで、気分が悪くなりそうだ。

私は綺麗すっぱり忘れたいっていうのに。

あの時は妙に優しくったというか、普通だったというか。

「そうそう、アイツ大学病院じゃん。梨乃ちゃんも解ってるだろうけど休みだって土日にあたるって訳じゃないから、アイツ、らしくなく休みとか交換して貰ってただろ。結構な噂になってたところに、今度は休日返上だろ？ 病院の中じゃきつと別れたんだって看護師さんで専らの噂らしいよ。梨乃ちゃん、アイツってあんな無愛想なのに、人気あるらしいからあんまりケンカ長引くと誰かに盗られちゃうかもよ。ってそっちの方が俺には好都合なんだけどね」

何ののよその説明口調は、そんな事、そんなアイツがモデルだろう事解ってるっていうの。

だけど、私にはどうする事も出来ないでしょ。

本当は婚約者でも付き合っても無かったんだから。

でも、あの時この高田とお見合いした時の事を思うと、何でも無いとは言いだせないよ。

あんなキスまで見せつけといて、本当は全く関係ない人だったなんて。それこそ、付き合ってもない人とあんなキスするなんて思われちゃ、高田と一緒にじゃないか。

私を挟みながら、高田と真美が何か話しているけど、全く会話が耳に届かなくて。

あーもう、私の頭がテンパリすぎ。

カウンターに肘をつくとき頭の中に手をつっ込んでがっくりと頂垂れた。

私どうすればいいんだ？

こいつに勘違いさせたままでののか？

ちよつと意識を遠くに飛ばしていた私に突然ゾワつと鳥肌が立った。頭の上で飛び交った会話が止んだ途端、私の腕に急に高田が触れたから。

高田をみやると、思ってもみなかった反応だったらしくギョツとしていた。

でも直ぐに顔を戻して

「梨乃ちゃんのこの二つ並んだホクロ可愛いね」

なんて。

触れられた左肘を消毒するかのように右手で摩ると

「何か傷つくな」

なんて。

勝手に傷ついてるとばかりに

「これはホクロじゃなくて噛み痕です。小学校の時、犬に噛まれて痕に残っちゃったのよ」

私のトラウマだっていうの。

私に触れるなとばかりに、高田との間を少し空けてやった。

「梨乃ちゃんてさあ。おじさんとこ昔っから掛ってたんだよな」

何を今更そんな事。

「姉貴もいるからね、それこそ産まれた時からお世話になってるしスルーすればいいものを私ってば正直に答えちゃってるし。」

「そつだよな、おじさんの腕は最高だからな」

って？ なに清々しい顔してるのよ。

何だかしっくりしないものがあるけれど、だんだんと瞼が重たくなってきた。

高田のせいで、喉が渴くもんだから久々に飲み過ぎたかも。

それより何より、高田が来たから江川の事っていうか、会社での話を真美とあんまり話してないんですけど。

折角良い雰囲気のお店だっていうのに、その雰囲気も堪能出来なかったし。

そう思ったせいなのか、やっとこ耳にジャズのリズムが聞こえ始めたんだけど。

今日は何だか異様に疲れるんですけど。

いいかげんに帰ってくれないかな。

思いつきり睨んでやったにも関わらず

「俺の事そんなに見つめて、やっぱり俺に惚れちゃった？」

本当にコイツは。

呆れて何も言えなかった。

良い女？

「真美も真美だよ。あんな奴と一緒にの空間にいただけで気分が悪くなるっていうの」

真美のベットの隣に布団を敷きながら愚痴ってみるけど、鏡の前でドライヤーを掛ける真美には聞こえなかったようで口にした虚しさが増した。

こんなくしょつとばかりに布団カバーを広げると、柔軟剤の香りがふんわりと漂った。

実家暮らしの私は碌に洗濯もしたことがなかったり。いつきても、綺麗に整頓された部屋。

私とは大違いだ。

鏡越しに見える真美は化粧を落としただけ若く見える。

パンツスーツを着こなして、ヒールで闊歩する真美と同一人物じゃないみたい。

部屋をぐるりと見渡してもオレンジ色を基調としたほんわかする雰囲気。

普段の真美とはちょっとイメージが違ってたよなと来る度に思ったりするのは内緒の話。

「電器消すよ」

真美の言葉と同時に豆電球一つ分の灯りがとる。

その明りはカーテンを鈍く浮き上がらせて、落ち着いた雰囲気。

「良い感じにポワンとしてる」

真美の柔らかい口調に珍しく二人とも酔っぱらったんだと小さく笑った。

「私はね、もう少し小川さんと向き合ってみたらいいのって思ってる。ここで逃げたらきつと逃げ癖治らないから。梨乃は良い女だよ、私が言っただから間違いない……な、いつ……て——」

段々とフェードアウトした声。
もぞつと身体を横にした真美から可愛げのない寝息——基イビキが聞こえてきた。

ガールズトークするってタクシーではしゃいでたのは真美じゃない。私に何も言わせないで、夢の中へと旅立ってしまったようだ。

「良い女ね……」

自慢じゃないが、その言葉は結構言われる。

でも、かなりの率で女性から。

男の人から言われた事は皆無に等しいんだよね。

しかもこの言葉の後に大抵聞きたくも無い言葉が繋がるのだ。

「良い女なのに、男運無いよね」と。

学生時代からモテ無い方じゃなかった。

告白はいつも向こうから。

でも、私が好きになり始めた頃浮気が発覚なんて一度や二度じゃきかない。

自分に何が足りないのか本当は解ってるんだ。

可愛げが無いんだ。

でも私は自分を偽った事なんて無かったと思う。

「サバサバしてるところがいいんだよな」

そう言っただけの事を解っていたはずの嘗ての恋人は

「もつと甘えて欲しかった」と去っていった。

私にとつたら甘えてたつもりだったけど。

あー真美が寝ちゃったから、思い出したくない過去が次々に浮かんできたじゃない。

半ばとろんとした脳みそで情けない過去を思い出したせいで、涙腺が緩んだのか流れ出た涙が私の顔を横切ってふんわりと優しい香りのする枕に小さな水玉を作ってしまった。

唯一の救いは仕事が好きって思える事なんだよね。でもそんな職場にも今は行きたくないって悲しすぎる。

バーに入る前に実家に電話しようと思った携帯には、不在着信他数件の未読メール。

差出人は複数の会社仲間。

きっと明日は動物園の珍獣よろしく、好奇心目で見られるのだろうな。

外回りに出掛ける真美についていきなくなる衝動。

こんな思いをするのだから、江川と付き合っていた時内緒にしていたのは正解だったのだろうなあなんて。

私ったら、また嫌な過去を思い出しちゃったじゃない。どうして、さつさと寝なかったのだろうと激しく後悔。

真美の微妙なイビキをBGMに私も目を瞑った。

——私だって本当は向き合いたかったよ——

アイツの顔が浮かんできて、またじんわりと涙が浮かんできた。きつとお調子者のバカと一緒に飲んだせいだ。

真美と高田の会話を聞きたくもないとばかりに進んだアルコールのせい。

そうじゃなかったら、こんな風に涙なんか流さないんだから。

真美に借りたパジャマの裾で涙を拭くと、根性で寝てやるときつく眼を睨り直した。

翌朝、聞き慣れない目覚ましのベルで目が覚めた私。

ちょうど真美が目覚ましに手を伸ばしているところだった。

「おはよ、ごめん昨日何時の間に眠っちゃったみたいで」

罰が悪そうに呟く真美をみるなんて、なんてレアなんだろう。

ここぞとばかりに

「そうだよ、真美が変なこと言いながら寝ちゃったから、余計なこ
と思いい出しちゃったじゃない」

おはようの挨拶もせずに、ちょっとむくれた顔をしてみた。

でも良く考えたら、行き場の無い私を呑みに連れていってくれて、
泊めてまでくれた真美に対して随分と身勝手な言葉だったり。

慌てて真美が口を開く前に

「ごめん、昨日は助かった。こうやって少し落ち着いたのは真美の
お陰なのに、私が謝られる筋合いなんてないんだったよ」

と身体を起して頭を下げた。

「んっ」

真美は唇の端をあげながら一つ頷くと

「今日は朝作るの面倒だから、少し早くでて朝スタバでもするか、
勿論梨乃の驕りでね」

いつものように笑ってくれた。

まだ家を出るまで時間があるけど、手早く昨日下着と共にコンビニ

で買ったストッキングに足を通す。

これなら、梨乃にも合いそうと渡された、フレアーのワンピースをハンガー毎手渡され

——ピチピチじゃありませんように——

と心の中で唱えてみたり。

それから、交代で鏡の前に座って、スタバに着くまで昨日の夜の時間を取り戻すかのようにテンションの上だった会話を続けた。

お陰で会社に行くのを渋っていた事を会社のビルを見るまで忘れてしまうほど。

だけど、自動ドアを潜り抜けると否応なしに身構えてしまう訳で。

隣に並んだ真美に背中を叩かれ

「大丈夫だよ、のらりくらりかわせば。忙しさマックスのいつもの表情してれば誰も梨乃に話し掛けたりしないって」

と慰められているのか、けなされているのか解らない言葉を掛けてくれたり。

「うん、頑張ってみる」

気合を入れてそう言った矢先、エレベーターホールで後ろから声が。

「オッス、お前結婚するんだってな、まさかお前を貰ってくれる奇特な奴がいたとは」

満面の笑みを浮かべる同期の吉川がいた。

おいおい、何処まで噂が広がってるんだよ。

入れたはずの気合が急にしぼんでいく。

大丈夫じゃないじゃんね。

真美の言葉が頭の片隅からぼんやり出てきた。

『私やつぱりお見合いしなくちゃか?』

心の中で呟いたはずの言葉に返事があった。

「だから、ちゃんと向き合ってみたらって言ってるのに。どう転ぶか解らないでしょ？ それよりいつその事高田と付き合ってみるのもいいかもよ」

耳元から悪魔のような真美の囁きが。

「考える余地も無いですから」

勿論それは、高田の事であって。

勇気を振り絞って思いきって出掛けて自分から終わりにしようと言ったアイツになんて言って向き合っただか。

どっちも出来ないって。

どちらにしても、勘弁だな。

背の高い吉川に頭の上から覗きこまれるように、質問が飛んでくる。

「ノーコメント」

振り返りもせずに返事をしたけど

「おっ仙崎でも照れるんだ」

と妄想力豊かな吉川の呟き。

その声が中途半端に大きくて、見知った顔がちらほらいるその場所でそれを言うか。

好奇心な目で晒されているようで堪らなく恥ずかしかった。

ミステリアス？

「先輩、婚約指輪見せて下さいよ。大きなダイヤなんですって？」

鬼の形相を装ってパソコンと睨めっこしながら午前中をやり過ごしたというのに、この女には通用しなかったらしい。

派遣仲間を連れだって私の後ろに回り込む空気の読めない女。

ん？ 違う、わざと私が嫌がる事をしているのか？

振りかえらずとも解る、きつと満面の笑みを浮かべて私の元から婚約指輪が飛び出すのを待っているに違いない。

それに、なんなの、その大きなダイヤって。

噂に尾ひれがついているのだから、片瀬の嫌がらせか。

きつと後者だろう。

女の嫉妬って恐ろしい。

私はパソコンに向かって雅也に教えて貰ったあの呪文を唱えると、椅子をくるりと回してほほ笑んだ。

「大きいダイヤって誰が言ったの？ 普通の指輪だよ。でも指輪しなれなくてごらんのとおりよ」

左手を片瀬達の前に掲げると、用は終わったとばかりにくるりとパソコンに向き直した。

「そんな事言って、本当は貰ってないんじゃないですか？ 婚約だって嘘だったり」

片瀬は私の耳元に小声で囁いた。そうパソコンに映った片瀬の顔は悪魔の笑みだ。

貰って無い事はないけれど、婚約の下りはあながち間違っていない。ちよつと動揺しそうになるも、こんな女相手に怯む私じゃない。

「ご想像に任せるわ」
いつのまにか、周りにいた人は私と片瀬に注目していたようで、話し声やキーボードが鳴り響いているはずのフロア―一角はやけに静かだ。

「ミステリアス」
と隣の席の原田の呟きが聞こえてきた。

片瀬はというとフンと鼻をならし、取り巻きのようにひつついていた仲間とだんまりをきめる。
きつと私もまだまだなんだよな。
ここで片瀬を納得させるような言葉を並べなくちゃいけなかったのかも。

そんな連れない事を言ってしまったては、また突っかかってくるに違いないのに。

この空間で唯一その存在を知っているのは江川なんだけど、また江川が出てきたらもっと厄介になる事間違いないし。

大きなダイヤなんてついてないけど、指輪するべきだったのだろうか……

いやいやそれは違う。
人の噂もなんとやら、私は静かにやり過ごすのが一番なんだと自分に言い聞かせた。

——嫌ね、プライドの高いおばさんって。私はああはなりたくないわ——

凄く小さな声だったけど、去りゆく片瀬から聞こえた呟き。
あのやろっ、覚えときよ。

私のプライドなんて、もうボロボロだって。
まっ片瀬なんかそんなところ見せるなんて事しないけど。

すっかり片瀬の姿が消え去ってから、原田が声を掛けてきた。

「何、仙崎最近やけに片瀬に絡まれてない？ お前何やったんだよ」
この前の残業騒動で片瀬の実態をみた原田は面白可笑しそうに突っ込んでくる。

「うーん、きっとプライドの高いおばさんが許せないんじゃないかな？」

とおどけて見せた。

「プライドって何だよな。まあ、片瀬からしてみたら仙崎みたいなタイプには逆立ちしても勝てなそうだからな、あつ顔とかじゃなくて、人間というか女としてね。気配りは出来るし、仕事は出来るし、良い奴だと思うよ、仙崎って」
ニツと笑って自分のパソコンに向き直す原田。

「もしかして、私口説かれてる？」
そんな私の言葉に間髪入れずに返事がきた。

「滅相もないです。恐れ多くて」
冗談に冗談で返してくれる、原田とはいつもこんな感じで心地よい。

「あら残念」
ついいつもの調子で言ってしまうと。

「おいおい、婚約者に殺されるって」
と真顔で返ってきた。

「大丈夫だよ」

と笑ってみせた。

余裕だね、なんて言う原田。

本当に大丈夫なんだよ、婚約なんかしてないんだからと心の中で続きを呟きながら笑ってみせた。

正直結構しんどい。

そんな時だった。

もう鳴る事のないと思った着信が流れたのは。

机の上に置いた携帯の小窓からは、消すことの出来なかった

「俺」

の文字。

取っ払う勢いで携帯を掴むと足早に廊下へと向かう。

フロアーを出たところで携帯を開いて耳に宛てながら、行く先を求めて足を進める。

「もしもし、悪いな。もう連絡しないって言ったのに」

忘れようと願う思いと裏腹に、その声は私の記憶に沁みついている。声が聞こえた瞬間からトクリトクリと鼓動を速める。

「何？」

短い言葉を返したのは心の動揺を悟られまいとする為。

話しながらも私は誰もいない空間を求めて、小走りになる。

「今大丈夫か？」

そんな気遣いされると本当に調子が狂っちゃう。

「うん、ちよつと待って」

返事をしながら、視界に入った外階段への扉。

すれ違う人に軽くお辞儀をしながら、私はその場所に一秒でも早く辿り着きたくて携帯を耳に宛てながら最近は来ることのなくなった

その扉に向かってヒールを鳴らす。

「もしもし、どうしたの？」

多少息を切らせながら、辿り着いたばかりの外階段の手すりに凭れかかって空を見上げた。

綺麗な青空だった。

「サトシと一緒にだったんだって？」

思いがけず出てきた男の名前に一瞬頭が混乱した。

サトシって言ったら机を並べる原田しか咄嗟に思い浮かばなくて、小首を傾げる。

でもそれは数秒の事。

直ぐに思い浮かんだあの軽薄そうな顔。

「誰かと思えば、アンタの馬鹿従兄弟ね。あれは一緒にたつていうか、私が会社の友達と飲んでたら後から居合わせたのよ、なんなのあの男。強引すぎるでしょ。連れの女の子返して私の隣に座るなんて考えられない」

たかが数時間前の事を思いだして、ちょっとムカつとしたせいか、少し薄れた緊張と動揺。

「いや、だからってどうって事はないんだけど……」

珍しく弱腰とみた。

「だったら、どうでもいいじゃない」

私ってば、こんなケンカ越し。

ほんと馬鹿、多少は薄くなったとはいえ動揺を悟られまいと、こうしなくちゃいられないのよね。

真美やつぱり向き合うなんて無理かも。

空を見上げたって真美がいるはずもないのに、思わず上を向いてしまった。

素直じゃないのは昔からの性格よ。

誰に言わずと頭の中で浮かんだ言い訳。

視線の先には羊のような雲がぼつかりと浮かんでいた。

「あいつ——何か言ってた？」

あーもう、本当にらしくない。

何をそんなに気にするっていうの。

思い出したくもないけど、ちょっと思い出してみる。

なんて私ってお人よしなんだろう。

そういえば、ケンカした？　って聞かれたんだっけ。

後は看護師から人気あるとか、誰かに盗られちゃうよ、とか？

なんかそれって、私が言うのもおかしい気がする。

まるで、早く仲直りしろみたいな感じで。

何だか癪だから、言ってやらない事にした。

「別に、アンタの事なんて特に言っていなかったけど。っていうか私より友達と話してたよ」

「何も聞いてないんだったらいいんだ」

おっ何か私に知られたくない事でもあるのか？

聞いてないと言って急にいつもの声のトーン。

「何、わざわざそんな事で、電話してきたの？」

自分で言いながら、なんて天の邪鬼なんだろうって思った。

でも罵りあっても何でも、もう少し声を聞いていたいって思う私があった。

「いや、言いだし難いんだが」

一旦そこで言葉を置いたヤツ。

頭の中でいらぬ妄想がめぐり始める。

もしかして、もう少し婚約していると偽って欲しいとか？

約束の日付まで、あと数日。

心の中で、変な期待が沸いてきてしまう。

すっきりきっぱりあの日で諦めようと決意したはずなのに。

はずなのに、何処かで嘘でもいいから、言葉を交わさなくてもいいから繋がっていたいと思う私がいるんだと今、確信してしまった。

でも、次に届いた言葉は無残にもそれを打ち砕く。

「まだ指輪を持っていたら返して欲しいんだ」

持っていたくない。

封印といいロッカーに押し込めたあの小箱。

頭では、全部すっぱり消去しなくては思っていたはずなのに。

どうやら、私は重傷だったらしい。

ミステリアス？（後書き）

沢山の拍手ありがとうございます！ ハルカさんどうもありがとうございます！
うございます♪ 飛び上がりたくなるほど嬉しいです！ くみちゃん
さん嬉しいお言葉ありがとうございます^^ あや子さん私もそんな
事を言ってくれるあやさんが大好きです♪
とーっても励みになります！ どうもありがとうございます！

いじっぱりなのは昔から

何でこうなるの。

携帯を畳んで、前のめりに凭れ掛け直した外階段の鉄の手すり。
今の私の顔とんでもなく歪んでるんだろうな。

戻らなくてはいけないのに、戻りたくない。

スキルと同時に身についたはずの仕事上のポーカrfフェイスも今の私じゃどうにもならないだろう。

あの時と同じ？ それともそれ以上？

江川の場合は金曜の夜だったから幾分の猶予があった。
だけど、今回は……

ため息は、尽きる事は無さそうだ。

呼び出されるまで、ここでサボるか。

頭の中を空っぽにしようと、遠くに視線を馳せた。

ここに来たのは久しぶりで、それを実感させるだけの風景がそこにあった。

見慣れていたはずの小学校も今は大きなマンションに遮られて校庭が僅かに見えるだけ。

ビルの間隙にまるでそこだけ置いて行かれたかのような古いアパートも今は近代的なアパートへと様変わり。

最後にきたのは、確か江川の結婚報告をフロアーで聞いた日だったかも。

時は流れているんだよな。

江川と再び言葉を交わすようになって数カ月。

うん、時が経てば大丈夫。

自分に言い聞かせるように何度も何度もそう呟いた。

どうしてか涙は出てこなかった。

指輪を返せと言ったあいつは、私に病院まで持ってこいと言いつつた。

理不尽すぎるその言い草に

「なんで私があんたのどこに行かなくちゃいけないのよ。取りに来るもんじゃないの普通」

そう息まいて反論したはずなのに……

「俺に会いにきたくないのは、まさか本気で惚れたとか言わないよな」

いつぞやのように鼻で笑われて。

争点がずれているにも関わらず、私はムキになって鼻息荒く

「そんな事有る訳ないでしょ」

と語尾を強めたのだけど。

「ふーん」

なんて、人を馬鹿にしたような言い方するもんだから。

「解ったわよ、これっぽっちもあんたのことなんて好きじゃないつてとこ見せてあげる。明日の仕事帰りにあんたの病院に持って行けばいいんですよ」

なんて言って電話を切ってしまった。

何で指輪を返して欲しいのか。

電話を切った後で、郵送でも良かったんじゃないと。

いろいろな反論や選択肢があつたはずなのに、あいつは最小限の言葉で私をその考え通りに事を勧めたのじゃないだろうか、と。

でも……あの日。

会うのはこれが最後だと別れたはずの私なのに、馬鹿だと言われるかもしれないけれど、またもう一度アイツに会えると思う気持ちも確かにここにあるのだ。

正直言葉を交わすのは、きついと思う。

何で指輪を返さなくてはいけないのか。

その理由なんて本当は知りたくないんだ。

きつと急を要する何かがあつたのかもしれない。

その意味する事は？

冗談混じりで言われた言葉が胸を刺す。

もしかして、私の心を悟られた？

想いを残されたくないとはかりに、アイツとの繋がりでもあつた指輪を返して欲しいと思つたのか？

その真意は定かじゃないけれど、私にとって良くない方向には違いないだろう。

恋にこんなに臆病になつたのは年を重ねたせいなのだろうか……

平気だと思いはじめてきた過去の恋のトラウマからなのか？

地表から突き上げるように吹いたビル風に髪がさらわれ、舞い上がった。

唇の端についた数本の髪の毛を手で振り払うと、手元の携帯が視線に入り、ここから投げ捨てたくなる衝動に駆られた。

勿論そんな事は出来るはずもないのだけど。

やっぱりそろそろ戻らないとか……

もう下っ端なんかじゃない。

任された仕事だつて残っている。

取り敢えず今は仕事に集中しないと。

そうしていないと、きつと駄目だ。
幸い涙も出てこなかった。

目はウサギになっていないと思う。

何か言い訳を考えなくちゃかな。

30分もいなかっただろうけれど、行く先も告げずにフロアを出てきたんだ、何か聞かれないとも限らない。

上手い逃げ口上も見つからなかったが、取り敢えず大きく深呼吸という名のため息についてドアノブを掴んだ。

来た時は必至だったから気がつかなかったけど、重厚な鉄の扉は開くとギシッと結構な音が鳴って。

たまたまだろう通り掛った江川の背中がスローモーションのように振り返ってくるのを、どうする事もなく固まったままの私。

「何やってんだ、こんなところで。さては誰かさんとケンカしたんだろ？ お前がそこにいるなんてよっぽどだろうからな。それにしても最近も来てたんだな、ここ」

固まり続けた私の方へ一步一步進んでくる江川。

私の顔を覗きこむように目を細めると

「なんだ、泣いてじゃん。つまんねえ」

なんて。

「何で私が泣かなくちゃいけないのよ。ちょっと煮詰まったから外の風に当りに行っただけですから」

ああ、また素直になれない。

そう簡単に、人間変わるもんじゃない。

いじっぱりなのは昔から。

きつと江川は解ってる、解り過ぎるくらいに。

ここは私の避難場所。
でも、こんな事で江川に救いを求めるなんて、それこそごめんだけ
どね。

「何だよ、だったらサボってるんじゃないって説教すれば良かった」
人間性は兎も角としてこんな嫌味ですら、こいつの声は嫌じゃない
なんて私はなんなのだろう。

フロアーに戻る前にワンクッション、江川とのこんな遣り取りのお
陰で、少しだけ曇った顔が晴れたような気がしないでもない。

「勘弁してよ、説教なんて。こんなに働かされて、息抜きも出来な
いような会社なら、訴えてやるから」

捨て台詞のように言い放つと、私は歩みを速めて江川の一步先を歩
き始めた。

フロアーに戻ると、待ってましたかのように片瀬と視線がぶつかつ
た。

ほんとにもう、なんなのこの子は。

気味の悪いうすら笑み。

今度は何を言われるのかと身構えたのだったけれど、予想外な事に
片瀬の標的は江川だった。

ひょこつと近寄ってきた片瀬は、私のすぐ後ろにいた江川に向かって

「そんなに仙崎さんが気になるんですか？」
と、上目づかい。

きつと一緒にタイミングで戻った私達を疑っているのだろう。

「ちょっと片瀬さんっ」

思わず出た私の言葉を制するかのように江川と目が合った。

「そりや気になるよ、可愛い後輩だからね」

なんて、火に油を注ぐような発言。

片瀬は思ってもみない言葉だったようで

「よくもそんな事言えますね、奥さんが可哀想」

と蚊の鳴くような小さな呟き。

まさか片瀬から奥さんを心配するような発言が出るなんて、驚きだ。

「あれ、言ってなかったっけ？　うちの奥さん可哀想どころか幸せいっぱいだよ。やっと子どもが授かってね。今はつわりが酷くて実家に戻っているけれど、夫婦仲は片瀬に心配されるようなことないから大丈夫だよ」

そう言うところと片瀬の頭に手を置き何事もなかったかのように席に戻る江川。

江川の声は大きくはなかったけれど、周囲に居た人には聞こえたようにうで

「おめでとうございます」
と声が掛っていた。

その声を聞きながら、唇を噛みしめる女が一人。

あらら、手に入らないと悟ったか？

江川を見る目は尋常じゃないって。

もしかして、憎しみにシフトしたとか？

片瀬を横目に席に着くと、原田が椅子を寄せてきた。

「愛しの婚約者さんは何だった？」

一瞬だけ忘れていたけれど、原田の言葉で蘇ってきた苦い電話。

「内緒」

そういう私は笑えていただろうか。

椅子のキャスターを転がしながら

「ミステリアスだな」

と言う原田。

全くだよ。

私にも何が何だかミステリアスだらけだよ。

いじっぱりなのは昔から（後書き）

くみちゃんさん 拍手コメントありがとうございます♪ 私の方が嬉しいですよ^^ ドドスコって思わず笑ってしまいました^^ これからも宜しくです！

楽しみとコメントくれた方ありがとうございます！ 励みになります！

沢山拍手を頂けてとっても嬉しかったです。

決まりですから。

あいつが勤めているのは、都内にいたら誰でも知っている大学病院。健康が取り柄の私は勿論来た事ないし、幸いお見舞いにも来たことがないけれど。

大学病院というだけあって、バス停を降りて病院は目の前だというのに、さっきからもう二台も救急車に追い越された。

サイレンが鳴りやむのを聞きながら、全く関係ない人だと解っているけれど、重篤な患者さんじゃありませんようにと願わずにはいられない。

小さな紙袋を胸に抱え、止まりかけた足をゆっくりと進めた。立ちはだかるようにそびえ立つその白壁。

私にとつたら、ここは悪魔の住む城？ それとも王子様の待つ……

あー私つてはこの後に及んでなんて妄想を。

正直テンパリ過ぎてイカレてんだと思う。

——いい梨乃、ここにはあいつの言われた通り指輪を返しにきただけよ。顔なんか見ないで受け付けの人にでもこれを渡してとっとと退散すればいいの——

自分に言い聞かせながら、正面入り口の脇ある夜間入り口の灯りの元に。

午後10時を回ったこの時刻、患者さんのいない病院は静寂を保つて。

ただ、患者さんを運び終わったばかりのサイレンの止んだ救急車の赤いランプが怪しいまでに光ってみえた。

夜間窓口には、がたいのいい警備員さんが一人、真っ正面を向いていて自動ドアが開いた瞬間からばつちりと目が合った。

軽くお辞儀をすると立ち上がった警備員さんが小窓を開けて

「すみませんが、もう面会時間は過ぎておりまして」と時計に目をやる。

「あの、面会というか、わたしくし仙崎と申します。こちらにいらっしゃる小川先生にこれを――」

そう言つて紙袋を差し出そうとした私に。

「伺つてます、仙崎さんですね。こちらを付けてあちらのエレベーターで4階に行つてみて下さい」

関係者と書かれたネームホルダーを渡されてしまった。

「いえ……あの、これを渡して頂きければ私はそれで結構ですので一度流れで受け取つてしまったホルダーを紙袋と一緒に差し出すと

「大変申し訳ありません。決まりで先生への預かりものはしてはいけないものになっておりますので」

がたいのいい警備員の柔らかな笑顔は私になんの反論もさせてはくれないとばかりに、それだけ言い終わるとさっきのように椅子に座つてしまう。

「でも、あのー」

こんなところで勇氣も何もないけれど、もう一度紙袋を掲げてみたけれど、警備員さんにはっこり笑つてエレベーターがある方に向けた右手で促されてしまった。

仕方なしに、会釈をするとそのエレベーターに向つことに。

大きなため息が出たのは極自然な流れだろう。

こうなつたら、その4階のナースステーションで、もう一度トライ

だ。

そう思った途端に、高田の言葉が蘇ってきて軽い身震い。

敵か？ 敵がいるのか？

すぐに開いたエレベーターに乗り込むと

——どうかナースステーションにいる看護師さんが最低限の人数で
ありますよ——

と呟いていた私。

そんな願いも虚しく、4階のランプが点滅したと同時に開いたドア
の先のガラス張りになったナースステーションはとも見通しが良
くて。

この看護師さんの人数で入院患者さんの多さが解るような気がする。
夜勤御疲れ様です。

どうか友好的なみなさんでありますように、と出来る限りの笑みを
張り付けて、恐らく響くだろうヒールの踵を細心の注意を払って一
歩踏み出した。

正面のナースステーションばかりを気にしていた私を突然襲った鈍
い光。

真横の廊下から現れた看護師さんに懐中電灯で照らされたという事
に気がつくまで数秒。

薄暗い廊下から近づく灯りの先に、真美を彷彿させるような鋭い眼
差しを持った看護師さん。

おっと危ない笑顔、笑顔。

ナースステーションからばっちり注目を浴びているのを感じながら
も、その看護師さんに身体を向き直した私だけど緊張しているせい
なのか何故か直立不動。

ナースシューズのつま先が私の足先でピタッと止まると、先程警備

員さんに言った言葉を繰り返した。
まるで、値踏みされるように頭的先からつま先まで視線を動かした
その看護師さん。

「お待ち下さい」

と上がりも下がりもしない一本調子の声を私に掛けると、私にも掛
けた声よりも数段冷ややかな声で

「誰か小川先生から聞いてる？ 関係者の仙崎さんだつて」
と。

一瞬の間があつた後、やや後方にいた若い看護師さんが小さく手を
あげて

「あの——さつき、小川先生が下に呼ばれた時言われました。お名
前までは伺いませんでした。何でも婚約者さんがいらつしやると
の事で……奥の部屋でお待ち頂くようにと」

小さな声だつたけど、少し離れた私のところまで聞こえたのだから、
皆さんにも十分伝わつたようで——。

視線が差すようで目眩がしそうだった。

そりゃ確かにもう二度と会わない人達かもしれないけれど、約束の
日まであとちょっとあるけれど、何だつていうのよ。

この場の空気一気に重たくなつたみたい。

「いえ、あの。こちらを渡して頂ければ結構です」

震えませんようにと出した声は、冷えた廊下に良く響いた。

よっぽど教育が行き届いているのだらう。

「いえ、そういった事は出来ない規則になっていきますので」
につこり張り付けた笑顔だけど、目は笑ってないよね。

お金じゃないよ、お礼じゃないよ。

貴金屬だから幾分にはなるだろうけど。

患者さんからの心付けじゃないって解っているだろうに。

婚約者って言ったんでしょ？ 何だか癪だけど。

だったら……

こういうのは教育っていうのじゃないよね。

頭が固いつていうのよ。

脳内でいろんな文字が躍ってる私に。

「こちらでお待ち下さい」

そう促されたのは待合室。

パチンという音と共に明るくなった広い部屋。

会いたいという気持ちと会いたくないという気持ち。

椅子に腰かけてしまった時点で複雑な思いのまま待つ事決定。

膝の上に置いた小さな紙袋の存在が少し辛い。

何となく視線も感じて、顔をあげる事も出来ず冷えた部屋で一人、
これを渡したら即行帰るのだからと言いつ聞かせる私がいた。

決まりですから。（後書き）

山吹さん コメントありがとうございます^^ 梨乃を応援してくれてどうもありがとうございます！ 続き頑張りますね！

みなさんからの沢山の拍手ありがとうございます！

とても嬉しかったです^^

それなのにあまり進んでいなくてすみません！

次早めに更新出来るよう頑張ります！

追記・山吹さん脱字教えてくれてありがとうございます！

教えて貰って良かったです。

拍手での感想ありがとうございます。

後程、活動報告にて拍手のお返事書かせて頂きたいと思います。

活動報告は作者名をクリックすると作者ページに飛びますので、そ

ちらから活動報告のページに行く事が出来ます。

宜しかったら覗いてみて下さい^^

必要とする人？

いつまで待たせれば気が済むのよ。

待てども待てども、待ち人來たらず。

隣のナースステーションから響くコール音の度に身体がビクツとなる私。

それに、時折唸る自動販売機の音がどうにも嫌で。

こんな音気にした事なんかなかったけど、ちよつと怖いって思ってしまった。

壁に掛けられた時計の音も良く響く事。

下に行ったらしいけど、きつとさっきの救急車の患者さんなのかな。小児科担当だから運ばれてきたのは子どもだろうか？

こんな遅くに救急車で運ばれてくる子がいるのだと思うと切なくなってくる。

思いを遠くに馳せていると、何となく聞こえていたナースシューズの足音が止んだ気がした。

開きっぱなしのドアの向こうに懐中電灯を持った若い看護師さんの姿が見え、軽くお辞儀をした。

こっちに來てくれるなと念を送ってみたものの、その願いは届かなかったようで、一歩一歩私に向かって歩き出した看護師さん。

解るよ、何か言いたそうな顔してるよね。

でも、何も言ってくれるなよ、ともう一度念を送ってみるも……

「こんばんは」

「こんばんは」

長く温めた椅子から立ち上がり、紙袋の持ち手をギュッと握った。社交辞令の挨拶の後、二人の間に流れる微妙な空気。

「あの――」

遠慮がちに出された声に、「はい？」と小さく小首を傾げてしまった私。

やめろって言われていたあれを無意識でやってしまった。

「小川先生を必要とする人がいらつしやるのです」

俯きながら発せられたその言葉の意味を理解しがたい。

それは色恋沙汰の話なのだろうか。

その言葉に私は何と返したらいいのだろうか。

ぐるりと頭の中を回転させても、どう答えたらいいのか解らなかった。

ただ、啞然と看護師さんのネームプレートを見つめてしまった。

広田さんというらしい。

「必要とする人？」

取り敢えずどう答えれば解らないので、オウム返しをしてみると。

「はい、先生がいなくなったら困るんです」

広田さんの言葉に私の頭の中はクエスチョンマークが点滅する。

いなくなる？

私の方が聞きたいよ。

冷静になれ、梨乃。

取り敢えず頭の中を整理だ。

アイツを必要とする人がいる。

アイツがいなくなる。

要点はその2点よね。

それが私と何の関係が？

アイツの職場であるここで私は何と返せば正解なのだろう。

「いなくなるって、小川から直接聞いたの？」

思ったより冷静な声が出て安堵した。

「真下先生とお話しているのが聞こえてしまいました。さ来月にはここを辞めると。先生を頼りにしている患者さんいっぱいいるのに」

初めて聞く話だった。

驚きのなにものでも無かったけど、きつと驚いた顔をしちやいけな
いだろうと身構えていたからそれなりのポーカーフフェイスは出来て
いたのじゃないだろうか。

だけど、私はふいに口にしていた。

「患者さん——なのね」
と。

でも私の言葉に顔を赤くした広田さんも例外じゃないのかもしれない。
い。

少しだけ冷静でいられる自分にびっくりした。

「ごめんなさいね。でも小川が決めた事だから。私からは何も言え
ないの」

なんか尤もらしい言葉。

自分で言っててそら恐ろしい。

というか、何で私があいつに気を使わなくちゃいけないのかしら。
自分の性分に呆れそうだ。

「す、すみません私、つい……」

慌ててお辞儀をする彼女を見ながら、片瀬もこんな可愛かったらな、
と思っってしまった。

そんな事を思い顔が緩んだ時だった。

「悪い、待たせたな」

意地の悪そうな顔でドアの前に立つアイツがいた。

アイツの声で振り返った広田さんに

「ありがとう、相手してくれて」

なんて。

なんなのよ、その胡散臭そうな笑顔は。

無口で無愛想って高田が言ってたけど、それって誤報じゃない？

広田さんは「いえ、そんな——」と言うとパタパタとナースシューズを鳴らして目の前の先生の横を通り過ぎていった。

白衣姿を見るのは二度目だった。

初めてみたのは、雅也の熱が出たあの時。

軽くトリップした私の遠い視線の先、ゆっくりとドアが閉められていくのをまるで異空間のように感じた。

段々と近づいてくる足先。

そう計画してた通り、これを突き返して私は帰るんだ。

ぎゅっと握ったままの紙袋の持ち手を突き出した。

「持ってきたわよ——」

突き出した紙袋をあっさり受け取られ解っていたけど、胸がちくりと痛む。

うんともすんとも言わないコイツ。

私は

「じゃあ」

と足を踏み出すと。

「折角ここまで来たんだから、これ飲んでけよ」

そういつて、白衣のポケットから取り出した、カフェオレをテーブルの上に置いた。

そんなのいらない。

そう言いたいの、アイツは私の気も知らないで、優雅に自分の分の缶コーヒーマをもう片方のポケットから取り出し、椅子を引いて座ってしまった。

カシャッとプルタブを引きあげる音が待合室に響く。

「まだ温かいぞ」

なんて。

私には選択肢があつたはず。

『いらない』とか『折角だから持つて帰る。』とか。

何で椅子に腰を下ろしてしまったのか。

自分が何をしたいのか、混乱している。

そんな私を尻目に、ちよつとだけ口角をあげるその顔が――。

男は顔でも声でも無いのよ。

精一杯の反論を心の中とする私。

半ば自覚してしまった自分の思いに、抵抗するのは困難で。

冷えた指先はこの広い空間で待たされたせいよ、とばかりにテーブル

ルに置かれたカフェオレを両手で包んでため息と言う名の深呼吸。

冷静になれ。

頑張れ私。

「変な奴」

ボソッと呟かれた言葉にコイツの顔を見据えると。

「アンタに言われたくない」
って。

言葉を吐きだした途端に肩の力がずっと抜けた気がした。

微妙な間

「呼び出されたのは、さっきの救急車の人？」

聞いちゃいけない事だつて解っているけど、無言でいるのも気が気じゃなくて思わず口にしてしまった。

言つた途端にきつと

『言つと思うのか？』

なんて、聞いた私が思うのも何だけど冷めた言葉が返つてくると予想していたのに。

「ああ、俺の患者だ。小児喘息の発作だったけど、早急に対処出来たから直ぐに落ち着いてもう大丈夫」

そう言つた目の前のこいつは、今まで見たことがない優しい顔に。さつきとは違う、胸の痛み。

キyunと心臓が縮まるような、そうまるで、高校生にでもなつたかのようなそんな感覚。

駄目、止まって。

照れなのだろうか、俯いてサンダル先の見つめるコイツに今の私の顔を見られたくない。

誤魔化すように急いで引きあげたプルトップ。

開いたと同時に口にした。

何でよ、こんな些細なことで口が渴くつてどうなのよ。

ここがこやつの特リトリーだからなのだろうか、何の話もししていないのに追い詰められていくような気がするの。

「落ち着いて良かった」

これは本音。

従姉妹の彩音が喘息持ちだったから、夜中の発作の苦しさは間近で見ていた。

それこそ、彩音が家に泊まりに来た時の発作で何度小川先生のお世話になった事か。

「だな」

自動販売機の唸る音なんてもう気にもならなかった。

今一番気になるのは自分の鼓動。

ドクドクと押し寄せるこの音が聞こえませんが、自分の鼓動を抑えるようにと開けたばかりのカフェオレを半分くらい飲んでしまった。

微妙な間が続く。

ドアを閉めたせいで、ナースシューズの足音もナースコールも聞こえない。

静かになった部屋の中、私の思考回路は複雑にこんがらがる。

呼びよせて、ここに留まらせた癖になんで何も言わないのか。

テーブルに置いたカフェオレを一睨みすると、さっき広田さんが言っていた言葉を聞いてみる事にした。

「病院辞めるの？」

自分で言いながら随分端折ったなあなんて。

私の言葉に顔を上げ、目を丸くしてる姿は結構レアな顔かも。

驚いた？ そんな感じ。

でも、ヤツもツワモノ、そんな顔一瞬で吹き飛ばして

「さとしから聞いたのか？」

なんて、いつものアレだよ。

鼻をフツて鳴らすみたいなの。
これはいつみてもむかつくんだよ。

「あのエロ馬鹿男からじゃないわ。何だか随分とオモテになるよう
で。『小川先生が必要な人がいるんです』だってさ」

口に出してから思った。

何だか私拗ねてるみたい？

なんか、あのむかつく『フツ』っての見たら思わず言っちゃったじ
やない。

案の定、コイツ笑ってるし……

「別に、私に関係ないけどね」

とってつけたような言葉を言ってみたけど、それは何の効力もない
ようで。

やっぱり私追い詰められてるみたい。

その余裕綽綽の顔はなんなのよ！

「前から考えてたんだ」

そう話し始めた時だった。

ドアをノックする音が聞こえて、コイツが立ち上がった。

白衣の裾を払うと歩き出し、ドアを開く時振り返って

「帰るなよ」

なんて。

どんだけ俺様だよ。

ちらりと見えたドアの向こうには、さっきの懐中電灯を持った看護
師さん。

視線が痛いのは気のせいじゃなかったみたい。

医師が医師なら看護師も看護師だわ。

あのむかつくフツっていうのこの病院で流行っているんだろうか。

まあ、私は大人の女ですから、優雅にほほ笑んでみたつもりだったけど。

もしかしたら、引きつってたかもしれないけどね。

パタンとドアが閉じたら、また聞こえてきた自動販売機の唸り。

今度はドアを閉じられたから、余計に音が響くのですが……

帰るなよ、って言われたけれど帰ってやろうか思った。

でも、テーブルに置きっぱなしの指輪をみるとそれも出来ないような。

もう二度と会わないだろうし、関わりも無いのだから、これを看護師さんに見られたところで関係無いって言えば関係ないのだけど。

私の性分なのだろうね。

ほっとけないのは。

むかつくだよ、むかつくの。

でも——困ったことにそんなにも嫌じゃないんだよ。

矛盾してるのか、そうでないのか。

好きだから気になるのか？

あーまた考えたくもない妄想をしてしまったじゃない。

どうせならとテーブルに頬杖をついて、自分の馬鹿さを考えてしまった。

草食系の彼と穏やかな恋愛を望んでいたつもりだったけど、私が望んでいるのは俺様という自分勝手男なのだろうか。

私が選ぶのは性格の悪い顔良し男なのだろうか？

例えば自分の事を好きじゃなくても？

だいたい何で私は好きになっただんだ？

顔？ 声？ 声っ？ ……頭の中にフラッシュバックするやつの口元。

思わず、右手が口元に。

軽く唇で人差し指を挟んでしまったのは、ヤツとのキスを思い出してしまったからで。

封印しようと思っても、それだけではどうしても出来なくて。

少なくともキスの経験。

過去の男達は碌でもないのばかりだったけど、それぞれみんなちゃんと恋愛してた時もあったんだ。

でも、あんなキスをする男なんて一人もいなかった――。

元より、付き合い始めはみんなそんな悪い奴じゃなかったような気がするんだよね。

っていう事はあれか？ 私が駄目な男にさせてしまったのだろうか？

今まで、正体を見破れなかったって思いこんできたけどもしかして、私のせいだったりする？

軽く目眩がしてきた。

そう思った時だった。

ノックもせずに開いたドアの向こうにヤツがいたのは。

未だ私は指を咥えたまま。

戻ってきたコイツの一声は

「腹減ったのか？」

と笑いを堪えた声だった。

きつと、多分

慌てて指を引きぬいて

「寒かったのよ」

なんて。

お腹は確かに空いてるけれど。

「確かにな」

椅子に座らず立ったまま、ちらりと視線をやった天井の吹き出し口。面会時間をとおに過ぎたこの時間、誰もいなかった待合室に暖房を入れないのは当たり前前の事だろう。

何かをボソツと呟くと窓際にある暖房器具のスイッチを入れた指先。つけたばかりの暖房は冷風に似た風が音を立てて吹いてきて思わず身を縮めてしまった。

白衣の裾を翻し私の正面にゆっくり座ると飲みかけの缶コーヒーに口をつける。

その仕草を目で追ってしまふ。

そんな自分に気がついて、咄嗟にさっきの言葉の続きを促した。

「前からって？」

言葉が待ち遠しくて、カフェオレを手に取り小さく喉を鳴らした私。

「気になる？」

勿体ぶった言葉にちよつとだけイラつとムカついた。

「そりゃ気になるでしょ、言い掛けたのに途中で行っちゃうんだもん」

無意識に口を窄めていたみたいで、口元を手で覆って隠してみるの

もも既に時は遅し。

「『だもん』って。お前いくつだよ」

そこはスルーするところだっていうの。

危うく今度は頬を膨らませるところだった。

テーブルに置いた頼みのカフェオレはもう底をついてしまい。

「で？」

省略に省略を重ねた一音で、話しの続きを促せた。

フーッと息を吐くのはまるで

『仕方ねえな』とでも言ってるかのように更にムカつく。

「小川医院を手伝おうかと考えてる。おじさん、年だろ？ 本人は生涯現役にこだわってるみたいだけど、一人じゃ難しいんだよ。あの人柄だろ、休みだろうと夜間だろうと電話やチャイムが響けばどうしたって無理しちまう。おばさんから相談されてたのも一つの理由かもな。まあ、いろいろあるんだよ」

最後の言葉はきつと無意識だったのじゃないだろうか。

私の方としてはそのいろいろの方が興味あったりするのだけど、きつと反撃されるだろう事は容易の想像出来るだけに、聞かなかった事にしておこうとおじさんの事を思い浮かべた。

確かに。

腰が痛いつて言ってたもんな。

「お前さ、さとつ——エ口馬鹿男とやらと付き合っの？」

はっ？ 今なんて言った？

私が？ あのエ口馬鹿男と？

不意打ちを食らったというか面食らったというか。
私の顔は正直だったみたい。

「すげー馬鹿面」

笑いながら言い放った言葉に、私の怒りのボルテージはマックスに。
「何で私があんなのと付き合わなくちゃいけないのよ、マジム力つく」

思わず手に取ってしまった空っぽになったカフェオレの缶、その缶を握りつぶす勢いで手に力が入った。

「そんな事だろうと思った」

その声は呟きのような小さな声で。

「当たり前でしょ、だいたいね、あんた何だって言うのよ。こんなところで私呼び出して本当だったらあんたが私のところに取りに来るべきでしょ」

思わず勢いで言ってしまった。

「会社に？」

「それは嫌」

「じゃあ家に？」

「それも嫌」

何だか、また私押されてる？
っていうか完全にやつのペースみたいで凄く癢にさわるんですけど。

数秒の沈黙の後

「悪かった。でもここから出られないのは本当なんだ。もう3日家に帰ってない。放っておけない患者がいてっていうのもあるんだけど、雑用も多くてな。郵送でも思ってたんだけど」

また意味深なところで言葉を切るって何なのよ。

またもやプチッと頭の血管が切れそうになったのだけど、真直ぐに私に向けられた視線に違う血が上ってきたみたいだった。思わず息を止めてしまう。

言葉の続きを促す事も出来ずにただ固まる私。

「お前の顔がみたかったのかもしれない」

その言葉の意味は？

直ぐにでも問いかけたくなる衝動に駆られるけれど、それを抑えるのが必死だった。

きっと今の私の顔も馬鹿面だろう。

でも期待した言葉の続きを言う事なく、壁に掛けられた時計を見るとポケットに手をつ込んだ目の前の男。

「ファッショニングにでもって言ったのは俺だけど、もし仮にお前に男が出来たら名前入りの指輪なんてケンカの種になるだけだろうから」

そう言っておもむろにポケットから取り出した手。
そこには――

「アンクレット。これなら人目にもつかないし名前入ってないから

もしもの時にも大丈夫だろ？　これと交換だ」

テーブルに置きっぱなしだった紙袋を持ち上げて、変わりに置かれた細長いそれ。

本当に言葉が出なかった。

正確には息を呑みこんだまま吐けなかった。

「何だよ、いらねえって言うのか？　これでもちつとは考えたんだぞ」

ほら、またあの顔。

私、本当に重傷かも。

今なら言える？

ドクドクとあらゆるとこの脈が打ちまくってるみたい。
これじゃまるで女子高生みたい。

頑張れ私。

バレナイように細く息を吐きだした時だった。

入り口のドアを叩く音。

同時に開いたドアからはさっきの看護師の強張った顔。

「小川先生、みなみちゃんが発作です」

聞くや否や立ち上がり、紙袋をかつさらうように手に取ったのをまるでスローモーションをみるかのように見つめる私がいた。

「今度は直ぐに戻れなそうだ。来て貰って悪かったな」
そう言っつて小走りにドアに向かう姿はもう、さっきまでのアイツじゃない。

咄嗟に立ち上がり、声を出していた。

「後で電話するから」

私の声に振り向くと真顔で

「待つてる」

なんて言うから

「頑張つてね」

なんて声まで掛けてしまった。

確かにそれは本音だけだ。

「当たり前だろ」

って片手をあげて出ていく姿を見てしまつては、もう逃げられない
って思うのに十分な事で。

真美の言う通りだと思った。

ぶつかつてみなくちゃいけなかったんだ。

テーブルに置かれたアンクレットを鞆に入れて、お礼を言わなかつ
た事に気がついた。

後で、でいいよね。

独り言をつぶやきながら、あいつと私の空き缶をゴミ箱に捨てた。
空調のボタンをオフにして、一人で入った待合室を一人で出ていく。

ナースステーションの前でお辞儀をすると、残っていた看護師さん
からもお辞儀を返された。

来た時の私とはちよつとだけ違う。

これでもかつて言うほど背筋を伸ばして、ヒールを鳴らさないよう
に前を通り過ぎた。

エレベーターで一階まで下りると、さっきの守衛さんと目が合う。
守衛さんは

「用事は済んだかい？」

やっぱりイカツイ顔だったけど、さっきより優しい感じ。

「はい、でも半分だけ」

何だか自分で言っただけで半分って何だよって思ったけど、守衛さんは笑って

「お氣をつけて」

と言ってくれた。

「ありがとうございます」

首からぶら下げたホルダーを置いて、病院の外に出ると少しだけ冷たい風が頬を撫でた。

身を縮こませ見上げた夜空には明るすぎる月。

電話か……

当分病院から離れられないって言ってたけど。

もう迷わないって決めたから。

きっと、多分迷わないと——思う。

土曜の昼下がり

「ふーん、それでこれが例のなのね」

土曜の昼下がり、待ち合わせをしたオープンカフェ。

テーブルを挟んで座った真美は私の出したアンクレットを手にとってマジマジと見つめている。

あの日メールをした途端に鳴り響いた携帯電話。

心配してくれていたから、連絡でもとしたメールだったけど、真美の反応は私とちょっと違う方向へ。

長話も何だからと、今日待ち合わせをして会う事になって今に至るわけだけど。

「梨乃さ、告白するの待ってみたら？」

アンクレットを摘まみあげて太陽に翳す真美の微妙なほほ笑みが怖い。

「だって、当たってみろって言ったのは真美じゃない」

折角、決心したというのに真美っては何て事言うのだろう。

ただでさえ時間が経てば経つほど、意気込みが萎んでいきそうなのに。

「ごめんごめん、でもさあ」

真美は意味深な顔で言葉を止めてしまう。

今思ったんだけど、真美ってそういうところアイツに似てない？

私はエスパーじゃないっていうの。

ストローでアイスカフェオレの中の氷をクルクルとかき混ぜるのは、何か触ってないと落ち着かないから。

真美の言葉をじつと待つのは心臓に悪いんだ。

「これ、結構するんじゃない？ それに私には気持ちが籠ってるように見えるけど」

真美が差し出した手にさらりと揺れるアンクレット。

私も、そう思いたい。

そうだと思いたい。

私の掌に戻ってきたアンクレットを握りしめた。

「梨乃は顔に出るからな。駆け引きなんて出来たら苦労しないか」

確かに。

ポーカーフェイスが出来ると思っていたけれど、そうでない事は良く解った気がする。

しかし私ってそんなに解り易いのだろうか。

「駆け引きね……」

三十路を過ぎた私に素直な気持ちで男に飛び込むのは至難の業かもしれない。

余裕が無いのに余裕のある振り？

気持ちを自覚してしまっからは尚の事、あいつの仕草や言葉で赤くなったり青くなったり。

悔しいくらいに反応しちゃう私がいるのだから。

「仕事の時の時の梨乃ってカッコいいんだよ。テキパキと要領よくこなして上司の我儘で横暴な要求もそつなくこなして。なんで恋が絡むとそういう風にいかないんだろうね。まっ私も似たようなものだけ」

突拍子も無くそんな事言いだすものだから、びっくりした。

私が真美をカッコいいって思うのなら解るけど、真美が私をそういう風に見てくれたなんて。

ちよつとこそばゆい。

「仕事の時だけかい、私は」

照れ隠しでそう言ってみたものの。

「ほら、私に褒められたくらいで顔赤くしてどうするのよ」
なんて、茶化されてしまった。

アイツの前でポーカーフェイスなんて出来そうもないよ。
ため息ついたら幸せが逃げるって言うけれど、勝手に出ちゃうのだから仕方ない。

これは長い吐息だつて、ため息じゃないって言い訳しながら自分の歳を呪ってみたり。

毎年勝手に誕生日がきちやうから。

歳なんてとりたくないもんだ。

——振られたら奢ってね——

そう言おうかと思っただけど、止めておいた。

非常に虚しくなるだけだから。

でもこうやって真美と話していると気が紛れるのも確か。

一人で家になんかいたら、いろいろ考えちゃいそう。

それに母親からのプレッシャーも相当だから。

「で、決戦の日はいつにするの？」

真美の言葉に、アンクレットを握った手に力が入った。

「まだ、決めてないけどなるべく早い方がいいかなとも思っけど」

私の頭に過るのはあの時のアイツの顔。

「けど？」

アイスコーヒーストロローで吸い込みながら、私の顔を覗きこむ真美は何だか楽しげ。

「患者さんでさ、目を離せない子がいるみたいで。余計な事言ってる場合でもないのかもと思うのだよね」

みなみちゃんって言ってた、発作が出た子。

もしかしたらその子だけじゃないかもしれない。

あの看護師さんが言ってた

『必要としている人がいるんです』

そんな時に、私が呼び出していいものなのか。

また出向くっていうのも正直避けたい。

かと言って電話やメールでなんて言いたくなかったりするのだよね。

「梨乃らしい。こんな時くらい自分の事優先させればいいのって私は思うけど。出来ないのが梨乃なんだよね」

感心したのか、呆れてるのか大きく頷いた真美。

「私らしいのかな」

こんな大事な話だからこそ、アイツが余裕のある時と思う自分勝手な考えなのかもしれない。

そんないい人じゃないんだよ。

「私が男だったら、絶対梨乃を好きになるのに」
何気にさらっと真美が凄い事言った気がする。

「私だつて、真美を好きになると思うよ」

三十路を過ぎた女二人なんとも虚しい会話だった。

今日はやけにカップルが目に入る。

このカップルなんて言い方も時代を感じるのかも。

今はカレカノ？ 本当に歳は取りたくないもんだ。

目の前を手を繋いで仲睦まじそうに歩くのを羨ましそうに見えた私だけど、真美は痛烈な一言。

「きつとあの二人は微妙だね。女が男を見る目はハートマークなのに、男の方は他の女に視線がいつてる。あーや、他にいい女出来たらあつさり切り捨てそうだ」

とても私と同じ人を見ていたとは思えない。

「真美ってシビアだね」

ついて出た言葉に

「いや、これが現実よ」

間髪入れずに真美の険しい一言。

「駄目なんだよね、冷静になっちゃうっていうか、冷めてるっていうか。男が計算してるんじゃないかって引いちゃう自分がいる。理想が高いってのじゃないけど、考えちゃうんだよね」

若くないだけに、ね。

余計な事まで考えちゃうのは私も一緒。

「解る気がする」

言ってて虚しいもんだ。
解りたくないけど、現実だね。

「姉貴にさ、あんたはうーんと年上のバツついてる金持ち親父が合
ってるよ。って言われたけど正直それも有りなのかな、なんても考
えるんだよね。遠くないのかもって」

ふーっと吐き出した真美の吐息は諦めのようなそんな感じ。

でも真美の言葉とは裏腹に私の脳裏に浮かんだのは、真美の後ろを
くっついて回る年下の男だったり。

あしらってるように見えるけど、真美も楽しそうに見えるのは気の
せい？

「本田は？ 真美にアプローチ掛けてるのはあながち冗談ではない
ような気もするんだけど」

頭に浮かんだ事を口にしたただけなのだけど、真美の目が一瞬泳いだ
のを私は見逃さなかった。

「まさか、本田が本気で私をなんてそんな事あるわけないじゃん。
あれは一種のゲーム感覚なんじゃないの？ それに私、年下なんて
考えた事もないつつの」

プクツとむくれた頬は中々見れるもんじゃない。

可愛いところあるじゃん真美も、なんて思ったのは内緒にしておこう。

「確かに、真美に年下なんて想像出来なかったけど、今はそれ相応
の歳になったのだから、年下っていつても立派なもんじゃない」

調子にのってしまったものだから……

「梨乃！。そう言う事言っちゃうんだ」

なんて、冷やかな視線をビシバシと浴びてしまった訳でして。

「ほら、無くも無いかなあ、なんて」

とか直ぐに弱気になっちゃう私。

お酒入った時に言えば良かったと思って最後の祭り。

真美の話は何処へやら、根ほり葉ほりと病院での出来事を言わされてしまった。

よつばど触れられなくなかったのかも。

またもや、ちらりと頭に浮かんだ本田をこれでもかって睨んでやった。

意気地が無いんだそして勇氣も

「おっこれで7回目」

顔をあげると、腕を組んで私を見下ろす吉川がいた。

「7回目？」

何となく頭の端っこで聞こえた数字。

「そっ7回目」

そういつて私の真似だろうか、首を項垂れ長い吐息を吐く吉川。
無意識って恐ろしい。俗に言う幸せを逃がしてるってやつなのかも。

「それはそれはご丁寧に」

誤魔化すように、ポケットから飴を取りだして口に放り入れた。
何だってこんな甘ったるい飴を買ってしまったのか。
今の気分は酸っぱい系なのに。

「マリッジブルーですか？」

私達の会話を聞いていたのか、私の長い吐息が聞こえたからなのか
パソコンの裏側から普段無口な永山までそんな事を言いだす始末。

「マリッジブルーだったらいいんだけどね」

思わず口に出た呟き。

言った瞬間に口に手を当て、ギョツとしてしまった。

吉川が口に運んだコーヒーの手が一瞬止まったのが視線の端に見える。
てしまった。

自分で吐いた言葉に居た堪れなくて、慌ててパソコン画面を凝視する。

そんな私を気遣ってか

「何、仕事絡み？ 片瀬——はないか、あいつごときに梨乃様がやりこめられるはずもないか。何でも背負いこまないで、俺らに適当に仕事振れば喜んで手伝うからよ」
なんて。

深く突っ込まないでいてくれることが有難すぎる。
そして、自分の不甲斐なさが身に沁みた。

「さんきゅ」

そう言うのが精いっぱい。

キーボードを指で弾きながら考えるのは、アイツにいつ電話すればいいのかという事。

あれから4日経ったけど、掛ける事が出来なかった。

既に私の着信履歴からはアイツのナンバーは消えかけていて。

笑っちゃうけど、私の携帯履歴にずらりと並ぶのは姉貴の番号だったり。

掛けてくるのは姉貴じゃなくて、雅也のだけ。

無邪気に「好き」と言える雅也が羨ましい。

私だってそんな歳を通り越してきたのだけだね。

自分で危惧していた通り、日が経つにつれ伝えようと思う気持ちも消沈気味。

意気地が無いんだ、そして勇氣も。

何だかな。

「仙崎、檜山産業の資料どうだ？」

会議室から戻ってきた江川だ。

何だか楽しそうな声に聞こえるのは嫌味なのだろうか。

私は首だけ後ろに捻って

「午後一で課長に送信してあります」

とにつこり笑って見たものの、その顔は微妙だったようで

「何か疲れた顔してるな。そうだ、今夜あたり皆で飯でも食いいくか？」

江川の言葉に何で？　って疑問符が浮かぶけれど、周りの同僚は声を上げて浮かれ始める。

「やった、課長の驕りですよね」とか

「旨いところ行きたいな」

とか

「酒有りですよね」

とか。

「おいおい、俺を破産させる気かよ。全員分奢ったら俺、嫁さんにしばかれるから勘弁な」
なんて。

物に釣られるなんて、お前ら小学生かよ？　その後の仕事の捗る事。いつもこのくらい仕事すれば、残業時間減るんじゃないの？
きっとみんながそう思ったはず。

一概にもそうなのじゃないけど、クライアントからの電話が鳴らなかったのは奇跡に近い。

絶妙なバッドタイミングで現れる部長の姿が見えなかったのも幸運だった。

そして、内緒にしようと言った訳じゃないけれど、片瀬には誰にも

この事を告げなかった。

あの日から片瀬への振舞いがみな違ってきてる。

みんな大人だから表立ってはいつもとおりにしてるけど、ある一定以上の距離には近づかなくなったような感じ？

片瀬の江川への猫撫で声も極端に減ったというか反対に見る目がきつくなったのだ。

きつと次のターゲットに移ったのだろう。

子どもが出来たと喜ぶ江川に脈無しと諦めたのじゃないかというのが、皆の予想。

私に靡かないわけが無いとでも思っていたのだろう。

プライド高いのも考えもんだ。

けど、若さってその時しか無い武器なのは間違いない。あれはあれで有りなんだって思う自分もいる。

彼女が理想の相手を見つけられるとは思えないけどね。

「カンパニー」

一斉に響くグラスの音。

「俺は飯を食いにつて言つたはずなんだが」

そんな江川の呟きなんて、全く気にしない今日の面子。最早諦めの境地で

「明日も仕事なんだから、飲み過ぎるなよ」

の声には反応して、あちらこちらから色良い返事。

「解つてますつて」

そう言ったのは、乾杯して直ぐだというのに、もうジョッキの中身が底をついた吉川だった。

解つてないじゃん。そう思ったのは私だけじゃないはず。

この駅近くの居酒屋は私達の課の行きつけだ。

最近はみんなで来る事は無かったけど、吉川や永山達は良く来てる
と言ってたな。

程良くお酒が回ったところで、ついに来たよ恐れていた事態が。

「仙崎の結婚相手ってどんな奴なん？」

酔った吉川の声は思いの他大きくて、ざわついていたテーブルが一
瞬シーンとなった。

だから、来たくなかったんだよ。

こうなる事は解っていたのに

「私、女一人じゃ寂しいから行きましようよ」

なんて、テーブルの真ん中を占拠してる後輩のマドカに言われたも
んだから、来てしまった私。

マドカ一人だって十分寂しくなんてないだろうに。

毎度後悔するこのパターン。

まあ今日は、小煩いおっさん連中がいらないから私にお酌当番が回っ
ている訳じゃないんだけど。

それより、こっちの方が難題だったのだ。

「人間だよ、普通の」

普通じゃないかもだけど。

「だから、そんなの解ってますよ。犬と結婚する分けないじゃない
ですか」

マドカの痛烈なヒット。

一睨みしてみるものの、お酒の入ったマドカは最強だ。

「仙崎先輩の相手って、相当我慢強い人じゃないと務まりまらなさ
そうですね」

キャハハと笑うマドカに殺意を感じた。

空気を察しろよとばかりに、周りの奴らはマドカに視線を這わせるけど全くお構い無し。

「だから普通の人だって。ちょっと口数は少ないけど、優しい奴だと——って何で私喋ってんのよー」

怒りに釣られて喋ってるし。

前に座った江川の肩が上下に揺れてた。

あーもう、私って馬鹿。

「ふーん、無口なんだ」

吉川まで、笑いを堪えてるし。

マドカに至っては

「いいですね、愛って感じ。お幸せになって下さいね」
なんて、ニターっとしてる。

だから、私は結婚なんてしないんだって。
そう言いたいけど言えなくて。

「すいませーん。これ冷で」

通りがかった店員さんに一番高い日本酒を指さしてそう注文してしまった。

「うおっ、仙崎が照れてるなんてそうは見られないぞ」
という何処からともなく聞こえた声に

「照れてないから」

というのが精いっぱいだった。

翌日、あの後も調子に乗りまくって私を窮地に追い込んだマドカにお灸を据えようと吉川が詰め寄ったらしい。

——だって先輩あでも言わないと話してくれなそうだから——
なんてシレっと言われて。
あれはあれでマドカの計算だったと言われ開いた口が塞がらなかった。

目標3メートル先

正直ちよつと飲み過ぎた。

会社に来てまで、頭痛が続くなんていつ以来だろう。

副社長が好きだというだけで、セレクトされた人気の無い「梅ジュース」を自動販売機から取り上げる。

この「梅ジュース」の賞味期限はどの飲みものよりも古いはず。どうしてだか、飲み過ぎた次の日ってなんとなくこれを選んじゃうんだよね。

でもここでこれを買ったのはもう数年前のような気がする。

それほど久し振りに飲み過ぎたのだ。

最後にこれを買ったのはいつだなんて思い出すのも虚しくなるだけなので、それがいつだかは考えないように頭の中からシャットダウン。

思考変更と缶をみやると、昔と変わらないパッケージにちよつとホツとしたり。

喫煙室の椅子に寄りかかり、プルタブを引きあげるとチビリと口にした。

甘酸っぱい懐かしい味。

副社長の好みも解らなくはないのだけど、いつも飲みたいとは思えないのだよね。

今日は誰もいない喫煙室。

空気清浄機の音だけが響いたこの個室は私と真美との逢引の場所でもあるのだけど。

あいにく真美は外回りらしい。

何で煙草を吸わない私が煙草臭いこの部屋に来るか、自分でも良く解らないのだけど、知らぬ間についているだろうため息を誰にも聞かれたくないのかもしれない。

この階の喫煙室は、この会社で一番空いてる。

このフロアーに喫煙者が少ないっていうが定説なのだけど。

でも喫煙者が少ないんじゃないじゃなくて、隠してる子が多いってだけなのだよ。

あの子もあの子も煙草吸いでしょ？

このフロアーにいるだろう幾人かの女の子の顔を思い浮かべる。

会社の拘束時間中に一本も吸わないで我慢出来るんだったら、禁煙しちやえばいいのについていうのは真美の言葉。

真美には、無理な事よね。

今も昔も女の喫煙は煙たがられる。

営業が仕事だから、人一倍気にはしてるけど。その営業がいらいらだらけなんて難儀な事よ。

ふと気がつくとき指先から冷たい感触。

何となくポケットに手をつ突っ込んで携帯を握ってしまう癖がついてしまった。

掛ってくるはずもないのに。

自分から遠ざけた癖に馬鹿みたい。

待ってる

そう言ったあいつの顔は頭にこびれついている。

きっと電話したところで嫌味の一つは言うだらうけれど、普通に会話をするのだらう。

でも、私が言おうととしている事をあいつが聞いたなら何と言っのだらう。

私があいつに本気になったと解ったら？

気まづい事になるに違いない。

この後に及んでどうしてこうなるのか。
一度見送ってしまったチャンスはこうも自信を無くさせるのか。

気に掛けている患者さんがいるから、なんて私の口実にしかすぎないのだ。

多少どころかかなり強引なあいつだけど、筋を通そうとする性格。会えないかと聞いたらきつと短いながらも時間を作ってくれるのじゃないかと本当はそう思っている。

それでも進めないのは、この非常に微妙な関係でさえ途切れさせたくないという私の強かな願望なのだ。

ポケットから引きあげた携帯にはシルバーのチェーン。
指先でちょこんと突いて、揺らしてみる。

さらりさらりと揺れるそれはまるで私の心のよう。

外からみたらこれがアンクレットだなんて誰が思うだろう。

真美には馬鹿だね、なんて言われたけれどどうして足首にこれがつけられよう。

携帯とて同じ事かもしれないけれど、肌身につけているのとは違うから。

一度だけそつとつけたアンクレットの感触は、私の神経をそこに集中させてしまうかのようだった。

意識しすぎだと笑われるかもしれないけれど。

もう自分がいくつなのだろうという虚しさに襲われる。

何も知らなかった学生の頃とは違うというのに。

迷わないって思ったのは遠い日の事じゃないのに。

一日一日過ぎていくとその決意は徐々に減っていき……

あの時真美が言ったように、告白するのを止めたわけじゃないのだ。

駆け引きなんて、出来たらとづくにしてる。
今はただ意気地がないだけ。

身体の中から酸っぱい感覚が押し寄せてくるのは、この梅ジュースのせいなのだろうか。

うんきつと梅ジュースのせいだ。

決して甘酸っぱい初恋の気持ちなんかじゃないのだから。

まるで一人漫才のように自分に突っ込みを入れながら、少し生ぬるくなった梅ジュースを飲み干した。

往生際悪いよな。

これが入ったら、直ぐにでも電話しよう。

壁に凭れたまま、梅ジュースの空き缶を顔の前に掲げた。

目標3メートル先のゴミ箱。

入れとも入るなとも思わず、無心になってゴミ箱をみつめ、私の手から離れた空き缶は宙に綺麗な弧を描いた。

あれから3日

仕事にここまで身が入らなくなるなんて。

仕事にプライベートは極力持ち込まないというのが私の信条だった。江川と別れた時だって、辛くて辛くて仕方なかったけど、仕事はきっちりしていたつもりだ。

同じ職場に相手がいるからこそだったかもしれないけれど。

「珍しいね、仙崎がミスるなんて」

吉川が、私の机にコーヒーを置きながらそう言ったので慌てて顔をあげる。

頼まれていた二つの会社のプランをごちゃまぜにレイアウトしてしまった。

こんな事は初めてだった。

クリップで止めたはずの資料を落とし、混在させてしまったのをよく確認せずに纏めてしまったから起きたミス。

確かにこんな事、会社に入ってから今までした事がないミスだ。

曖昧な笑みを浮かべ、置いてくれたコーヒーを口に含む。

あんまり甘くないコーヒーだけど、今の私にはぴったりかもしれない。

何だかなあ。

馬鹿にも程がある。

「やっと結婚出来るからって浮かれていますよね？ あっそれとも本当に破談になっちゃったんですか？ どちらにしても会社を持ち込まないで貰いたいものですね」

満面の笑みの直後に片方の口角をあげ哀れですね、なんて片瀬の嫌味。

いつもだったら、知らん顔してやりすごすのが私なのに

「なんですって」

と机にコーヒースタンプを叩きつけ席から立ち上がってしまう。

「あら、ずばり言い当てられて動揺しちゃいました？ ご愁傷さまです。でも仕事はきちんとしなさいって、仙崎さんの口癖ですからね」

片瀬の余裕な笑みがまたむかつく。

こいつー、もう許せない。

両手に拳を握った私。

一瞬ひるんだ片瀬の顔が目に入った時だった。

「片瀬、調子に乗るなよ」

片瀬の勝手すぎる言動や振舞いにも、やんわりと諭し片瀬の中で一番味方に近い存在だったに違いない吉川が、私の前を遮った。

吉川の背中が何も言うなと語っているように思えた。

「みんなして仙崎さんの味方して。悪いのは仙崎さんの方なのに」
見えずとも解る、きつと歯ぎしりしているのだらうと。

「味方とかじゃないだろ？ 関係の無い俺が聞いても今のは凄く感じが悪かったよ片瀬。それにお前知らないだらうけど、お前のミスを黙って修正してるの他でもない仙崎って事知っておいた方がいいぞ。何が気に入らないのか解らないけれど、仙崎に突っかかるのなんて片瀬がやっていい事じゃないと俺は思う」

片瀬は何も言わなかった。

ただ走り去る時の鈍い足音は聞こえたけれど。

「さんきゅ、吉川がいてくれなかったら私、暴力沙汰で部長から呼び出しくらってたかも。それに吉川良かったの？ 片瀬敵にまわしちゃったかも」

これは本当に申し訳ない。

どこからくるのか、理不尽で身勝手なああの負けん気、矛先が私から変わる事は無いだろうけれど、幾分か吉川にシフトするかも。

「なんて事ないから。仙崎が気に病む事なんてないって。解ってやつてるんだからさ」

なんていい奴なのだろう。あいつに爪の垢煎じて飲ませたくなくなるくらいだ。

つて私つてばまたあいつの事……。
いかんいかんと首を振り。

「惚れそう」

ニヤッと吉川の顔をみやると。

「勘弁しろよ。変わりにこれ、おかわり宜しく」
とコーヒーカップを掲げた吉川に

「ラジャー」と一言、自動販売機へと向かった。

それにしても片瀬の奴。

吉川が多少怒りを和らげてくれたものの、そんな簡単に鎮火するはずもなく。

ポケットから小銭入れを取りだすと、力を込めてボタンを押す。
力を入れようと入れまいと何の変わりもないけれど、そんな物にもあたりたくなる衝動は抑えられなかった。

陳列している梅ジュースが目に入った。

意を決し、あいつに連絡を入れたのはもう三日前の事だった。

私があの時放った空き缶は、見事なまでのシュートでして。

空き缶に背中を押されるってどういう事と思うかもしれないけれど、それが事実だったり。

忙しなく動き始めた心臓に手をやり、そっと耳に宛てた携帯。

聞こえてきたコールは五回で止んでしまった。

止んだコールの変わりに聞こえてきたのはアイツの声じゃなくて、自動で流れる留守番電話のアナウンス。

声を入れる事も出来ずに、息を止めたまま携帯を切った私。

それから数度チャレンジしてみたけれど、何度やっても結果は同じだった。

その度に、鼓動は速度を増していった。

絶対寿命が縮まったと思う。

そんなこんなで私の勇気はまた萎んでしまった。

アイツの携帯には私からの着信履歴が残っているはず。

きっと忙しくて出られなかったのだろう、履歴を見たら掛けてくるだろう。

いつ掛ってくれかもしれない携帯に神経をすり減らしていたこの三日間。

流石にもう、掛けてこないだろうと悟り始めていた。

私と何か話す価値もないってか？

待ってるって言ったのは、社交辞令か？

こんな事なら、携帯なんか掛けないで病院に乗りこんでいけば良かったのかもしれない。

また好奇心な目に晒されたかもしれないけれど、玉砕してもう会わないのだったら関係ないのだから。

考えたところで何も始まらないのだけど、ね。

我に気がつくと、コーヒーが入った事を知らせる取り出し口のランプが点滅していた。

解ってますよ、取ればいいんですよ。

自動販売機に話し掛ける怪しい女になっていた。

コーヒーを持って廊下を歩くと、感じる携帯の重み。

いつその事、捨ててしまおうかしら。

これがあるから、気になるんだ。

出来るはずもない訳の解らない考えまで出てくる始末。

もう一度連絡をする度量なんて何処にもなかった。

履歴が有るはずなのに、掛けてこないって事はそう言う事だよね。

廊下に虚しい呟きがため息と共に落ちていった。

合コン相手や如何に

「最近梨乃の顔怖すぎ」

言われて見上げた私の顔もきつと険しい顔だったのだろう。

「ほらそれ、皺増えるって」

ある意味私達の世代にはタブーとも言えるその言葉。
仕方ないじゃん、勝手にそうなっちゃうのだから。

「何処かに良い男転がってないかな？」

中途半端な想いを引きずるなんて辛すぎる。

男を忘れる為に、男に頼るなんて考えた事なかったけど、実際こう
なると思っておかしくなるらしい。

「ふーん、そう言う事言っちゃうんだ。なるほどね」

真美といつもの喫煙室。

真美の吐きだした細長い紫煙が空気清浄機に吸い込まれる。

私のもやもやした想いもこうやって綺麗すっぱり吸い込んでくれた
らしいのに。

「じゃあ、合コンでもする？」

煙草をもみ消して、私の眼を射ぬくような真美の視線。
ギクリとしてしまうのは条件反射というものだ。

「それもありかもね……」

そう返した言葉に間髪入れずに真美の言葉が飛んできた。

「嘘、そんな事思っていない癖に」

当たってるだけに、ムキになってしまう私は。

「そんな事ないったら。真美にあてがあるならセッティングしておいてよね」

こんな時煙草吸いだったら、火をつけるのだろうな。
手持無沙汰の自分が恨めしい。

「了解、相手みて帰るなんて言ったら承知しないからね」
自信満々に真美が言うものだから

「望むところよ」

なんて言ってしまった。

真美の言う通り、乗り気なんかじゃない癖に。
ほんと馬鹿みたい。

昇華出来てない恋心を持ったまま、次の恋愛になんていける性格じゃないのは自分が良く解ってる。

過去の恋愛だつてどうしようもない相手ばかりだったけど、立ち直るまではいつだって時間が掛った私だから。

「今週末にする」

こ、今週末ですか？ 些か早すぎはしませんか？
心の中で叫びつつも

「どうせ予定なんて入ってませんよ」

とまともや自虐気味に強がってしまう私がいた。

私の性格を熟知しているだろう真美は、急に無口になってしまって、居た堪れなくなってしまう。

また口を開いたら私は何を言い出すか、自分で墓穴を掘ってしまうに違いない。

幸い手の中のカップは空になった。

「じゃあ、私行くから」

微妙な会話の途切れ方をしたままだけど、私は逃げるようにその場を立ち去る事に。

梨乃って解り易いんだよね……

扉を開いた時に、背中越しに聞こえた声は聞こえなかった事にしておこうと、振り返らずに足を進めた。

束の間の休憩の後、少し遠回りをしてデスクに戻るとやけに機嫌のいい永山がいた。
頬が緩んでるっていうのが良く解る。

「永山、浮かれてポカすんなよ」

吉川の言葉もなんのその永山は

「何言い出すんですか、こんなに仕事もはかどって絶好調ですって」

間違いなく浮かれてる。

椅子を横にずらして、事情を知っていそうな吉川に

「何があつた？」

と小声で聞くと

「週末に合コンが入ったらしい。久々のヒットだとかさっきからえらいご機嫌なんだよ、マジ単純な奴」

吉川の言葉に、背筋につららが落ちていった。

物凄い身震い。

真美の背中を見送る時、確か携帯いじってたような……
もしかして手近なところで済まそうとだなんて思ってたないよね？

「仙崎どうかした？　もしかして結婚前のアバンチュールに永山狙いだったとか？」

恐ろしい勘違いの声に本日2度目の身震い。

「何で私が永山狙わなくちゃいけないのよ」
必要以上に吉川を睨んじやった。

「だよな、悪いっ」
悪いなんて思ってたない癖に。

椅子を定位置に戻してからも、私の中に渦巻く疑問。
真美と永山に接点なんてあったかしら？

確かにフロアーは一緒だけど、永山と真美が話しているところなんて見た事ないわよね？

でも真美の言葉は意味深だった。

『相手みて帰るって言ったら承知しない』だっけ？
なんとなくしつくりくるような。

だとしたら、これは回避しなければ。

只の飲み会ならいざしらず、何で私が永山と合コン？

目眩がしそうになるのは気のせいじゃないよね？

永山が絶好調であればあるほど私のボルテージは下がりまくり。

真美に問いただしてすつきりしたいとこだけど、ああ啖呵を切ってしまったからには何となく聞けないような……

同僚としてみれば、仕事を頑張っている永山に水を差すのもどうか

と思う。

もし仮に真美に誘われたとなれば、永山の目当ては真美で私が参加する事をしらないのかもしれない。

全てが仮定な話なのだけど、考えれば考えるほど合致してくるようで怖いんだ。

だって、ほらこの課では私はまだ婚約してる事になってる訳だし……ね。

それもそのうちバレル事なのだけど、あーもう何なの。
ここのとこすつきりしない事ばかりじゃないのよ。

最近占いしてないけど、きっと今は天中殺の真っ只中なのかもしれない。

モンモンとした気持ちを引きずりながら、終業時刻の鐘を聞いたけど、仕事はいつものように終わってはくれない。

「楽しみが待っているかと思うと残業も悪いもんじゃないですね」
なんて馬鹿みたいな永山の独り言を聞くとは思わなかった。

私は悪いものだらけだよ。
と突っ込んでやりたい。

さてどうしよう、考えついたのは仕事終わりに永山を捕まえる事だった。

合コン相手を聞けば済む事じゃない。

そんな単純な答えさえ考えつかなかった私は思考能力低下中というところだろうか。

永山の作業状況を覗きつつ、キーボードを打ちこむ事一時間。

「さてと、今日はここまでかな」

今日は充実してたなあなんて椅子に座りながら大きく伸びを始めた
永山を見て、焦り始める。

ちよっと待った、あとちよっと進めたいのに。

鼻歌を歌う永山、解り易い奴だよ全く。

普段無口なだけに、異様な感じがしなくもないのだけど。

「お疲れ様、お先です」

という永山の声に慌ててファイルを保存する。

何だか中途半端なところで終わらせてしまつて、明日が怖いような
気がしないでもないけど、永山の方が気がかりなだけに、仕方がな
いって事で。

公私混同だよな。

今まで自分が否定してきた事だっただけに、情けなくもなるけれど
今日だけだから。

永山から遅れる事3分。

「じゃあ、私も今日はお先」

後ろから掛る声に振り向きながら言葉を返すと少しだけ急ぎ足でフ
ロアーを出た。

エレベーターは既に階下に行っていた。

何度も押しても早く上がってくる訳じゃないっていうのに、3度も
ボタンを押してしまう私。

頼む、永山ゆっくり歩いておくれ。

エレベーターホールで足踏みしそうになるのをぐっと堪えた時待ち
わびたエレベーターがやってきた。

そわそわしながら隅っこに佇んで、扉が開くと同時に飛び出した。

受付にいた受付嬢は既に警備員さんと交代している。

顔なじみの警備員さんに「お疲れ様です」と挨拶すると、自動ドア
にぶつかる勢いで猛ダッシュ。

そんな私の努力の甲斐あってか、道路に出て直ぐに見慣れた背中を発見した。

「永山っ」

名前を呼んで思わず、腕を掴んでしまった。

物凄く驚いた永山とご対面。

「仙崎さん、どうしたんですか？」

そりゃそうだろう、数年同じ職場にいたってこんな事した事ないんだから。

そして、大袈裟に腕を掴んでしまった事を後悔。

「いや、たまには駅まで一緒にどうか？　なんて」

何だかそらぞらしいけど、まあ仕方ない。

「いいですけど、生憎お金使いたくないんでお酒は付き合わないですからね」

あんまり見たことのない嬉しそうな顔。

そして永山よくぞ言ってくれました、これで聞きやすくなったってもんだ。

「吉川に聞いたよ、今週末合コンするんだって？」

ほれ食いついてこい。

「合コン？　違いますよ、大学の時の同期と久し振りの飲み会なんです」

よっぽど嬉しかったんだろう、高嶺の花だった子も来るみたいで永山には日頃みれない饒舌で。

私としたら、張りつめてきた空気が急に萎んだよう。

吉川の奴、余計な事言いやがって今日の私の半日を返せってんだ。

ほっとしすぎて、永山の浮かれ話も半分耳に届いてこなかった。

「良かったね」

気が抜け過ぎて一歩遅れた私。

そんな私の頭を通り過ぎた永山の視線。

「ちょっとすみません、仙崎さんあの人が知り合いですか？　もしかして婚約者の人だったりして」

永山の声に振り返った私の目に映ったのは

ガードレールに凭れて腕を組む、会いたくて会いたくなかったアイツだった。

嫌がらせにも程がある

「よっ」

何にが『よっ』なのよ。

背中に永山の視線を感じながら、一步踏み出した足。何でアンタがここにいる。

いつなんどき誰が出てくるかも分からない会社の前。ちらりまだ煌々と明かさを放つビルを見上げると、行く先も考えずコイツの腕を引っ張って駅と反対方向へ歩き出す。

「そんなに誰にも見られたくない？　もしかして、さっきの奴が例の上司だったりするのか？」

私の電話を無視していながら、平然と質問を繰り返すコイツの頭の中がどうなっているのか不思議でならない。ただ無言で歩き、あたりを見渡す。

「なあ、何処に行くのか解らないけど、俺の車あっちなんだけど」

「早く言いなさいよ」

進行方向と逆にあるらしいコイツの車。

パンプスを鳴らすようにキュツと足を止め、何でかな苛立つ私。

そうじゃない、そうしてないと自分が自分でいられないようで怖かったんだ。

きつと今コイツの顔を見上げたら、苦笑しているに違いない。余裕のない私に比べて、余裕な感じが悔しいったらない。本当だったら、私の方が質問攻めにした気分だっていうの。さて、どうしたものか。

反対と言われても……このまま会社の前を通り過ぎるのはリスクが大きすぎやしないだろうか。

永山も普段の永山なら余計な事は言わないはず。浮かれている現在には不安もあるけれど、きっと大丈夫だと思いこむ事にした。

「ここで待つてるから取ってきて」

腕を組んですごんでみせた。

虚勢を張って。

こんな子どもじみた手だけどこうでもしなくちゃ乗り切れない。

「随分とまあ威勢がいいな」

仰せの通り、と馬鹿にしたような言葉を添えて背中を向けたアイツ。

だからそうでもしなくちゃならないんだって。

ほんとむかつく男だ。

会社から50メートルしか離れていないこの歩道で、ガードレールに凭れ待つなんてなんて無謀なのだろう。

駅とは反対方向とはいえ、誰かがこないとも限らないから。

つま先を見つめ、じっとしていると段々落ち着かなくなってきた。

急な展開にやっとな頭が追いついてきたからなのかもしれない。

少しだけ逃げたくなったり。

確か――朝のテレビで双子座マークがしょんぼりしてたような。

占いなんて面白いつつ、つい目をやってしまうは結局好きなのよね。

ラッキーアイテムは常にチェックしてたり。

今日は卵焼きだったような……

食べてないし。

せめて、携帯とか身の回りのものだったなら良かったのに。

本当は頭の中爆発寸前だった。

あまりに突飛過ぎる登場に正直、面食らってる。

心の準備つてものは、電話を掛けた数日のうちに何処かに置いてきてしまったのだから。

もう怖すぎる。

明日の朝は無事に迎えられるのだろうか。

振られる事を前提にしか考える事が出来なくて。

ふいに浮かんた、片瀬の意地悪そうな顔。

現実になりそうだよ。

今日にくわえて明日もミスの連発なのだろうか。

「ほんと、むかつく」

勝手に口が開いていた。

でも愚痴らないと正気を保てないかも。

そんなに時間は経ってないと思う。

「夕飯まだだろ？」

車を横付けするかとばかり思っていたのに、何でか私の前に立つコイツ。

「車取り行つたんじゃなかったの？」

自分の声ながら嫌味な声。

「あのな、いくら俺が図々しくてもここに止めるのは迷惑すぎるだろ」

ほら行くぞ、なんて当たり前のように歩きだすのにも何だか悔しいと思ってしまう。

何でそんなに余裕なのよ、と。

「きつと家で用意してるから」

会話が飛んでいるのに言葉が足りないのは承知の上。きつと、平然とご飯なんて食べられないと思う。

何処かで少し話せれば、それでいい。

だって、気まづくなりながらの食事は拷問だもの。

でも、呆れたように振り返り

「俺もう飯モードだから電話しろよ」

なんて俺様言葉。

仁王立ちでもしそうな勢いに少し圧倒されそう。

というかトキメキそうになる私にハッとした。

私ってマゾなのかも、そんな危ない考えが一瞬頭を過って身震いした。

そんな事はあるわけないと言い聞かせ、仕方ないかと

ポケットに入れた携帯に手を伸ばすけれど、このアンクレットの存在を思い出し全身が硬直した。

駄目ここで出せない。

「いいって、ご飯って気分じゃないから。何処か流すだけで……」

何でかな、さっきまでの強気な態度は何処へやらチグハグな私だった。

「却下」

何処まで行っても俺様な態度にまでも少しときめいてしまいそうで苦しすぎる。

でも再び背を向けるのを見て携帯から手を離す事が出来てほっとしたり。

そんな背中を見ながら、この背中を見るのも今日が最後なのかなと
考えてしまう。

告白するのは自分の思いを断ち切る為、前に進む為なんだと自分に
言い聞かせるけれど。

上の空だった私に、恐ろしい言葉が降ってきた。

正確に言うつと私への言葉ではなかったのだけど……

「お久し振りです。このような時間になって申し訳ないのですが、
時間が空いたものでこれから梨乃さんと食事に行こうかという事にな
りまして。もう支度がお済みだと思いますが——」

私の足が止まったのは言うまでも無い。

おまけに口もあんぐりだ。

どうして、余計な事するのよ。

声に出したいけれど、あまりの事に声が出てこない。

母さんへのフェードアウトを狙っていた私にとって晴天の霹靂でし
かない。

火に油を注いでどうするのよ。

そんな私に気がついて

「すげーマヌケ面」

と得意の鼻で笑うのもう勘弁してよ。

いやがらせにもほどがある。

何でこんな奴を好きになってしまったのか。

自分を呪いたくなってきたよ。

思いだしちゃった？

「ここなの？」

惚れた弱みなのか、今日で最後と自分を奮い立たせたのか、奴に促されるまま車に乗ってついた先には私が思い出したくもない、高田とお見合いもどきをしたホテルだった。

もどきじゃなくしてお見合いなのだけど、あれをお見合いだなんて認めたくない私がいるんだ。

あー思い出したら胃がむかむかしてきた。

「お前が飯食いたい気分じゃないっていうから妥協してやったんだろ。なのになんて顔してんだ」

なんて、凄い嫌味なんですけど。

でもお酒の助けを借りるのも有りかもしれない。

意気地と勇気が足りないのだから。

エレベーターが開いた先はあの時の最上階のバーでした。

あの時飾ってあった美女の絵は他の絵と掛けかえられていた。

そんな事を思い出していた私に

「もしかして、思い出しちゃった？」

と耳元で囁かれて、初めなんの事が理解出来なかった私。

でも瞬時に広がるあの時の光景。

まるで瞬間湯沸かし器、顔がボツと火を噴いたように熱くなった。

そんな私の顔をみて満足したらしい。

何も言わずに、自動扉をくぐっていった。

あの日のアンタとの事も抹殺したいもんだよ。
そうすれば、こんな想いはしなくて済んだのに。
そっと自分の頬に手を添えるとまだ、熱くって。
何でこう反応しちゃうのだろう。
私ってそんなにウブなのだろうか。
もしここに誰もいなかったら、きっと自分の頭をポカポカと殴って
いたに違いない。
私の馬鹿ーってな具合に。

でも、ふと頭を過る都合の良い解釈。
もしかして、あいつも私の事？
いやいやそんな事あるはずもない。
期待しちゃ駄目だと言い聞かせる。
それが私の為なのだから。

言わずと知れた高級ホテル。
最上階のバーのシャンパンとなればきっと良いものなのに違いない。
それなのに、どうして味わえないのか。
仕方ないのかもしれない、何せこの後私はコイツに……

「何でアンタとシャンパンなんて飲まなくちゃいけないの」
ここにきて毒づいちゃう私って……。
緊張がピークに達してるからなの？
まるでビールのようにシャンパンを口に運んでしまうあたり、大人
の女の「お」の字もない。

「嫌いじゃないだろ？」
その言葉はシャンパンに向けての言葉なのに、どうしても私の想いの
先を聞かれているようで身体がビクンと跳ねそっになる。

「嫌いじゃないわよ」

口先に浮かぶ言葉。

そう、私という訳だかアンタの事嫌いじゃないのよ。
心の中で言葉をつけ足していた。

「だったら——理由はいらないだろ」

カウンター越しに並んだボトルを愛おしげに見つめて、コイツは何を
考えているのだろうかと思った。

バイトをしてたというだけあって、高級バーの品ぞろえが気になる
のか？

掴みどころがないんだ。

いつだって私はこいつに翻弄されっぱなし。

むかつくはずなのに、ね。

そして、会話が無い。

ただ黙々と喉を鳴らす音だけ。

一体何しにきたのだから。

かといってこのタイミングで告白なんて出来やしない。

「おまたせしました」

そういつて蝶ネクタイのボーイさんが運んできたのは良い香りを放
つグラタンだった。

「グラタンなんて頼んだの？」

周りを見渡しても誰もこんな食事っぱいの頼んでいる人はいないの
に。

「頼んだから来るんだろうが、下のレストランからデリバリーが出
来るんだよ。結構旨いんだぜ、ここの」

だから、そういう意味じゃないつつの。

「何、食べたくなった？」

スプーンを持ち上げて笑うコイツはいつもの意地悪そうな顔じゃなく、

「結構です」

グラスをクルクルと揺らしてみせた。

細かい泡が弾けて消える。

それにしても、食事のマナーというのだろうか、食べ方が綺麗。

その仕草に見惚れそうになる自分に気がつかれないように、慌ててグラスを口に運ぶ。

「叔母さんがさ」

唐突に紡ぎだした言葉に黙って耳を傾けた。

「小さい頃、さとしと遊びに行く決めてグラタンを作ってくれたんだ。それが旨くてね。でも叔母さん、ある時を境にグラタンを作らなくなつてな。口には出した事ないけど、もう一回食べたいんだよね、あのグラタン」

私の知らない顔だった。

ふと思う、子どもの頃からこんなに綺麗な食べ方をしていたのだろうか、と。

『だったら、作ってって頼んでみればいいのに』

そう言いたいのに言葉が出なかった。

きっと叔母さんに深い意味はないのじゃないのかと思う。いい歳した大人にグラタンって発想なのかもしれない。

何でだろう、何でそう言えないのだろう。

言葉を発する変わりに、グラスに頼り半分残ったシャンパンを一気に飲み干してしまった。

ほんとに勿体ない飲み方。

と言っても味わえないのだから、そうでもないのかもしれない。

意味不明な言葉が頭の中をぐるぐると回っているのは、そうとうテンパってると言う事なのかも。

「好きなの頼めば？」

私のグラスが空になったのに気がついたのか、口元にスプーンを運びながら、視線を向けもせずに放たれた言葉。

「何か頼む？　好きなんでしょ？」

反射的に出た言葉はさつきカウンターを愛おしげに眺めていたのを見たからなのかもしれない。

「お前な、俺が何で来てるか知ってる癖に。それとも何か、俺、今晩誘われてたり？」

今の今まで、私に興味なんて無いぞ、オーラを纏っていた癖に、何で突然そんな事言い出す。

確かに、車で来た事を失念していたけど――。

変に意識をしてしまっているせいで、恥かしいやらム力つくやら。

言い返そうとしたところに、鼻を鳴らすいつものあれだよ。

からかわれていた事に気がついて

「すみません、これもう一杯頂けますか？」

斜め向かいでグラスを磨くバーテンダーに声を掛けた。

きつと良い値をするだろう、このシャンパン。

今度こそ味わってやらないと。

当初の目的を忘れた訳じゃないけれど、会話というのにも微妙なこの言葉の応酬が少しでも長く続いて欲しいと願ってしまふ私がいる、胸に秘めたこの言葉は別れ際のその時に言えればいい。

気まづくて早く帰らなくてはいけない事態には持って行きたくなかったのに。

「もしかしたら、誘ってるのかもよ」

完全にスルーの会話なはずなのに、ワンテンポずれて発してしまつたうえに妙にボケたさっきの問いへの返事。

その私の言葉に、コイツはというとちらりと私を見たきりで、残りすくなつたグラタンを掬うだけ。

本気じゃないって言いたいの？

自分から気まづくしている私って本当に何なのだろう。

思考回路停止

クリスタルのグラスには綺麗にカットされたスティックきゅうり。指先で摘まんで、上品そうにかじってみたり。

普段食卓でみるきゅうりなんて、糠漬けかサラダくらい。とても同じ野菜には見えない。

人も同じなのかもしれないな。

片瀬だって、あれはあれで自分を良く見せようとしているのかも。って何で今ここで片瀬を思い出すんだ。

「なあ」

ふいにそう話し掛けられて、反射的に顔を向けた私も悪かったわよ。ええ、そうでしょうとも笑われる顔をしてたでしょうよ。きゅうりをかじったまま、思いつきり素だったのだから。

「何よ」

きゅうりをかじりながらすごんだってと自分に突っ込みを入れながらも、このきゅうりを何とかしたくてカリポリと咀嚼する。

「女って、本気で白馬の王子様が現れるとか思ってるもん？」

あんまりにも突拍子が無さ過ぎて。

きゅうりを嘔き出さなかった自分を褒めたいもんだよ。

心の中で舌打ちをする。

私にとってはね

アンタがその——だったりするんだよ、と。

こくりときゅうりを飲みこむと、カウンターの向こう側を見据えた
め息と共に言葉を吐きだした。

「男には解らないだろうけれど、心の奥ではそう願うもんなのよ。
何処かにきつと私だけを好きになつてくれる人がいるはずだってね。
そんな人はいないって解ってるけど、そう願っちゃうもんなの」
こんな乙女ちつくな発言をコイツの前で晒すなんて、コイツにエサ
を与えてしまったみたいで——取って付けたように、言葉を繋いだ。

「あくまでも、一般論だけどね」

顔をみずとも、今隣にいるコイツがどんな顔をしているのか想像出
来てしまうのが悲しいところだ。

けれど、一向に聞こえないあの鼻で笑うフツってやつ。

笑われたら

『だから一般論って言うてるでしょ』

と息巻くつもりだったのに拍子抜けみたいな感じ？

「だったら、お前はどんなんだ。……いつか現れるとも思ってる
のか？」

笑わずに放たれたこの言葉に何と返したらいいのだろう。

シャンパンに伸ばした手が止まってしまった。

これ以上みじめな姿を晒すもの如何なものか。

今日はすつきりするって決めたでしょ、とここが私の勝負処なのか
と思ひなおす。

心の準備は出来てたはず——なのに。

「だから、一般論だって言うてるでしょ。悲しいかな現実解りき
ってるわよ、そんな人があられる訳ないって」
と勝手に開く私の口。

いわば予定通りの言葉だった訳だけど、天性の天の邪鬼は私の一世一代の勇気を邪魔してしまった。

私の馬鹿、と脳内で自分を罵る言葉が渦を巻く。

「でも、結婚願望はあるんだろ？ 子ども欲しいって言ってたもん
な」

はて？ こいつにそんな話をした事あっただろうか？
今度は頭の中に？マークが列举した。

「結婚っていうか、子どもは欲しいとは思っけどって——可笑しい
？」

なんでこうケンカ越しになっちゃうのだろう。
まるで小学生のケンカみたい。

「いや、可笑しくないんじゃないの」

はあ？ いったいアンタは何が言いたいんだ。

きつと相当マヌケ顔だっただろう私は、ポカンと口を開けたまま意図して動かさなかった視線を隣に促してしまった。

こう肯定されてしまつては、反発出来ない訳でして。

というか反発しているばかりの会話になつてるというか頼ってる私ってどうなのかしら。

「王子様は現れないって解っているのに、子どもは欲しいって思うんだ？」

おいって突っ込みたくなつた。

だって、今可笑しくないっていったばかりなのに。

それにしても自分で放った言葉だけど、否定したくて堪らない。

だから、本当は望んでいるんだよ、自分を好きになつてくれて、そ

れでいて私も好きで――

そんな人と結婚して、その人の子どもが欲しいんだ、と。
段々ドツボに嵌っていくみたいだった。

返事を迷いあぐねている私にまた違う問いが降ってくる。

「結婚願望はあるんだろ？ お前の理想の相手って何？ 年収？
顔？」

言葉の変わりにジロリと睨んでみた。
何だか泣きそうになる。

だから、理想なんて関係ないだって。私が好きになっちゃったのは
アンタなんだって。

口から出そうになってグツと唇を結んだ。

駄目こんなんじゃ。

ケンカ越しになっちゃ駄目。

そう言い聞かせて、冷静になれとシャンパンを一口。

「だからね――」

意を決して口を開いた私の言葉を遮るようにまたムカツク言葉が降
ってきた。

「これから、お前の言うところの『お前だけを好きになつてくれる
奴』が現れるの待って恋愛して結婚して子どもが出来るのって何年
先だか。それよかそんな都合のいい男現れない可能性の方が高いん
じゃ――」

もう最後までコイツの言葉なんて聞いてられなかった。
冷静になれなんて心の中の言葉は綺麗にすっ飛んで

「だから、そんなの解りきってるって言ってるじゃない。それくらい私も解ってるわよ」

とカーツとして微妙な日本語の啖呵を切ってしまった。

そこでやったよ、コイツあの馬鹿にしたような鼻でフンっていうの。何なの、私を怒らせるのが趣味な訳？

何でこんな奴を好きになったのか自分の思考回路が壊れているのか思えない。

全身の血液が頭に登りかけたその時

「結婚って妥協が必要なんだよ」

はあ？ 妥協って？

何でそんな事諭されなくてはいけないのよ。

どういう訳だか、私の方に向き直し探るような視線を向けられて思わず背中がのけ反ってしまった。

そして、次の言葉に私は全ての思考回路を停止する事になる。

「だからさ、梨乃。俺と結婚しようぜ」

昨日の懸念材料

「梨乃つてば『ただいま』くらい言いなさいよ」

母さんの声を背中中で聞きながら、玄関から真直ぐ向かった洗面所。水道の蛇口を捻って勢いよく出る水を両手で掬うと思いつき顔に叩きつけた。

「久し振りに会って粗相なんてしてないでしょうね？ 本当に気がきくわよね、小川さんつて。きつとあれでしょ、梨乃が連絡入れないと言ったからわざわざ連絡してくれたのよね。で、今日は何食べてきたの？」

はしゃぐ母さんを尻目にびしょぬれになった顔をタオルでゴシゴシと拭い終わると母さんの横をすり抜け

「スティックきゅうり」

とだけ告げ、階段を踏みしめた。

「あんた、まさか本当に粗相して嫌われたりしてないだろうね？」
思いつきりデリカシーの無い言葉を階段下から大声で放つ母さん。
少しは察してよ、複雑すぎる私の気持ちを……。

勢いよく閉めたドアの音が私の返事。

サイドボードの引き出しを開け、化粧落としのペーパーで水浴びで落としきれなかった化粧を剥がす。

汚れたペーパーをゴミ箱に投げつけたけど、大きくそれで。

アンタまで私を馬鹿にしているの？

摘まみあげたペーパーに呟く私つて、頭がおかしくなったのだろうか？

違う、頭がイカレてるのはアイツの方だ。
ブラウスのボタンを引きちぎりそうになりながら外し、スカートも
床に落とすと下着姿のままベットにダイブした。

――馬鹿にするのもいい加減にしなさいよ――

高級ホテルのバーで啖呵を切ってしまった。

周りの事なんておかまいなしに。

その時の私の行動は一つしかない訳で。

『帰る』と席を立てってしまった。

問題はその後だ。

席を離れようとした私の腕を掴んだアイツは。

――俺は馬鹿にしてないし冗談も言っていない。次に会う時は返事貰
うから。――

確かそんな事を言ってた。

私は腕を振り払うように駆けてきたけど、アイツは追ってもこなか
った。

普通そこで一人で帰す？

矛盾しているけど、そういうもんでしょ？

それに返事って何よ。

面と向かって、妥協して結婚するって言われて誰が『はい、そうで
すか』って言えるっていうの。

プロポーズに夢を持つちゃいけない歳な訳？

これを馬鹿にしてないってどういう神経なんだか。
サイテーだよ。

でも、そんなサイテーなむかつく奴なのに
結婚しようぜ、って言われて不覚にも心臓を打ち抜かれたように思
ったのも事実。

なにせ、私は今日このムカツク男に告白をしようとしていたのだから。

好きだをすっ飛ばして、結婚って。

私達まだまともに付き合っても無いっていうのに。

そんな男の何処がいいんだか……

頭の中では警笛が鳴り響いている。

それは何に対しての警笛なのだか。

これ以上近づかない方がいいのか？

それとも、自分に素直になって妥協でも何でもアイツと結婚する事
がいいのだろうか。

妥協、妥協、妥協、妥協、妥協……

私にとって妥協って何なのだろう。

自分を好きでない人と結婚してそんな人の子どもを産む事なの？

救いは私がアイツの事を好きな事？

一方通行の想いのまま、結婚ってして大丈夫なもの？

段々自分が見じめになっていくようだ。

こんな事なら、仮の婚約者だなんて引き受けなければ良かったんだ。
今更そんな過ぎた事を考えても無駄な事なのかもしれないけれど。

私が、アイツに告白したらどうなっていたのだろう。

頭に血がのぼって帰ってきちゃったけど、私が好きだと言ってもア
イツは私と結婚しようと提案しただろうか？

きつと私が面倒な女じゃないから、好きだ嫌いだなんてわずらわし

いつて思っているから私にあんな事言っただと思う。

あーっ

頭を掻き毟り自虐的な思想を吹っ飛ばそうと声にならない声を枕に吐きだす。

返事なんてしてやるもんか。

結婚してくださいって頼んでみるっていうの。

言えっこない言葉を飲み込んで、微かにしか思い出せないシャンパンの味を巡らせた。

美味しいはずのシャンパン。

嬉しいはずのプロポーズ？

今日は考える事が多すぎて寝れなそうだな、なんて思っていたのに。歳なのかしら、いつの間にか熟睡していたようで。

目覚ましよりも少し早めに自然と開いた瞼。

目覚めはすっきりときたもんだ。

昨日の事が夢だったら良かったのに。

ベットの脇に脱ぎっぱなしの洋服は昨日の事が夢ではないと言う事で。

現実なのよね。

スカートを引っ張り上げて軽く払って取れない皺を確認。

クリーニング行きに決定だ。

頭も身体もすっきりしつつも、やる気がでないのはアイツの言葉が離れないからで。

出来る女のはずの自分に叱咤しながら、クローゼットをこじ開けた。取り敢えずあいつの事はシャットアウトよ。

小さな声で呟いて自分に言い聞かせる。

専ら一番の難関は母親だろう。

面白可笑しく私を煽るに違いない。

何が粗相よ。

昨日の母親の声が頭に浮かんで眉間に皺がよつたのが解った。

人差し指で、眉間をなぞり如何に少ない会話でこの家から脱出出来るかを考えたり。

でも私は気がつかなかったんだ。

難関は母親だけじゃない事を。

意を決して部屋のドアを開けた。

シナリオは出来ている。

『昨日仕事残してきたから、もう行くね』

キッチンにちよつとだけ顔を出して家を出るつもりだったのに。

「おはよう梨乃。機嫌悪かったって？ 母さん心配してたぞ。まあマリッジブルーなんてよくある話だから。早く芳人さんと仲直りするんだぞ」

私の顔を真直ぐみれないのは照れなのか？

まさか父さんに言われようとは……

「父さんもさあ。私が結婚した方がいいと思ってる？」

思ってもいなかった言葉をするりと口にしてしまった。

父さんは口を半分開けたまま固まってしまった。

「ごめん、変な事言つて。今日は急ぐからもう行くね、母さんに言つておいて」

逃げ出すかのように玄関に向かい、慌てて靴に踵をすべらせる。

「いってきます」

そう言った私の背中越しに

「梨乃が幸せになる事が父さんの一番の願いだ」

不覚にも涙が出そうになった。

三十路女でも子どもは子どもなのだろうか。

「うん、ありがと。じゃあ行ってくる」

父さんの顔は見れなかった。

私の幸せは何処にあるのだろうか？

無意識でも迷う事なく踏み出す足に通勤路を任せながら、頭の中は思考を停止する予定だったのにいろんな思いを巡らせる。

むかつくけれど、嫌いになれない。

むかつくけれど、好きなんだよね。

「しょうがないから結婚してあげる」

そんな風にちやかしながら、一生ボーカルフエイスを被り続けるのもありなのかもしれない。

願わくば、情が愛情に変わってくれる事を期待して。

私からは好きなんて言ってやらないんだから、なんて。

そんな微妙な妄想をしながらも会社近くのコンビニでサンドイッチとコーヒーを買って辿り着いた会社。

まだ早いこの時間、誰もいないフロアーでゆっくりと朝食を食べ終えた。

パソコンを立ち上げ、昨日の続きと仕事モードに切り替えた時。

「おはようさん。昨日は彼氏がお出迎えだった？ 実は半信半疑だ

ったけどマジで仙崎結婚するんだな」

吉川の言葉に身体が硬直。

昨日の懸念材料をすっかり忘れていた。

「ほれ、これ凄いウケルんだけど」

吉川が開いた携帯画面には

『スクープ』

と題した一枚の写真。

遠目で写ってはいるけれど、それは紛れもなく私がアイツを引っ張っている昨日の写真でして。

永山の奴……

まだ主のいないデスクを思いっきり睨みつけてやった。

問題ないじゃない

「やっぱり、まだ怒ってますかね」

パソコンの向こう側で永山が吉川相手に私を伺うかのようなひっそり声。

聞こえてるって言うの。

私の指は正直で、キーを叩く音が雑に大きくなる。

何人にあのメールを送ったのか知らないけれど、興味本位で私に声を掛けてくる輩が多いのはきっと少なくないのだろう。

全く趣味の悪い事で。

「よっ」

肩に手を掛けられて振り向くと、満面の笑みを浮かべた真美がいた。

「珍しいね、この時間に外回りじゃないなんて」

真美には全く関係がないっていうのに、棘のある言い方になってしまった。

「梨乃がそろそろ爆発する頃かと思ってね」

真美のその声は私の頭を通り過ぎて、まるで永山へと言っているみたい。

きつと何処かでメールの事を聞いたのかも。

「爆発なんて人聞き悪い、至って落ち着いています」

口ではそう言っても、やっぱり指先は正直です。

「『花籠』のランチクーポンをゲットしたから、お誘いしにきたんだけど、必要ないかしら？」

真美はクーポンが入っているだろうポケットをポンポンと叩くと私

を流し眼する。

「ご一緒させて頂きます」

花籠のベーコンレタスサンドランチは私の好物と知って、必要ないとか言っちゃうか普通。

真美には聞いて貰いたかったっていうのはあるのだけど……

”このバカチンが” って言われるのは目に見えているだけに――有る程度の覚悟はいるのかも。

「じゃあ、後で」

颯爽と足取り軽く去っていく真美。

必要ないかしら？　なんて思ってもいなかったってところよね。

それにしても色気より食い気のはずの私なのに、気分が浮上しない。それ程一大事って事だよね。

一つ深い息を吐くと、脳内に繰り出そうとする昨日の光景を追い払うかのように頭を振った。

仕事に集中しなくっちゃ。

両方の眼頭を指先で摘まんで、再びパソコンと格闘した。

花籠の入り口に着いたのは12時を10分を過ぎたくらいだろうか。手頃な価格で美味しいとあつたら、この行列は納得だ。

そんな行列を尻目に暖簾をくぐる私。

会社から少し離れているとあって、本当だったらお昼の鐘が鳴ってからではこのランチにありつけるのは

至難の業、午後の就業時間に間に合わない事必須なのだから。

店員に『待ち合わせです』と軽く会釈すると食欲をそそる香りが鼻腔をくすぐる。

和とアジアの雰囲気融合させた何処か懐かしいような空間を縫うように歩き、見知った背中を発見した。

「おまたせ」

テーブルには既にアイスコーヒーが並んであった。

これもいつもの事。

外回りの営業である真美あつてのこのランチだったり。

「梨乃のあれ頼んどいたから」

そういう真美はテーブルに両肘をついて組んだ手に顎なんか乗せてる。

もう閑話をせずに、と言う事なのだろう。

椅子を引くとコーヒーではなく、氷の沢山入った水を手に取った。

私にも準備が必要だっていうの。

「何だか私悪代官になったみたい。そんな顔しなくつても」

真美はくしゃつと笑うけど、みたいじゃなくて、そんなオーラは纏ってる、と口には出せない心の叫び。

勿体ぶるようなものでもないし、とランチが運ばれる前に話しておくのが懸命だよ。

決心して軽く息をのんだまさにその時

「そうそう、週末のあれ決めたから」

シレつと顔で言われた言葉に、意を削がれた私の頭は一瞬何が何だか？マークが点滅。

週末――。

昨日の職場がぼわつと浮かんできて自分の言い切ったあの会話だと気がついた。

真美ってば手配早すぎでしょ。

「決めたってあれだよ」

言葉を濁した私に

「そう、合コン」

はつきり告げられたその言葉。

アイツの事でいっぱいだって言うのに、合コンって。

「昨日あれだけ啖呵切っついて今更行けませんなんて言わないよね」
真美は面白がっているように見えるのだけど気のせい？

「あ、あのね」

上手に話せたかは解らない。掻い摘んで話そうと思っていたのに、真美から合コンの話聞いて混乱したせい、余計な事まで口走ったような気がする。

そう昨日の一部始終を。

真美は途中顰め顔をしたものの、時折頷きながら私の話を黙って聞いてくれた。

そして真美の第一声はというと

「問題なんてないじゃん」

とニヤリと不気味な笑み付き。

丁度そんな時料理が運ばれてきたものだから、ウェイターのお兄さんが真美に注視しちゃったり。

「あつ、それ私です」

何よりこの場から早く立ち去って欲しかった私は、両手にプレートを持ったままほんの数秒固まったお兄さんに手を伸ばした。

解るよ、真美のその毒っぽい笑みは武器にもなるから。

でも、早く行っておくれ。

「私の話聞いてた？」

プレートの隅っこに添えられたピクルスをフォークで突き刺して一睨みするものの。

「全部しっかり聞いてたよ」

とのほほんとした返事。

「だから、合コンまで気が回らないっていつか……」
言い淀んだ私に真美はズバリと言いつつ放った。

「プロポーズされて保留にしているんでしょ、馬鹿にされると思ってムカついてるんだったら新しい出会いを期待してもいいんじゃない？ 本当に梨乃の事を好きになる相手に出会うかもよ。あんな奴より、ね」

そんな真美の言葉に思わず反論してしまった。

「夢見る小中学生じゃあるまいし、お互いこの人しかいないなんてパターンはそうそう無いって解ってる。けどさ、バーゲンで値下げされた品物みたいなそんな言い方されたくないかった。嘘でもいいから、プロポーズはもっと——って思っちゃうじゃない。だから——」
なんかそんな自己分析していたらこみ上げてくるものがあって、大口開けてベーコンレタスサンドを頬張った。

「解ってるじゃん、だったらそう言えば良かったんだよ。告白して終わらせる気でいた癖に梨乃でどうしてこうムキになっちゃうんだか。でもそこが可愛いんだけどね。まっ合コンは決定事項だから宜しく」

細身な癖に昼間っからステーキランチなんて頬張りながら、真美が放った言葉は私をノックダウンさせるのに十分なパンチ力だった。

咀嚼をしながらも、真美の言葉を反芻し自分の心と葛藤した。

昨日といい、今回といい美味しいものを食べている気が全くしない。こんな自分にまたなるなんて。

正直真美との会話も上の空だった。

いつもだつたらもつとゆつくりしていくのだけど、真美はこれから商談に出掛けるらしく化粧室から戻ると店を出る事に。

真美の貰ったクーポン券で御手頃価格のランチ代を払うと、「じゃあ私行くね」と手を挙げた真美を呼びとめた。

「真美、やっぱり私合コン行かない」

アイツ以上のいい男はきつというと思う。

アイツ以上に私の事を思ってくれる人はきつと何処かにいると思うけど――。

言葉足らずな私の呼びかけに真美はいつもの澄ました笑顔で

「了解」

と、それ以上は何も言わずに背を向けた。

ついさっきは決定事項だからなんて言っていたのに。

少しだけモヤが晴れた私の心。

余裕の出来た会社までの道のりなはずなのに、お気に入りの淡いブルーのパンプスが跳ねていた。

旨いもの

「やりますか」

少しだけ伸びた髪を手首に巻いていた髪ゴムで一つに纏めると、給湯室で入れたコーヒーを一口含んでパソコンの電源を入れた。

真美の言う通り、私はあそこで玉砕するつもりでいたんだ。ムカつくプロポーズだったのには変わりないけど、受けて立ってやろうじゃない。アイツへの闘志が沸いてきたら仕事も断然やる気が出てきた気がした。

——大体ね、妥協なんて言われなくたって解ってるっていうの——若さは無いし、顔だって平凡凡。自分の事くらいよく理解しますとも。三十路女を舐めると痛い目に合うって思い知らせてやる。何だかオーホッホと高笑いをしたくなったみたい、それは母の十八番なはず。私って母さん似なのかしら？ いやいや私はあんなノー天気じゃないわよ。

そんな微妙なトリップをしながらも、気持ちを切り替えてからの作業は順調だった。

「仙崎、この案件って一昨年あたりにお前担当してたのに似たのあったって課長に言われたんだけど、どう？」

原田が差し出した資料を捲ると確かに記憶にあるそれと似ている感じだ。

「参考になるか解らないけど、作業ファイル送ろうか？」

私としては自然な会話だったのに

「何か久し振りに仙崎に会った気がする」
と原田。その真意は？

「マリッジブルーを通り越して破談になったりして」

ふんわり香るバラの香水は言わずとした片瀬だったり。ここのところ静かじゃないなんて思ったのにあっという間の復活だよ。気分がノッているから片瀬の言葉もいつもほど気にならず柔らかい笑みが出たと思う。

正直会社に結婚相手を求める事は悪い事じゃない。

一緒に働く姿を見れば相手の人となりも解るし、結婚してから失敗したというリスクだって少なくなるものなのかも。

私に無くて片瀬にあるものは若さ。片瀬はその武器を十二分に発揮している。

だからっていつて仕事を疎かにする事は違う、若くて仕事がテキパキ出来ると良い男が向こうから寄ってくると思うのだけだね。

部長に嫌味を言われつつ残業をしたあの日から、この課のみんなは本性を見たようで一線ひいて片瀬に接しているのが良く解る。片瀬もそれをようやくと察知したのだろう、依然と比べ上目使いが減ったような？

なんて、片瀬が結婚相手を見つけているかも解らないのに勝手な解釈をしている私って怪しいおばさんかも。

ざわついたフロアーの向こう側にいる江川の姿にちらりと視線を馳せ、顔が緩んだ。

あいつにターゲットを絞る事自体が間違っているのだけだね。

5日後の閉め切りのプレゼン資料もほぼ終わりにりかけた残業開始から30分後。

「仙崎、5番取って」

江川が受話器を持ち上げて、声を飛ばしてきた。

「どちらからですか？」

受話器に手を掛けながら負けじと大きな声を飛ばしてみるも江川の

顔はどこ吹く風。

なんだっていうの。呆れつつも受話器を取ると

「久し振りだね、仙崎さん」

ちよつとだけ皺がれたその声は懐かしい響き。

「お久し振りです、安藤会長。お元気でいらつしやいますか？」

先日江川との会話に出てきた安藤物産の会長からだった。

江川は話の内容を把握しているようで、受話器片手に安藤会長の言葉に頷きながら江川を見ると苦笑しながらも大きく頷いていて。

「では宜しくお願い致します」
と受話器を置いた。

最後に声を聞いたのはもう7、8年前なのに、この安藤会長の声はまるで最近聞いたかのように耳に馴染んで滲みいった。
やっぱり私って声フェチなのかしら？

「誰からだった？」

ひょいと顔を覗かせた原田に

「安藤物産の会長。近くにいるから課長同席で食事につき合っ
て欲しいって」

あともうちよつとだったのになあ。

机の上の資料をポンポンと揃えてパソコンの時計をみやると待ち合
わせまで後30分。

いくら近くにいていてもこっちの都合もあるでしょうに。
きっと江川には了解取ったに違いない。

私に判断を委ねるような事を言っただけ、こりゃ決定事項だね。

「安藤物産の会長と会食なんて、したい奴山ほどいるって知ってる

か？」

原田のちよつと呆れた声に

「そうかもね」

と会いたいけれど、ちよつと複雑なのよ。

幸い片瀬は就業時間きっかりに消えてくれたから良かったものの。後で部長、専務絡みで嫌味を言われるのは勘弁だわ。

「仙崎が用意出来たら行くぞ。お前そのまま直帰でいいから」

いつの間にか背中越しに江川がいた。

そのまま直帰でいいからなんて言うけど、もう終業時刻は過ぎてるって言うの。

「了解」

パソコンを切り上げ立ち上がった私に

「旨いもんご馳走になってこいよ」

なんて隣で聞いてた吉川に言われて

「うーんと美味しいのご馳走になってくる」

とロッカーに向かった。

化粧直して、着替えると鏡に写した自分の姿。

こんな格好でいいのだろうか？

黒いパンツに白いブラウス。

可愛げも何もない、どんな場所で食事をするのか解らないけれど失礼にならないかが心配だった。

せめて踵のあるパンプスでも履いていたら良かったのだけど、普段内勤の私はローヒールのパンプスで。

ちよつと過った携帯電話のあれ。

少しは様になるかしら、とストラップもどきのアンクレットを足首

に嵌めた。

課長は既にエントランスにいて、受付がいなくなった変わりに立ち
はだかつている警備員さんと談笑していた。

「お待たせしました」

「じゃあ行こうか」

警備員さんにお辞儀をして二人並んで会社のドアを潜った。

付き合っていた時だって、こんな風に一緒にドアを潜る事なんてな
かったから不思議な感じ。

ふと見上げた江川も少しだけ笑みを浮かべていたようで、もしかし
たら同じような事思っていたのかななんて。

まだ陽の差す時間に会社を出るなんて事は滅多にないだけにちよっ
と新鮮だった。

「で、何処に行くって？」

仕事モードを抜け出た私は敬語も抜けてまるでタイムトリップした
よう。

「梨乃、もしかしてフルコースとか期待してる？」

勿体ぶった物言いにさっさと教えろとばかりにわき腹を抓ってやつ
た。

良く知っている江川の数少ない弱点だった。

「やめろって。もう直ぐだから」

身体を振りながら、絞りだした江川の声に笑いがこみ上げる。

そう江川とはこんな心地良い関係だった。

向かっているのは駅だけど、果たしてこんなところに美味しい『も
とい』安藤会長が嗜むような高級料理があったのだろうか？ 首を
捻る。

江川はそのまま駅の階段を上り、改札口を通り過ぎてまた階段を下りた。
きつと私には教える気はないと察した私はそのまま江川についていく。

少しづつ賑わい始めた繁華街を通り抜け、一本裏道に入ると食欲をそそるいい匂いが漂ってきて思わずお腹を押さえてしまう。

真っ赤な赤ちようちに大きな文字で「炭火ホルモン」と書かれたその店の暖簾を――眼の前の背中が潜った。

「ここ？」

背中越しに掛けた声に

「ここ」

と首を捻り店に入っていく江川。

「らっしやい」

威勢のいい声が響く店内の片隅に安藤会長が陣取っていた。

「おおー待つてたよ」

既に焼酎を飲み始めていた安藤会長はご満悦らしい。

テーブルには赤くなり始めた炭火入りの七輪が置かれていた。

「江川君無理言つて悪かったね。久し振りだね、仙崎さん。これはうちの孫で宗太だ。ここま旨いぞさあ座って座って」

正直安藤会長がフランク過ぎて面食らってしまった。

慌てて挨拶をして腰を下ろすと江川が笑いを堪えているようで面白いくない。

「すみません、祖父が強引に誘ってしまったようで」

年の頃は私と同世代だろうか？ 宗太は本当にすまなそうに頭を下

げてしまった。

「とんでもない、光栄です」

慌てて放ったもんだから声が裏返ってしまった。

「仙崎さんはあんまりこういったお店には来ないかな？ 店はそのなんだ、古いけど味は保証するよ。適当に頼んでおいたから、好きなものを吞んで」

何かもう、安藤会長は普通のおじさんでしかなかった。

いつもスーツをビシッと決めて、顔はにこやかだけど目が鋭いあの会社の感じは全く無くて。

といいつつ私には優しくかった記憶しかないのだけどね。

遠慮なしにビールを頼んで、会長セレクトのホルモン焼きを嗜んだ。焼肉屋さんとはまた違うホルモンの美味しさに思わず顔がほころぶ。宗太も会長に負けじと朗らかで江川は会長に私生活を駄目だしされたり、久し振りに楽しい時間を過ごしているみたいだった。

そう会長の一言が出るまでは。

「そうそう、仙崎さんは江川君と結婚するとはかり思ってたのに正直驚いたんだよ、ねえ江川君」
と結構な爆弾発言。

「会長、もう過ぎた事ですから。なっ仙崎」
って江川も私に話を振るなっているの。なんて言っているのだから言葉に詰まる。

正直に私が江川に捨てられましたと言っても言っただろうかと思ったところ

「仙崎も婚約しまして、かなりの良い男だと評判ですよ」

と、言い始めた始末。

会長の視線が私の薬指に向かっていているのに気がついて思わず

「恥ずかしくて、会社にはしてこれないのです」

なんて言い訳しちゃったり。本当は突き返したんだけど。

「それって最近の話だったりする？ いや、実はコイツの相手に仙崎さんどうかと考えていたんだよ」

「じいちゃんっ」

「会長」

3人の声が揃ったのだった。

偶然と余計なひと言

会長の爆弾発言で一瞬微妙な間が生まれたものの

「いや、残念だったな」

なという会長のぼやきでその話は綺麗に終焉した。

びっくりしたなんてもんじゃない。

安藤物産といえば大手で今はまだ役職についてないとはいえ、経営者一族の——なんて恐ろし過ぎる。

でも、それはあくまでも会長の妄想であって、肝心の宗太が私相手に満足するとも思えず、もし私に婚約話がなかるうと結果は決まっていたというところだろう。

「はいおまち、センマイです」

渋い味を醸し出しているねじり鉢巻きの店主がテーブルに皿を置く
と会長は目を細めた。

「ところで先代はどうしていらっしゃるかな？」

店主は会長を見つめ

「今年で１７回忌になります」

と言うと壁を見上げた。

そこには今の親父さんに良く似たねじり鉢巻き姿のおじさんがカウンターで笑っている写真。

「それは失礼しました」

会長の言葉に店主と会長が互いに頭を下げ

「これは親父の一番お勧めでしたから。お客さんにまた食べて頂けて親父も喜んでいいます」

そう言つてカウンターへ戻つていった。

まだ会長が役職に着く前の営業の時に先輩に連れられて通つたらしいこの店。

時が経ち会社を背負うものとして忙しく過ぎて行く日々の中で忘れていた店を偶然通りかかり思いだしたらしい。

「もう一度会いたかったな」

そう呟いた会長は悲しそうに笑った。

食べてみると勧められ箸を伸ばしたセンマイとやはらは、中々噛みきれなくて正直美味しいとは思えなかったり。

でも懐かしい感じはした。

遠い昔に食べた事のあるような。

頭に浮かぶ幼い頃の私。

確か父の行きつけのホルモン屋で食べたような気がしなくもない。

センマイは私の中でノスタルジックな食べ物としてインプットされた。

「ところで、仙崎さんのお相手はどんな人なのですか？」

今まで聞き役に徹していた宗太さんが一番突っ込んで欲しくない話題を振ってきた。

会長は顔をこちらに向け、江川まで箸を止めてこっちを見ているし。

「どんな人かと……そうですね、しいて言えば、決断力のある人だと思います」

本当は俺様男つて言いたいけどまさか言えないし。ちょっと強引なこじつけだけど似たようなものね？

「やっぱり女の人つて頼りになる人がいいのでしょうね」

きつと褒めてくれているのだろうけれど、果たしてアイツが頼りになるかは疑問だよ。

この結婚自体が間違った方向かもしれないというより今の時点では本決まりの話ではないのだ。

「だったら、江川君の奥さんは幸せなのだろうね。何せわが社は随分と江川君にやり込められたのだから。会社にとったら江川君ほど会社にとって頼りになる存在はないのじゃないかな」

お酒が入っているからか、饒舌になった会長は江川に突っ込みたくてしかたないらしい。

のらりくらりとかわしながらも、答えている江川に笑えてしまう。ちよつと前だったら考えられなかった。

こうやって会社以外で江川と席を並べる事。

昔の事とはいえ、江川の私生活を聞く事なんて。

今私が冷静どころか穏やかな気持ちで江川の話聞いていられるのは他でもないアイツの存在なのだと思う。

この数カ月で綺麗さっぱり江川への未練が消えて無くなっていた。考えるのはアイツの事ばかり、これでいいのか悪いのか。

「宗太さんは何処の部署にいらっしゃるのですか？ 営業から外れて数年経ちますので失礼ながら安藤物産さんにはここのお伺いしていないのですが、兵頭専務や高木部長には随分とお世話になりました」

江川が放つ何の変哲もない会話だったけど、その後の会話に縁つてあるのだなと怖くなった。

「こいつは3男坊の羽根つ返りで、うちの会社にはいないのだよ」
会長はこの宗太さんにこそ会社を盛り立てて欲しいと願っていたようだ。

「私は大学病院で内科の医師をしています。今日は学会の帰りに拉致されました」

肩を窄めておどけているようだけど、私にはそのフリーズがドシリと胸に落ちてきて。

大学病院なんて数知れず、まさかねと思ったのだけど。

「まあ、身内に医者がいるっていうのも悪くないか、とこの歳になつてからようやくと思えてきたんだよ。腕は確かなようだから、江川君も仙崎さんも頼ってやってくれ、なあ宗太」

「はい勿論です。何かあったら困りますがもしもの時には声掛けて下さい。4 駅先の中央大学病院にいますから」

平然を装いながら、宜しくお願いしますと頭を下げる私と、口を半開きにした江川。

頼む、頼むからそれ以上口を開いてくれるなと念を送ってみたのだけど――。

「何が宜しく願いますだ」

そう言つて私の後頭部に軽い衝撃。

だ、か、らー。私の態度を見て察しろっていうの。話したくないオラ出しているの解らないかな？

「きつと、照れなのでしょうね。まさかこんな偶然があるなんて、いや仙崎のお相手も宗太さんと確か同じ大学病院の医師なんですよ」

言いやがった、言いやがったよコイツ。

この間の専務室から戻った時といい、どうしてこう余計な事を話すかな。

勘弁して欲しいよ全く。

「本当ですか？ どなただかお聞きしてもいいですか？」

ほら、宗太さんも食いついてきちゃったし。

お聞きしてもいいですか？ なんて言ってるけど駄目ですって言うたら言わなくてもいいのだろうか？

諦めなくてはいけない状況なのだろうか？

「大学病院の先生って大勢いらっしゃるでしょ。きっと解らないのじゃないのかな？」

ほら察して、言いたくないって気がついて。

返事をするって決めたけど、これ以上おかしなことだけにはなりたくないんだよ。

「何科にいらっしゃるのですか？」

聞く気満々に見えるのは気のせいじゃないよね。

「小児科に」

頼む、知らないと言っておくれ。

そう思った私の願い虚しく

「もしかして、小川？」

半信半疑という感じで紡いだ声は大正解でありまして。

私の顔は見事に引き攣りましたとも。

こういう時は察しの良い宗太さん。

「へえー噂の小川の婚約者さんだったとは。凄い偶然に感謝しなくちゃだ。じいちゃんサンキュウな」

もうね、私泣きが入るかと思いました。

神様がいるならば、明日病院で宗太さんとアイツの遭遇だけは避けてくれと願いたい。

「お知り合いだったのですか、本当に凄い確率ですね」と江川まで。

会長に至っては

「まだ婚約の段階ならば、うちの宗太にも可能性はあるとちよつぴり思っていたのだが、お前の知り合いならそうもいかな」と言い出した。

そんな私の受難は更に続いた。

油断していたとはまさにこのことで、バイブにするのを忘れた私の携帯が鞆の中で音を立てた。

急いで出てきたのもあるけれど、この失態は大きすぎるのじゃないだろうか。

まさか昨日の今日で電話が掛ってくるなんて誰が思うのか。

そう、この着信はまさしくアイツのものでして……。

どうしてここまでしつこいかな。

気がつかないフリをするのも限界がある。

眼の前の会長も隣の江川もそして向かいの宗太までが、私の鞆に視線を促している。

「いいのですか？　もしかして噂をすれば何とかで小川だったり？」

宗太の言葉にギョツとしてしまった私は素直なのだと思う。

それにくわえ、宗太さんの嬉しそうな顔と言ったら。

「違いますって」と笑ってみせたものの携帯を一向に取りださない私を訝しそうに見つめる6つの眼。

耐えきれなくて、鞆每持ち上げて

「すみません、ちよつと失礼します」

と席を立った。

背中に視線をビシバシと感じながら、未だ鳴りやまない携帯を掴む

と小走りに店を駆け抜けた。

暖簾をくぐると同時に携帯を耳にあてると

「よお」

と一言。

「よお」

お店の壁に凭れながら、今更ながらに緊張してきた。そうアイツは昨日日本気だと言ったのだから。

「会社じゃなさそうだな」

裏路地とはいえ人通りのある路地は静けさとは縁遠い。

「うん、今昔お世話になった取引先の会長と課長と一緒に食事してたところ。用事だったら後で電話する——」

言葉を言い終わる寸前に私の前に大きな影が出来た。

呆けた私の前で、片手を翳してお辞儀をすると突然やってきた宗太は事もあるつか私の携帯を指さし「婚約者の小川？」

語尾をあげて聞くけれど核心あつての名前だろうに、さらりと発する宗太は私に対して満面の笑みでして。

「仙崎さんちよつと変わってもいい？」

私も耳元で囁くもんだから、携帯にばつちり声が通ってしまったよううで。

「誰？」

アイツの声は私を通り越して企んでいそうな笑みの宗太さんにもよく聞こえましたとも。

「あ、あのね、偶然なだけだよ」

そこまで言った私の手元に宗太の手が触れてすつと抜かれた。
頼む、宗太さん私に携帯を返しておくれ。

顔の前に手を伸ばしてみるものの手で制されちゃってる私ってどうなのだろう。

「俺だよ俺。安藤だよ。実は今日学会の帰りに祖父に連れてこられた店で仙崎さんと課長さんを呼びだしててさ。お前の婚約者だっていうのにもう驚いてさ、それも聞けよ、じいさん、俺に仙崎さんを結婚相手として紹介しようとしてたんだから笑っちゃうだろ」

「……」

さっきは良く聞こえた声が返ってこなかった。

「はい、もうそこまで良いでしょ？ 返して下さい」

思いの他はつきり出た言葉に圧倒されたのか

「という事だから、また明日な」

言いたい事が言えたせいか満足そうに笑ってすんなり返ってきた携帯。

宗太の背中が暖簾の奥にしっかりと引っ込んでから、小さくため息をついて携帯を耳に宛てた。

「驚いたよ、まさかアンタの同僚があのお安藤物産のお孫さんなんておどけて言っただつものの言葉にも反応が無くて。」

「聞こえてる？」

思わずそう聞いてしまった。

「ああ」

と一言発した後、思いもしない言葉が返ってきた。

「あいつだつたら白馬の王子様になれるかもな」
一瞬何を言っているのか解らなかった。

白馬の王子？ あいつ？

理解をするまで数秒。全く余計な事しやがって。会長の孫じゃなかったらグーでパンチしてやるとこだよ。
ふーっと長めの息を吐いて息を吸いなおした。

「今何処？」

そうちゃんと会って話さないといけない。
こんな電話一つでただでさえややこしい糸をほつれさす訳にはいかなかった。

「家」

コイツは単語で返しやがった。

「だから、家何処？」

仮にも婚約ごっこをして妥協のプロポーズをされた相手だつていうのに、今の今まで家が何処だか解らなかった私も私だよ。

「なんで」

ほら、また単語だよ。あつたまきた。

「なんでじゃないわよ、このすつとこどつこい！ 会って話をしようとしているの解らないの？ さつさと言いなさいよ」

私の放った言葉に通り過ぎゆく人がぎょつとして振り返ってたけどそんなの構わなかった。

「八軒町」

また単語だったけど、ようやっと聞き出せた駅名に安堵した。

「ついたら電話するから、迎えにきなさいよね」

言い終えた私はそのままアイツの返事も待たずに電話を切ってしまった。

勢いというものは恐ろしい。

さて、何と言って先に帰ろうか。

そう考えた私だったけど、店に入った途端に注目を浴びているのに気がついた。

店の奥に座っている会長も江川も笑いを堪える事なく噴き出し始めてるし。

宗太だけは顔を顰めてるのがせめても救いだろうか。

「久し振りに聞いたよ、すつとこどつこいなんて言葉」

江川の言葉に背中が凍った気がした。

もしかしくなくても聞こえてましたよね？

「すみませんでした。調子にのってしまつて」

深々とお辞儀をされてはもつと恥ずかしい訳でして。

でも、この宗太のお陰で私の行く末が少し定まったような気がしないでもない。

「仙崎さん今日は楽しい時間をありがとう、またご一緒させて欲しいと思うのだからどうかね？ 今度は宗太抜きでね」

よっぽど面白かったのだらう会長の目にうつすら涙があるような。

いえもう結構です、とも言えず。

「はい、また美味しいお店教えてください」

美味しいお店だったけど、恥かしすぎてもう二度とこれないだらう

このホルモン焼屋。

「仙崎さんから嬉しい返事を貰ったところで、ほら早くいかないと待っているのだろ？」

目を細めた会長の言葉で鞆から財布を取り。

先に席を立つ非礼をお許しくださいと数枚のお札を取り出すと

「仙崎さんから取れないよ。早く行っておあげなさい」

一度出したお札を引つ込めるのには勇気がいったけど、江川もここはご馳走になろうと言うものだから、もう一度深くお辞儀をして、店を出た。

目指すは八軒町。

私の運命が動きだす場所へ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9888f/>

むかつくけれど

2011年11月6日10時17分発行